

卿ニ届出ヘシ

第十條 其有心故造私罪ニ入ル者ハ職務上ノ罪ト雖モ之ヲ司法官ニ移シ本屬長官專ニ處分スルコトヲ得ス

○太政官達番外 明治九年六月八日

院省使廳 府縣

本年四月第三十四號達官吏懲戒例ノ儀ニ付尙又左ノ通相達候事

一 準官吏並ニ等外吏ハ本例ニ照シテ處分シ雇其他種々ノ名義ヲ以テ公事ニ關スル者ハ本屬長官ノ見込ヲ以テ適宜處分スヘシ

一 官國弊社神官並ニ教導職ノ過失發見スル時ハ所在地方官ヨリ其狀ヲ具シテ教部省ヘ届出ヘシ

(明治十三年三月第二十三號達ヲ以テ删除)

一 巡查及ヒ學校其他諸工場等ノ如キ別ニ懲罰規則有之分ハ本例ノ限ニアラス  
一 民費ヲ以テ俸給ニ充ル者ノ罰俸ハ各其民費ニ割戻スヘシ

(參照)

○山梨縣知事照會 明治二十九年九月四日

巡查懲罰例又ハ官吏懲戒例ニ依リ免職セラレ若クハ故ナク巡查ヲ辭シ二年ヲ經過

セサモルノハ巡查採用規則ニ依リ採用不相成答ノ處右懲戒免職者中ニハ其情狀ニ輕重アリ例ヘハ署員ト不折合ノ結果又ハ詰替ノ際一身上ノ事情ノ爲メニ免職セラレタルモノ又ハ或ル事情ヨリ署長ノ感情ヲ害シ爲ニ格別ノ非行ナキモ紀律上不得止免職シタルモノ、如キ其情狀ノ輕キモノ及ヒ又巡查ニシテ被告人ヲ拷問シ若クハ一時收賄等ノ嫌疑ヲ以テ刑事被告人トナリ拘留セラレタル爲メ不得已免職處分セシモ公判ニ於テ其無辜ノ事情明瞭シ免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受クルモノアリ是等ノモノニ對シテハ二年ノ制限ヲ適用ハ事情憫諒スヘキモノ、ニ有之殊ニ從來本縣ノ如キハ巡查志願者ニ乏シク目下非常ノ欠員ニシテ職務上差支居リ殊ニ現今中央鐵道駿甲鐵道工事モ着手シ追々多數ノ工夫入込ムヘク從テ警察上一層取締ヲ要スルノ折柄ナルヲ以テ前記事情ノ如ク其情狀憫諒スヘク且改換ノ情著シキモノハ二年ノ經過ヲ待タス特ニ採用致度者ニ有之現ニ大津事件馬關事件ニテ被免本官ノ知事ニシテ未タ久シカラスシテ被免懲罰候ノ例モ有之右等ノ者ハ懲戒ヲ免シ採用致度右等ノ類例ハ有之間布歟承知致度差掛居リ候ヲ以テ電報ヲ以テ否ヤ御回報相成度此段及照會候也

○警保局長回答 明治廿九年九月十一日

懲戒處分ニ依リ免職シタル巡查ト雖其情狀ニ依リテハ退職後二年未滿ナルモ特ニ懲戒處分ヲ解免シ更ニ採用スルコトヲ得ルヤ否ノ件御問合ノ趣了承御申越ノ如キ事情ニ原由スルモノニ在テハ懲戒特免ノ限ニアラスト思考致候此段及回答候也

### 第十三章 恩給扶助

○法律第四十三號 明治二十三年六月二十日

#### 官吏恩給法

第一條 文官判任以上ノ者退官シタルトキハ此法律ノ規定スル所ニ依リ恩給ヲ受クルノ權利ヲ有ス

第二條 在官滿十五年以上ノ者左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ終身恩給ヲ給ス

一 年齢六十歳ヲ越エ退官ヲ許シタルトキ

二 傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ其職ニ堪ヘス退官ヲ許シタルトキ

三 廢官廢廳若クハ官廳事務ノ伸縮又ハ非職滿期ニヨリ退官シタルトキ

第三條 左ニ掲クル事項ノ一ニ當ル者ハ前條ノ年限ニ滿タサルモ終身恩給ヲ給シ尙ホ其最下金額十分ノ七マテノ増加恩給ヲ給ス

一 公務ニ因リ傷痍ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘス退官シタルトキ

二 公務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ願ミルコト能ハスシテ勤務ニ

従事シ爲ニ疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ

其職務ニ堪ヘス退官シタルトキ

第四條 滿五年以上國務大臣ノ職ニ在ル者退官シタルトキハ第二條ノ制限ニ拘ハラズ恩給ヲ給ス

第五條 恩給ノ年額ハ退官現時ノ俸給ト在官年數トニ依リ之ヲ定ム即チ在官滿十五年以上十六年未滿ニシテ退官シタル者ノ恩給年額ハ俸給年額ノ二百四十分ノ六十トシテ十五年以降滿一年毎ニ二百四十分ノ一ヲ加ヘ滿四十年ニ至テ止ム但在官四十年以上ノ者ニ給スヘキ恩給ハ四十年ノ額又十五年未滿ノ者ニ給スヘキ恩給ハ十五年ノ額トス

非職滿期ニ由テ退官シタル者ノ恩給ハ其在職最終ノ俸額ニ依テ之ヲ算定スハ實際官及領事貿易事務官等ノ恩給ハ其官等ニ對スル普通文官ノ俸額ニ依テ之ヲ算定ス

兼官ニ依テ受クル加俸ハ恩給年額ヲ算定スルニ當リ之ヲ除算スヘシ  
恩給年額圓位未滿ノ數ハ圓位ニ滿タシム

第六條 恩給ヲ受ケ又ハ恩給ヲ受ケスシテ退官シタル者在官中ノ公務ニ起因スル傷疾疾病引續キ重症ニ趨キタルトキハ其事由ヲ詳悉シ左ノ期限内ニ申出レハ査覈ノ上相當ノ恩給ヲ給ス

- 一 一肢ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ハ退官後二個年
- 二 一肢ヲ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失ヒ又ハ兩眼ヲ盲シ若クハ二肢ヲ亡シ若クハ之ニ準スヘキ者ハ退官後三個年

第七條 在官年數ハ判任官以上初任ノ月ヨリ起算シ退官ノ月ヲ以テ終リトス明治四年八月以前ヨリ任官セラレタル者ハ同年同月ヨリ起算ス但本項ニ掲クル者退官スルトキハ明治四年七月以前ノ勤務ニ對シテハ同年同月ノ現官等ニ相當スル月俸ノ半額ヲ以テ在官年數ノ一個年ニ當テ其年數ニ應スル金額ヲ一時支給ス

第八條 左ニ掲クル月數日數ハ在官年數中ニ算入スヘシ

- 一 判任以上出仕官ニ在ルノ月數
- 二 武官ヨリ文官ニ轉シタル者又ハ軍人恩給ヲ受ケスシテ現役ヲ退キタル後文官ニ任シタル者ハ其現役中ノ日數

- 三 從軍年加算ノ年月
- 四 非職及休職中ノ月數
- 五 退官ノ後再ヒ任官シタル者ハ前在官ノ月數
- 六 宮内官ヨリ文官ニ轉シタル者又ハ恩給ヲ受ケスシテ宮内官ヲ退キタル後文官ニ任シタル者ハ宮内判任官以上在官中ノ月數

第九條 左ニ掲クル月數及日數ハ在官年數中ヨリ除算スヘシ

- 一 年齡二十歳未滿者ノ在官月數
  - 二 高等官試補及判任官見習中ノ月數
  - 三 郡區書記ヲ除クノ外政府ヨリ俸給ヲ受ケサル官職ニ在ル月數及商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニ在ル月數
  - 四 御用掛履等外出仕勤仕ノ月數
  - 五 第八條第二ニ掲クル者在テハ軍人恩給法ニ依リ除算スヘキ日數
  - 六 自己ノ便宜ニ依リ退官シタル後又ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官シタル後再ヒ任官シタル者在テハ其前官ノ月數
- 第十條 文官ニシテ從軍シタル者ハ軍人恩給法ノ算則ニ照シテ其從軍年ヲ加算

ス

第十一條 恩給ヲ受クル者再ヒ官ニ就キ滿一年以上在官シタル後退官シタルトキハ左ノ區別ニ依リ恩給ヲ給ス

- 一 退官現時ノ俸給前後相同シカラサルトキハ前官年數ヲ後官ノ年數ニ通算シ後官ニ對スル恩給額ト前ノ恩給額トヲ比較シ其多キ方ヲ給ス
- 二 退官現時ノ俸給前後相同シキトキハ在官年數ニ依リ恩給ヲ増加ス但前官十五年未滿ニシテ恩給ヲ受ケタル者ニ在テハ前後通算シテ十六年以上ニ至ラサレハ増加セス

第十二條 恩給ヲ受クル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ恩給ヲ剝奪ス

- 左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其間恩給ヲ停止ス
  - 一 判任以上ノ官ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受クルトキ但商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニ在ルトキハ此限ニアラス
  - 二 公權ヲ停止セラレタルトキ

第十三條 年齢未タ六十歳ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニヨリ退官シタル者又ハ懲

戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官シタル者ハ恩給ヲ受クルノ資格ヲ失フ

法律ヲ以テ設立シタル議會ノ議員ト爲リタルノ故ヲ以テ退官シタル者ハ恩給ヲ受クルノ資格ヲ失ハス

第十四條 政府ヨリ俸給ヲ受ケサル官吏及商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官吏並ニ高等官試補判任官見習ハ恩給ヲ受クルノ權ナキモノトス但郡區書記ハ此限ニアラス

商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官吏並ニ高等官試補判任官見習ニシテ公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ此法律第三條ニ該當スル者ニ限り退官又ハ罷免現時ノ俸給四分ノ一ヲ終身支給スルコトヲ得

第十五條 恩給支給ノ期ハ退官ノ翌月ヨリ始マリ死亡ノ月ヲ以テ終ルモノトス

第十六條 恩給ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三箇年内ニ請求セサレハ其權利ヲ拋棄シタルモノトス

第十七條 恩給ノ支給ハ本屬長官ノ證明ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ内閣總理大臣之ヲ裁定ス

行政上ノ處分ニ依リ恩給ニ關スル權利ヲ障害セラレタリトスル者ハ六個月以

内ニ恩給局ニ具申シテ裁決ヲ請フコトヲ得  
其裁決ニ服セサル者ハ一個年以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但左ノ事件  
ニ關シテハ恩給局ノ裁決ハ終審確定ノモノトス

一 傷疾疾病ノ原因及其輕重

二 職務ニ堪ユルト否ラサルト

第十八條 恩給ハ賣買讓與質入書入スルコトヲ得ス又ハ負債ノ抵償トシテ差押  
フルコトヲ得ス

第十九條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ恩給ヲ受ケタル者ハ總テ其恩給令ニ  
依ルヘシ但其權利消滅及停止ハ此法律ニ依ル

第二十條 此法律施行前ニ退官シタル者ノ恩給ハ明治十七年達官吏恩給令ニ依  
ルヘシ但此法律施行ノ日ヨリ三個年內ニ請求セサレハ之ヲ受クヘキ權利ヲ抛  
棄シタルモノトス

第二十一條 此法律ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス  
従前ノ命令ニシテ此法律ニ抵触スルモノハ總テ廢止ス  
○閣令第三號 明治二十三年七月二日

官吏恩給法施行規則

第一章 恩給ノ請求

第一條 官吏恩給法第二條第三條第六條及第七條第二項第十四條第二項ニ依リ  
恩給ヲ受クヘキ者ハ恩給請求書ヲ退官當時ノ本屬廳ノ長官ニ差出スヘシ  
但廢官廢廳ニ當リタルトキハ其事務ノ引繼ヲ受ケタル官廳ノ長官ニ差出ス  
ヘシ

第二條 官吏恩給法第四條ニ依リ恩給ヲ受クヘキ者ハ恩給請求書ヲ内閣總理大  
臣ニ差出スヘシ

第三條 恩給請求書ニハ左ノ書類ヲ添付スヘシ

一 在官中履歷書

二 市町村長ノ證明シタル戶籍調書

但官吏恩給法第十四條第二項ニ掲ケタル者ハ之ヲ添付スルニ及ハス

第四條 公務ノ爲メ傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ恩給ヲ請求スル者ハ前條ニ掲  
クル書類ノ外左ノ書類ヲ以テ其事實ヲ證明スヘシ官吏恩給法第六條ニ依リ恩  
給ヲ請求スル者亦同シ

一 現認證書又ハ之ヲ證スル公文ノ寫若クハ口供書  
二 醫師ノ診斷證書

第五條 恩給ノ請求ヲ受タル各廳長官ハ查覈ノ上請求ノ理由アリト認ムルキハ  
請求者ノ在官年數及恩給年額計算書ヲ作り證據書類ヲ添ヘ内閣總理大臣ニ差  
出スヘシ各廳長官ニ於テ請求ノ理由ナシト認ムルトキハ意見ヲ具シテ之ヲ内  
閣總理大臣ニ差出スヘシ

第六條 内閣ニ於テ前條ノ請求ヲ認可シタルトキハ恩給證書ヲ作り本屬廳ヲ經  
テ本人居住地ノ地方廳ヲシテ之レヲ下付セシム但シ一時ノ支給ニ係ルモノハ  
辭令書ヲ用ユ恩給證書若クハ辭令書ヲ下付シタルトキハ内閣ハ其ノ旨ヲ大藏  
省ニ通報スヘシ

第二章 恩給ノ支給

第七條 恩給ハ其年額ヲ四分シ四月七月十月一月ニ於テ其前三箇月分ヲ大藏省  
ヨリ本人居住地ノ地方廳ヲ經テ支給ス但權利消滅ノトキ及一時支給ノ金額ハ  
期月ニ拘ハラズ之ヲ支給ス

第八條 恩給ヲ受クル者其金額ヲ受領セントスルトキハ恩給證書ヲ以テ其受領

權アルコトヲ證明スヘシ

第九條 恩給ヲ受クル者他府縣ニ轉籍若クハ寄留スルトキハ從來ノ居住地ノ地  
方廳及轉籍若クハ寄留地ノ地方廳ニ其旨ヲ届出ヘシ

地方廳ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ大藏省ニ通知シ各廳間互ニ其者ニ  
係ル恩給支給方ノ受繼ヲ爲スヘシ大藏省ニ於テ前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ  
内閣恩給局ニ通知スヘシ

第十條 官吏恩給法第十二條ニ當リタル者ハ恩給支給ノ終始ハ左ノ各項ニ依ル  
ヘシ

一 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日日本臣民タ  
ルノ分限ヲ失ヒタルトキハ其失ヒタル日ヲ以テ支給ヲ終ル

二 判任官以上ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受クルキハ俸給ノ支給ヲ始ムル日ノ前  
日ヲ以テ支給ヲ終リ其退官シタルキハ俸給ノ支給ヲ終リタル日ノ翌日ヨ  
リ支給ヲ始ム

三 公權ヲ停止セラレタルトキハ禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ監視ニ付セラル  
ヘキ確定裁判ノ宣告ヲ受タル日ヲ以テ支給ヲ終リ刑期滿限ノ日ノ翌日ヨ

リ支給ヲ始ム

第十一條 官吏恩給法第七條第二項ニ掲タル月俸トハ明治四年六月東京淺草米廩ノ平均相場ニ依リ當時ノ官祿一ヶ月分ニ相當スル金額トス

第十二條 官吏恩給法第三條ニ掲タル最下金額十分ノ七マテノ増加恩給ノ等差ハ左ノ如シ

第一項 兩眼ヲ盲シ若クハ二肢以上ヲ亡シタルトキ十分ノ七

第二項 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ十分ノ六

第三項 一肢ヲ亡シ若クハ二肢ノ用ヲ失ヒタルトキ十分ノ五

第四項 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ十分ノ四

第五項 一眼ヲ盲シ若クハ一肢ノ用ヲ失ヒタルトキ十分ノ三

第六項 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ十分ノ二

傷痍疾病ノ等差ハ明治十八年達文官傷痍疾病等差例ニ依ル

### 第三章 恩給ノ停止

第十三條 恩給ヲ受タル者重罪若クハ禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ監視ヲ付受ケタルトキハ其確定裁判ノ宣告ヲ爲シタル裁判所ヨリ之ヲ大藏省ニ通知スヘシ

第十四條 官吏恩給法第十二條第二項ノ第一ニ當ル者アルトキハ其任用シタル官廳ヨリ大藏省ニ通知スヘシ解任シタルトキモ亦同シ但此通知書ニハ本人恩給ノ支給ヲ受ケタル地方廳名及俸給ノ支給ヲ始ムル日(解任ノトキハ支給ヲ終リタル日)ヲ付記スヘシ

第十五條 恩給ヲ受クル者死去シタルトキハ其遺族ヨリ地方廳ニ届出ヘシ其遺族ニシテ扶助料ヲ受クヘキ權利ナキトキハ死去ノ届出ヲ爲スト同時ニ恩給證書ヲ返納スヘシ

地方廳ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケルトキハ直ニ大藏省ニ通知シ其恩給證書ハ内閣恩給局ニ送付スヘシ

第十六條 大藏省ニ於テ第十三條第十四條第十五條ノ通知ヲ受ケタルトキハ之ヲ内閣恩給局ニ通知シ且第十三條第十四條ノ場合ニ於テハ地方廳ニ通知シテ其恩給ノ支給ヲ停止シ又ハ復給セシムヘシ

地方廳ニ於テ此通知ヲ受ケタルトキハ其恩給ヲ剝奪スヘキモノハ恩給證書ヲ收メテ内閣恩給局ニ送付スヘシ

### 第四章 雜則

第十七條 水火災盜難等ニ由リ恩給證書ヲ亡失シタルモノハ居住地ノ地方廳ニ届出ヘシ

地方廳ニ於テ前項ノ届ヲ受ケタルトキハ其事實ヲ調査シ亡失ノ事由ヲ具シテ内閣恩給局ニ申出ヘシ此場合ニ於テ恩給局ハ恩給證書ノ謄本ヲ作り地方廳ヲ經テ本人ニ下付スヘシ

前項恩給證書ノ謄本ハ恩給證書ト同一ノ効力アルモノトス

第十八條 恩給ヲ受クル者改氏名シタルトキハ居住地ノ地方廳ニ届出ヘシ地方廳ハ恩給證書ノ裏面ニ其事實ヲ記載シ長官署名捺印ノ上本人ニ下付シ其旨ヲ内閣恩給局及大藏省ニ通知スヘシ

第十九條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ恩給ヲ受クルモノ左ノ場合ニ於テハ本則ニ依ル

- 一 死去又ハ權利消滅又ハ停止ノトキ
- 二 恩給證書ヲ亡失シタルトキ
- 三 改氏名又ハ他府縣ニ轉籍若クハ寄留スルトキ

第二十條 官吏恩給法第二十條ニ依リ恩給ヲ請求スル者ハ本則ニ依ルヘシ

第二十一條 市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ本則ニ依リ市町村長ノ爲スヘキ職務ハ區戸長ニ於テ之ヲ行フヘシ

○法律第四十四號 明治二十三年六月二十日

官吏遺族扶助法

第一條 文官判任以上ノ者左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其遺族ハ此法律ノ規定スル所ニ依リ扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有ス但第二條ノ納金ヲナスヘキ義務ナキ者ノ遺族ハ此限ニ非ラス

- 一 在官十五年以上ノ者在官中死去シタルトキ
- 二 在官十五年未滿ノ者公務ノ爲メ死去シタルトキ
- 三 恩給ヲ受クル者死去シタルトキ

第二條 文官判任以上ノ者ハ其俸給百分ノ一ヲ國庫ニ納ムヘシ

第三條 交際官及領事貿易事務官等其俸給普通文官ヨリ多額ナルトキハ普通文官ノ俸給ニ依リ少額ナルトキハ現ニ受クル所ノ俸給ニ依リ第二條納金ヲ爲スヘシ

政府ヨリ俸給ヲ受ケサル官吏及商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官吏並ニ高等官試補



判任官見習ノ俸給及兼官ニ依テ受ケタル加俸ニ對シテハ第二條ノ納金ヲ要セス  
第四條 寡婦扶助料年額ハ亡夫ノ受ケタル若クハ受クヘキ恩給年額三分ノ一ト

公務ノ爲メ受ケタル傷病ニ原因シテ死去シ又ハ非常ノ勞動及困苦ヲ忍ビ勤務ニ從事シ爲メニ發病死去シ又ハ公務ニ依リ傳染病者ニ接シ該病毒ニ感染シテ死去シ又ハ戰地ニ於テ若クハ公務旅行中流行病ニ罹リ死去シタル者ノ寡婦扶助料ハ亡夫ノ俸給ニ對シ官吏恩給法第五條ニ依リ算出シタル恩給年額三分ノ二トス

扶助料年額圓位未滿ノ數ハ圓位ニ滿タシム

第五條 寡婦ナキトキ又ハ扶助料ヲ受ケタル寡婦死去シ若クハ權利消滅シタルトキハ其扶助料ヲ孤兒ニ給ス

第六條 孤兒扶助料ハ數子アルトキハ家名繼襲者ニ給シ戸主ニ非ラサル者ノ孤兒ニ在テハ長子ニ給ス其繼襲者及長子死去シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿タルトキハ順次年少者ニ轉給スルモノトス但家名繼襲者ヲ除クノ外男子ヲ先ニシ女子ヲ後ニス

第七條 恩給ヲ受ケタル者ノ寡婦ニシテ其夫退官後結婚シタル者ハ扶助料ヲ受ケルコトヲ得ス

第八條 此法律ニ於テ孤兒トハ年齢二十歳未滿ノ男女子ニシテ未タ結婚セサル者ヲ云フ但養男女子ハ家名繼襲者ニ限ル

第九條 扶助料ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル月ノ翌月ヨリ之ヲ給ス

第十條 扶助料ヲ受クヘキ寡婦及孤兒ナク若クハ扶助料ヲ受ケタル寡婦及孤兒ノ戸籍ヲ去リ若クハ死去シ若クハ權利消滅シタルトキ父母又ハ祖父母アルトキハ寡婦ニ相當スル扶助料ノ全額ヲ其父母又ハ祖父母ニ終身給スルコトヲ得其扶助料ハ先ツ父ニ給シ其父存在セサルトキ若クハ權利消滅シタルトキハ母ニ給ス母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ轉給スルハ順次此例ニ依ル

第十一條 扶助料ヲ受ク可キ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ死去シタル者ノ戸籍内ニ在ル二十歳未滿又ハ廢疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姉妹アリテ之ヲ給養スル者ナキトキハ寡婦ニ相當スル扶助料一個年分ヨリ少ナカラス五個年分ヨリ多カラサル金額ヲ人員ニ拘ハラズ一時間限リ其兄弟姉妹ニ給スルコトヲ得

第十二條 扶助料ハ之ヲ受クヘキ權利ノ生シタル日ヨリ三箇年内ニ請求セサレハ其權利ヲ拋棄シタルモノトス

第十三條 扶助料ハ賣買讓與質入書入スルコトヲ得ス又負債ノ抵償トシテ差押フルコトヲ得ス

第十四條 扶助料ヲ受クルノ權利ハ左ノ時ヨリ消滅ス

一 寡婦死去又ハ婚嫁シ若クハ戸籍ヲ去リタル月ノ翌月

二 孤兒死去又ハ婚嫁シ又ハ他家ノ養子女トナリ又ハ年齢二十歳ニ滿チタル月ノ翌月

三 父母祖父母死去シ又ハ戸籍ヲ去リタル月ノ翌月

第十五條 孤兒二十歳ニ滿ツルモ癡疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハス他ニ給養スル者ナキトキハ寡婦扶助料ノ三分ノ一ヲ其ノ孤兒ニ各終身給スルコトヲ得但シ一戸籍内ニ寡婦ト同額ノ扶助料ヲ受クル者アルトキハ其ノ間之レヲ給セス

第十六條 扶助料ヲ受クル者日本臣民タルノ分限ヲ失ヒ若クハ重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ扶助料ノ支給ヲ廢ス

公權ヲ停止セラレタルトキハ其間支給ヲ停止ス

扶助料ヲ受クル者公權停止中ハ其轉給ヲ受クヘキ者ニ之ヲ給ス

第十七條 在官十五年未滿ノ者在官中公務ノ故ニアラスシテ死去シタルトキハ其遺族ニ一時扶助金ヲ給ス

前項ノ扶助金ハ在職最終ノ俸給年額百分ノ一ヲ在官年數ニ乗シタル額トス但一年未滿ノ在官月數ハ計算セス

第十八條 扶助料ノ支給ハ地方長官ノ申牒ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ内閣總理月大臣之ヲ裁定ス

内行政上ノ處分ニ因リ扶助料ニ關スル權利ヲ障害セラレタリトスル者ハ六個月以内ニ恩給局ニ具申シテ裁決ヲ請フコトヲ得其裁決ニ服セサル者ハ一個年以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第十九條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ扶助料ヲ受ケタル者及恩給ヲ受ケタル者ノ遺族扶助料ハ總テ其恩給令ニ依ルヘシ但其權利消滅及停止ハ此法律ニ依ル

第二十條 此法律ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス

○閣令第四號 明治二十三年七月二日

官吏遺族扶助法施行規則

第一章 扶助料ノ請求

第一條 官吏遺族扶助法第一條第一第二及第十七條ニ當ル者アリタルトキハ本屬廳ヨリ死者ノ履歷書ヲ其遺族ニ下付スヘシ遺族ハ之ヲ以テ扶助料又ハ一時扶助金請求ノ證ト爲スヘシ

第二條 官吏遺族扶助法第一條第三ニ當ル者ノ遺族ハ其恩給證書ヲ以テ扶助料請求ノ證ト爲スヘシ

第三條 官吏遺族扶助法第四條第二項ニ當ル者アリタルトキハ本屬廳ニ於テ事實ヲ查覈シ其傷痕若クハ疾病ノ公務ニ起因シタル證據トナルヘキ書類及醫師ノ診察ヲ爲サシメタル場合ニ於テハ其診斷書ヲ併セテ其遺族ニ下付スヘシ遺族ハ之ヲ以テ扶助料請求ノ證ト爲スヘシ

第四條 扶助料ヲ受クル者死去シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿チタルトキ其扶助料ノ轉給ヲ請フ者ハ前者ノ扶助料證書ヲ以テ請求ノ證ト爲スヘシ  
第五條 公權停止ニ因リ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ハ確定裁判ノ宣告書寫ヲ以

テ請求ノ證ト爲スヘシ

第六條 官吏遺族扶助法第十一條及第十五條ニ當ル者ハ其事由ヲ詳記シ廢疾不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル者ハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ扶助料ヲ請求スヘシ

第七條 扶助料ノ請求書ハ請求者署名シ後見人アレハ其後親族二名親族ナキトキハ居住地ノ戸主二名連署シ市町村長ノ與印ヲ受ケ第一條乃至第六條ニ掲ク書類ノ外市町村長ノ證明シタル戸籍調書ヲ添附シ地方長官ニ差出スヘシ

第八條 扶助料ノ請求ヲ受ケタル地方長官ハ查覈ノ上扶助料年額ノ計算書ヲル作リ證據書類ヲ添ヘ内閣總理大臣ニ差出スヘシ内閣ニ於テ之ヲ許可シタルトキハ扶助料證書ヲ作り地方廳ヲシテ之ヲ本人ニ下付セシム但一時ノ支給ニ係ルモノハ辭令書ヲ用ユ扶助料證書若クハ辭令書ヲ下付シタルトキハ内閣ハ其旨ヲ大藏省ニ通報スヘシ

第二章 納金ノ徵收

第九條 官吏遺族扶助法第二條ニ掲クル納金ハ俸給支給ノトキ各廳ニ於テ之ヲ徵收シテ國庫ニ納ムヘシ

第三章 扶助料ノ支給及停止

第十一條 扶助料ノ支給ハ官吏恩給法施行規則第七條第八條第九條及第十條第一第三ノ例ニ依ル

第十一條 扶助料受クル者死去シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿チタルトキハ地方廳ニ於テ扶助料ノ支給ヲ廢シ其旨ヲ大藏省ニ通知スヘシ

前項ノ場合ニ於テ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキモノナキトキハ地方廳ニ於テ其扶助料證書ヲ收メテ内閣恩給局ニ送付スヘシ

第十二條 扶助料ヲ受クル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ公權ヲ停止セラレタルトキハ官吏恩給法施行規則第十三條ノ例ニ依ル

第十三條 大藏省ニ於テ第十一條第十二條ノ通知ヲ受ケタルトキハ官吏恩給法施行規則第十六條ノ例ニ依ル

雜則

第十四條 水火災盜難等ニ依リ扶助料證書ヲ亡失シタルトキ及扶助料ヲ受クル者改氏名ヲ爲シタルハ官吏恩給法施行規則第十七條及第十八條ノ例ニ依ル

第十五條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ扶助料ヲ請求スル者ハ本則ニ依ルヘシ同令ニ依リ扶助料ヲ受クル者ハ左ノ場合ニ於テ本則ニ依ル

一 死去又ハ權利消滅又ハ停止ノトキ

二 恩給證書ヲ亡失シタルトキ

三 改氏名又ハ他府縣ニ轉籍若クハ寄留スルトキ

○法律第三十六號 明治廿九年三月三十日

官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則

第一條 地方稅支辨ノ俸給ヲ受ケタル郡區長ノ在官月數ハ官吏ノ恩給及遺族扶助ニ關スル在官年數中ニ算入ス

第二條 明治二十三年七月一日以後ニ退官シタル文官判任以上ノ者ニシテ地方稅支辨ノ俸給ヲ受ケタル郡區長在官中ノ月數ヲ除算シ恩給ヲ受ケ若ハ之カ爲恩給ヲ受ケサリシ者ニハ其ノ月數ヲ算入シ恩給ヲ增加シ又ハ新ニ之ヲ給スルコトヲ得

第三條 第二條ニ相當スル者在官中又ハ退官ノ後死去シ其ノ遺族ニシテ扶助料若ハ一時扶助金ヲ受ケ又ハ之ヲ受ケサリシ者ニハ第一條ニ依リ算定シタル恩給年額若ハ在官年數ニ依リ其ノ扶助料若ハ一時扶助金ヲ增加シ又ハ新ニ之ヲ給スルコトヲ得

第四條 第二條、第三條ニ依リ新ニ恩給又ハ扶助料ヲ受クル者ハ左ノ方法ニ依リ  
最後ニ受ケタル退官賜金又ハ一時扶助金ノ一部ヲ返納セシム

新ニ受クヘキ恩給又ハ扶助料年額ニ其ノ退官又ハ死去以後新ニ恩給又ハ扶助  
料ヲ受クル日ニ至ルマテノ年數ヲ乘シ月數ハ其ノ月割額ヲ加ヘ退官賜金一時  
扶助金ヲ其ノ總額ニ對照シ若超過アルトキハ其ノ超過額ヲ新ニ受クヘキ恩給  
又ハ扶助料中ヨリ控除ス

第五條 恩給ヲ受クル者郡區書記ニ任用セラレタルトキハ其ノ間恩給ヲ停止ス

第六條 第二條、第三條ニ依リ給スル恩給及扶助料ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ起算  
シテ之ヲ給ス

第七條 第二條、第三條ニ依リ受クヘキ恩給、扶助料又ハ一時扶助金ハ此ノ法律施  
行ノ日ヨリ一箇年内ニ請求セサレハ其ノ權利ヲ拋棄シタルモノトス

第八條 此ノ法律ニ於テ特別ノ規定ヲ設ケサルモノハ總テ官吏恩給法及遺族扶  
助法ノ例ニ依ル

第九條 此ノ法律ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

○閣令第二號 明治二十九年三月三十日

官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則施行規則

第一條 官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則第二條ニ依リ恩給ノ増加ヲ受ケ若ク  
ハ新ニ恩給ヲ受ケントスル者ハ恩給請求書ヲ退官當時ノ本屬廳ノ長官ニ差出  
スヘシ但廢官廢廳ニ當リタルトキハ其ノ事務ノ引繼ヲ受ケタル官廳ノ長官ニ  
差出スヘシ

第二條 官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則第三條ニ依リ扶助料又ハ一時扶助金  
ノ増加ヲ受ケ若クハ新ニ之レヲ受ケントスル者ハ其ノ請求書ヲ居住地ノ地方  
長官ニ差出スヘシ

第三條 恩給又ハ扶助料若クハ一時扶助金ノ請求書ニハ左ノ書類ヲ添附スヘシ

一 在官中ノ履歷書

二 市町村長ノ證明シタル戶籍寫

但恩給ヲ請求スル者ニ在リテハ其ノ退官當時ノ戶籍寫扶助料若クハ一時扶  
助金ヲ請求スル者ニ在リテハ元官吏タリシ者死亡當時ノ戶籍寫及明治二十  
九年四月一日現在ノ戶籍寫トス

三 官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則施行前ニ恩給又ハ扶助料若クハ一時扶

助金ヲ受ケタル者ニ在リテハ其ノ證書若クハ辭令書

第四條 第一條ニ依リ新ニ恩給ノ請求ヲ受ケタル各廳長官ハ官吏恩給法施行規則第五條ニ掲クル計算書ノ外退官當時給與シタル退官賜金ノ調書ヲ添附スヘシ

第五條 恩給ヲ受ケタル者ヲ郡區書記ニ任用シ若クハ解任シタルトキハ官吏恩給法施行規則第十條第十四條及第十六條ヲ準用ス但從來任用シタル者ハ直ニ本條ノ手續ヲ爲スヘシ

第六條 本規則ニ於テ特別ノ規程ヲ設ケサルモノハ總テ官吏恩給法施行規則及官吏遺族扶助法施行規則ノ例ニ依ル

○勅令第九十八號 明治二十六年十月三十日  
廢官廢廳若クハ官名改定ノ際其ノ廢改ニ係ル官職ニ在ル者即日他官ニ任セラルトキハ勤績者トス

○勅令第九十八號 明治二十三年六月二十日  
文官判任官以上ノ者在官滿一年以上ニシテ退官シタル者ニハ退官現時ノ俸給半箇月分ヲ以テ在官年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スル金額ヲ一時支給ス但非職

滿期ニ由リ退官シタル者ハ其在職最終ノ俸給額ニ依リ之ヲ給ス

本令ハ施行前ニ滿年賜金若クハ一時賜金ヲ受ケタル者又ハ前項ノ賜金ヲ受ケタル者再ヒ任官シ自後退官シタルトキハ前項ニ掲クル在官年數ヲ其再任ノ日ヨリ起算ス恩給ヲ受クル者並ニ自己ノ便宜ニ由リ退官シタル者又ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ由リ免官シタル者ニハ本令ノ賜金ヲ給セス

本令ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス

○右掲クル處ノ外左ノ諸達參照

- 一 明治廿三年七月内閣訓令第八號(官吏恩給法施行規則官吏遺族扶助法施行規則ニ依リ差出スヘキ在官年數及恩給扶助料ノ年額計算書書式)
- 一 同年十月大藏省令第二十四號(恩給及扶助料受領ノトキ生存證書添付)
- 一 明治廿四年六月閣令第二號(行政上ノ處分ニ依リ恩給扶助料ノ權利ニ關スル恩給局裁決手續)

○大藏省令第二十四號 明治二十三年十月一日

本年法律第四十三號第四十四號第四十五號ニ據リ恩給及扶助料ヲ受クルモノハ每期受領ノトキハ本人生存證書ヲ恩給證書ニ添へ差出スヘシ

### 巡查看守給助例

〔沿革〕明治十五年七月第四十一號達ヲ以テ巡查看守給助例ヲ定ム○同年十二月内務省シ第六十八號達ヲ以テ同例第二條第一項勤績訓註ノ趣ヲ示ス○同年七月第四十二號及ヒ同年十二月第六十六號達ヲ以テ五年未滿ニシテ退職スル者等ノ慰勞金支給方ヲ定ム○十九年二月内務省甲第七號達ヲ以テ二十年度ヨリ一般ニ本例ヲ實施セシム○二十年四月内務省訓令第二十三號ヲ以テ年金支給方ヲ定ム

○太政官達第四拾一號 明治十五年七月十七日

警視廳 府縣  
東京府 神戶府 函館府 札幌府 青森府 岩手府 秋田府 山形府 福島府 茨城府 栃木府 群馬府 埼玉府 千葉府 東京府 神奈川府 新潟府 富山府 石川府 福井府 山梨府 長野府 岐阜府 愛知府 三重府 滋賀府 京都府 大阪府 和歌山府 奈良府 和歌山府 徳島府 香川府 高松府 愛媛府 高知府 福岡府 佐賀府 長門府 肥前府 肥後府 豊前府 豊後府 大分府 宮崎府 鹿兒島府 那霸府

巡查看守給助例別紙ノ通相定候條各地方ニ於テ給助金額ヲ定メ内務卿ノ認可ヲ經テ施行可致此旨相達候事

但シ實施ノ府縣ハ八年月第三號并ニ九年月第八十號達別表中免職歸國旅費ハ相廢候義ト相心得ヘシ

(別紙)

巡查看守給助例

第一條 給助ハ退職給助、傷痕給助、死亡給助、療治料、祭祀料ノ五種トス

第二條 給助ヲ與ル者ハ左ノ如シ

一 退職給助 勤績巡査ヨリ看守ニ看守ヨリ巡査ニ轉スルモ總テ勤績トス滿五年以上ニシテ退職スル者ニハ一時之ヲ給シ滿十年以上ニシテ退職スル者ニハ終身之ヲ給ス

二 傷痕給助 職務ノ爲メ負傷スル者ニ終身之ヲ給ス

三 死亡給助 職務ノ爲メ重傷死ニ至ル者及ヒ負傷後其傷痕ニ原シテ死亡スル者又ハ職務上傳染病ニ罹リ死亡スル者ノ遺族ニ之ヲ給ス

四 療治料 職務ノ爲メ負傷シ若クハ傳染病ニ罹ル者ニ之ヲ給ス

第五 祭祀料 奉職中死亡スル者ニ之ヲ給ス

第三條 退職給助ノ額

一 勤績滿五年ノ者ハ一時金十圓ヨリ少カラス參十圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス滿六年以上九年迄ハ一年毎ニ金參圓ヨリ少カラス五圓ヨリ多カラサル額ヲ増給ス

二 勤績滿十年ノ者ハ年金貳十五圓ヨリ少カラス三十圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス滿十一年以上ハ一年毎ニ金五拾錢ヨリ少カラス壹圓ヨリ多カラサル額ヲ増給ス

第四條 傷痕給助ノ額

一 一等傷ヲ辨スル能ハサル者ハ年金三十圓ヨリ少カラス四十圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

二 二等傷ヲ辨シ得ル者ハ年金二十圓ヨリ少カラス三十圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

第五條 死亡給助ノ額

一 寡婦又ハ相續ノ孤兒アル時ハ年金三十圓ヨリ少カラス五十圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス寡婦再嫁シ孤兒二十歳ニ至レハ廢止ス但シ寡婦アレハ孤兒ニ給セス

二 寡婦又ハ孤兒ノ給助ヲ受クル者ナク祖父母又ハ二十歳未滿ノ兄弟姉妹ニシテ死者ニ依リ從來生計ヲ爲セシ者アルトキハ一時金五拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

三 相續者タル孤兒滿二十歳ニ至ルモ癡篤疾ナルトキハ年金ヲ廢止スルニ際シ一時金五拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

第六條 療治料ハ傷痍又ハ病症ノ輕重ニ依リ其適度ヲ量リ之ヲ給ス

第七條 祭祀料

一 奉職一年未滿ニシテ死亡スル者ハ一時金拾圓ヨリ少カラス拾五圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス滿一年以上一年毎ニ金三圓ヨリ少カラス五圓ヨリ多カラサル額ヲ増給ス

二 職務ノ爲メ死亡スル者ハ前項ノ外一時金五拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

第八條 左ノ各項ニ該ル者ハ給助ヲ受クルヲ得ス  
一 公權ヲ剝奪セラレタル者  
二 懲罰ニヨリ免職セラレタル者

第九條 左ノ各項ニ該ル者ハ其時間給助ヲ停止ス

- 一 俸給ヲ受クル官職ニ就キタル者
- 二 公權ヲ停止セラレタル者
- 三 失踪シタル者
- 四 許可ヲ得スシテ外國ニ出テ一年以上歸朝セサル者

○内務省達乙第六十八號 明治十五年十二月十五日

警視廳 府縣 東京府 神戶府 函館府 札幌府 根室 四縣ヲ除ク



本年七月第四十一號公達巡查看守給助例第二條第一項勤績割註ノ趣ハ全ク一地  
方内轉任スル者ニ限ル義ニ付此旨爲心得相達候事  
○太政官達第四十二號 明治十五年七月十八日

警視廳

府縣東京府 神戶府 函館府 札幌府 根室 四縣ヲ除ク

巡查看守給助例施行ノ期ニ際シ現在職滿二年以上五年未滿ノ者引續キ五年未滿  
俸職ノ日ニシテ退職スルトキハ給助例施行ノ日ヲ限界トシ勤績年數ニ應シ滿年  
賜金ノ例ニ據リ當時ノ月俸額ヲ以テ退職ノ際一時慰勞金ヲ支給スヘシ此旨相達  
候事

○太政官達第六十六號

明治十五年十二月十二日

警視廳

府縣東京府 神戶府 函館府 札幌府 根室 四縣ヲ除ク

本年七月第四十壹號ヲ以テ巡查看守給助例相達候處右實施ノ府縣ニ於テ人員减小  
等ニ因リ免職スルコトアルトキ奉職五年未滿ノ者ハ免職當日迄ノ勤績年數ニ應  
シ滿年賜金ノ例ニ據リ一時慰勞金トシテ支給スヘシ此旨相達候事  
○内務省達甲第七號 明治十九年二月二十六日

府

縣東京府 及 神戶府 函館府 除ク

明治十五年七月第四拾壹號公達巡查看守給助例ノ儀未タ施行セサル地方モ有之候  
處明治二十年度ヨリ施行スヘシ

○内務省訓令第二十三號

明治二十年四月七日

廳府縣

集治監

假留監

巡查看守給助例中年金ハ左ノ各項ニ據リ支給スヘシ

一年金ハ毎年三月及九月ニ於テ其月ヨリ前六箇月六箇月ニ滿タサルモノ分ヲ支  
給スヘシ

一年金ハ退職又ハ死亡又ハ傷疾ノ翌月ヨリ支給スヘシ

一年金ヲ受ケタル者本例第八條第一項及第九條ニ該當スルトキハ日割ヲ以テ支  
給スヘシ

一年金ヲ受ケタル者死亡又ハ本例第五條第一項後段ニ該當スルトキハ其月分全  
額ヲ支給スヘシ

(參照)

○滋賀縣伺

明治十五年七月廿八日

一人ニシテ給助例第二條中ノ各項ニ當ル者了ルトキハ各其相當スル各項ノ給助金

ヲ支給スル儀乎

○内務省指令 明治十六年一月廿七日

伺ノ通

○愛媛縣伺 明治十五年九月十二日

巡查看守給助例御達相成候處奉職年數起算方ハ奉職ノ月ヲ以テ算スヘキヤ又ハ日ヲ以テ算スヘキヤ且通卒ヨリ引續巡查ヲ奉職シ今日ニ至ル者ノ如キハ明治八年第百八十二號公達通卒ヲ巡查ト改稱ノ際ヨリ起算シ可然哉

○内務省指令 明治十五年十月十二日

奉職年數ハ月ヲ以テ算スヘシ巡查ト改稱ノ際ヨリ起算スルハ伺之通

○愛媛縣伺

明治十五年九月九日

(前文略ス)

- 一 給助例實施以前在職滿二年ニシテ實施後尚引續キ滿四年奉職シ退職スル者ノ如キハ奉職ノ日ヨリ算シ該例實施前後在職ノ日數ヲ通算スレハ滿六年則チ五年以上在職ノ者ニ付給助例第三條ニ據リ退職給助ヲ與ヘ可然哉
- 一 給助例施行前後ノ在職年數ヲ通算シ其年數十年以上ニ至ル者モ亦夕前項全様心得可然哉
- 一 給助例實施前已ニ在職滿二年ニシテ施行後尚引續キ滿一年在職シテ退職スル者ハ施行前後ノ日數ヲ通算スレハ滿三年即チ五年未滿在職ノ者ニ付滿年賜金ノ例ニ依リ退職當時ノ月俸額ヲ以テ退職ノ際慰勞金ヲ給與シ可然哉
- 一 給助例實施前在職二年未滿ノ者及滿五年以上ノ者實施後尚引續キ奉職スル片ハ

亦前項ノ例ニ倣ヒ施行前後ノ日數ヲ通算シ在職五年内外ヲ區分シ或ハ給助例ニ依リ或ハ慰勞金ヲ給シ可然哉

一 現時巡查ハ滿二年以上奉職セシ者ニアラサレハ退職ノ節滿年賜金給與不致候得共看守ハ一般官吏ノ例ニ依リ滿一年以上在職ノ者ハ退職ノ節滿年賜金給與該來リ候ニ付給助例施行前ヨリ引續キ奉職セシ者ニ限リ從前ノ通滿一年以上ノ者ヨリ第四十二號御達ノ例ヲ以テ退職ノ節慰勞金ヲ給與シ可然哉

○内務省指令 明治十五年十月廿六日

第一項 第二項 伺之通

第三項 實施前ニ係ル勤續年數ニ應スル分ノミ支給ス可シ其他伺ノ通

第四項 實施前在職二年未滿ノ者五年未滿ニシテ退職スル片ハ慰勞金ヲ支給スルノ限ニ在ラス滿五年以上ノ者通算方ハ第一項ノ通

第五項 慰勞金ハ實施前在職滿二年以上ノ者ニアラサレハ都テ支給スルヲ得ス

○山形縣伺 明治十六年七月四日

客月廿五日付電報ヲ以テ巡查看守給助例ノ儀相伺候次第ハ例ヘハ茲ニ人民誤テ水中ニ投シ將サニ溺死セントスル者アリ或ハ洪水家屋ヲ流サントスルアラニ巡查其危險ヲ顧ミス水中ニ投シテ之ヲ救護セントスルモ力及ハスシテ却テ身溺死スルニ至リ又ハ積雪沍寒ノ際偶罪犯ノ逃走スルアリ機失フ可ラサル場合雪ヲ冒シ追跡シテ山間人無キノ地ニ入ルニ風雪俄カニ路ヲ絶テ進退維レ谷リ遂ニ凍死スル者アラシテ山間人無キノ地ニ入ルニ風雪俄カニ路ヲ絶テ進退維レ谷リ遂ニ凍死スル者アラシ相伺候儀ニ有之果シテ給助スルヲ得ヘキモノトモハ其死ニ至ラサル者ト雖モ際治料渾テ相當ノ項目ニ準シ給助スヘキハ勿論ノ儀ト心得可然哉

○内務省指令 明治十六年七月廿日

伺之通

○警視廳伺 明治十六年四月九日

巡查看守ノ單職務上負傷セシ者奉職スルト否トヲ問ハス其傷痕再發ノ者療治料支給方ノ儀客歲九月中伺定置候處全年第六十二號公達ノ趣モ有之候ニ付尚熟考候ニ均シク職務上負傷セシ者ニシテ其支給方區々相成候テハ不權儀ニ付巡查看守給助例ニ據リ給スル療治料ノ儀モ其再發以上ノ者へハ右公達ニ基キ本例第四條第一節二ノ兩項ニ相當スル者ニ限リ給與候様致度此段更ニ相伺候

○内務省指令 明治十六年四月廿六日

伺ノ通

○福井縣伺 明治十六年三月十六日

給助例第五條第二項ニ祖父母父母又ハ二十歳未満ノ兄弟姉妹ニシテ云々トアルハ幾人有之ト雖モ人毎ニ給スル儀ニ無之シテ最モ血縁近キモノノ人父母兄弟アレハ父一人ニ給スル儀ニ候哉

○内務省指令 明治十六年四月廿四日

伺ノ通

○福井縣伺 明治十六年三月十六日

給助例第五條第三項ニ孤兒滿二十歳ニ至ルモ癡篤疾ナルトキハ年金ヲ廢止スルニ際シ一時金ヲ給スルトアルヲ觀レハ職務ノ爲メ死亡スルノ際相續スヘキ子アルニ二十歳以上ノ者タリトモ癡篤疾ナル時ハ無論一時金ハ可給モノト心得ヘ候共同條第二項中兄弟姉妹ニシテ右様ノ者有之トキモ同様支給スヘキモノニ候哉

○内務省指令 明治十六年四月廿四日

伺ノ通

○富山縣伺 明治二十五年二月九日

縣下魚津警察署所屬入善分署第二管區駐在巡查高田隆七ハ本年一月廿日所屬分署長ニ復命スヘキ要件ヲ帶ヒ受持部内警邏ヲ兼ネ全日早朝駐在所出發然ルニ全日ハ數日前ヨリ間斷ナク降雪ノ爲メ積雪殆ント五尺ニ達シ殊ニ雪風最モ猛烈ヲ極メタルモ全人ハ屈セスシテ警邏ヲナシ漸ク全日午後第二時三十分所屬入善分署ニ着シ受命事件ノ復命ヲ了シ尚ホ全分署長ヨリ歸途警邏ヲ終工歸所スヘキ命ヲ受ケ全午後第三時十分全署出發警邏ノ途ニ就キタル儘跡不明爾來搜索中ノ處全月廿五日全部内下新川郡飯野村大字芦崎村字下株分ト稱スル原野ニ於テ制服ヲ着シ「ガ」ンジキヲ穿チタル儘仰向ニ斃レ總身深雪中ニ埋没シ只夕面部ノミヲ現出セルヲ發見セリ畢竟全人ハ警邏途中雪風益烈シク前後ヲ辨セス彷徨路ヲ失ヒ且ツ身体凍疲シ進退難レ谷ヲ終ニ非命ノ死ヲ遂ケタルモノニシテ右ハ全ク上司ノ命令ヲ遵守シ自己ノ危難ヲ顧ミス猛烈ナル雪風ヲ冒シ警邏ノ爲メ非命ノ死ヲ遂ケタルモノナレハ明治十五年七月第四十一號巡查看守給助例第二條第三項ニ依リ全人遺族へ相當給助金給與致シ可然哉此段相伺候也

○内務省指令 明治二十五年三月廿五日

本年二月九日警察發第七三號伺巡查給助ニ關スル件伺之通

○静岡縣伺 明治二十年六月十六日

第一條 巡查看守給助例施行ノ期ニ際シ現在職滿二年以上五年未滿ノ者引續キ五年未滿ニシテ判任官ニ轉任セシトキハ給助例施行ノ日ヲ限界トシ明治十五年第

四拾二號公達ニ據リ一時慰勞金ヲ支給シ得ヘキモノニ候哉又ハ該公達ハ是等ノ場合ニハ適用スル能ハサル儀ト相心得可然哉  
第二條 巡查看守現在職滿五年以上ノ者判任官ニ轉任セシトキハ巡查看守給助例ニ據リ轉任セシ當時ニ於テ給助金ヲ支給シ得ヘキモノニ候哉又ハ他日退官死亡等ノ際支給スヘキ儀ト相心得可然哉

○内務省指令 明治二十年七月二十三日

書面兩條トモ前段伺之通  
但年金ハ給助例第九條第一項ニ據リ直ニ金額ノ支給ヲ停止スヘシ

○東京集治監典獄照會 明治二十一年四月十日

十五年第四十一號公達巡查看守給助例第七條第一項給額當監ノ義ハ二十年三月及御届候通リ一時金ハ十三圓滿一年以上ハ一年毎ニ四圓五拾錢ヲ給スルニ相定メ有之然ルニ實際支給ニ當リ右條項解釋上疑團ヲ生シ候ニ付左ニ及御照會候  
警ヘハ茲ニ滿二年奉職死亡ノ者アリ右者二年ノ内一年ニ對シ十三圓ヲ給シ残り一年ニ對シ四圓五拾錢合計金拾七圓五拾錢支給候テ可然哉  
又ハ一年以上一年毎ニ云々ノ文ニ依リ二年ノ内一年ニ對シ拾三圓ヲ給シ而シテ尚ホ一年毎ニ四圓五拾錢ツ、即チ二年分ニテ九圓合計金貳拾貳圓支給候テ可然哉

○警保局長回答 明治二十一年四月十九日

會發第七號ヲ以テ巡查看守給助例中祭祀料支給方ノ義ニ付御照會ノ趣了承右ハ後段御見解ノ通ニテ可然存候

○鹿兒島縣伺 明治二十一年四月十三日

巡查看守ニシテ事務ノ都合ニ依リ雇テ命スル爲メ一旦解職シタルトキハ其慰勞金

支給方ハ十五年第四十二號公達ニ據ルヤ將々全年六十六號公達ニ據ルヤ

○内務省指令 明治廿一年四月十九日

巡查看守慰勞金支給方ハ後段伺之通

○奈良縣伺 明治二十二年四月十二日

甲縣巡查滿一ケ年奉職ノ者乙縣ノ照會ニヨリ轉勤セシメタルトキハ十五年公達第六十六號ニ準シ一時打切リ其勤續年數ニ應シ滿年賜金ノ例ニ依リ一時慰勞金トシテ甲縣ヨリ支給スヘキ義ト心得可然哉

○内務省指令 明治二十二年五月四日

伺ノ通

○熊本縣伺 明治二十二年八月廿一日

巡查看守給助例第九條第一項ニ準給テ受クルノ官職トアルハ國家ノ直接官吏ニ限ル義ニ候哉又ハ地方共同体ノ有給吏員ヲモ包含スル義ニ候哉

○内務省指令 明治二十二年十月一日

地方共同体ノ有給吏員ハ包含セサル義ト心得ヘシ

○鳥取縣伺 明治二十三年十月廿四日

八年七月本縣選卒拜命同年十二月更ニ巡查補ヲ拜命九年三月巡查トナリ本年十月退職シタルモノアリ右巡查補ノ名稱ハ本縣限リ設ケタルモノナレモ其職務巡查トシテモ異ルコトナシ就テハ給助例ニ依リ勤續年數ヲ計算スルニハ名義ニ拘ラス事實ニ依リ總テ算入シ可然哉

○内務省指令 明治二十三年十一月五日

八年第百八十二號公達ニ依リ巡查ヲ命シタル月ヨリ起算スヘシ  
○神奈川縣伺 明治二十四年十二月五日

巡查看守給助例之義ニ付伺

明治十五年七月太政官達第四十一號巡查看守給助例第三條第一項ニヨリ退職巡查ニ  
給與スヘキ一時賜金ヲ縣廳ヨリ仕拂ハサル以前ニ第三債權者ノ請求ニヨリ裁判所  
ヨリ差押ノ命令ニ據シタル場合ニハ該差押ノ命令ニ應シ執行ノ言渡ヲ俟テ第三債  
權者ヘ直ニ仕拂方取計可然哉將又巡查退職給助金ノ義ハ民事訴訟法第六百十八條  
第五項ニ謂ユル恩給ノ性質ヲ有スルモノニ有之候哉果シテ然ラハ該退職給助金ニ  
對シ裁判官ニ於テ強制執行ノ命令有之候場合ニハ如何取計可然哉目下差掛タル義  
モ有之候ニ付至急何分ノ御指揮有之度此段相伺候也

○内務兩省指令 明治二十四年十二月十一日

本年十二月申内第六三號伺巡查看守給助例之件前段伺之通

○石川縣伺 明治二十五年一月十一日

本縣巡查滿十年以上勤續シ退職シタルモノヘ巡查看守給助例ニ依リ年金ヲ給與セ  
シモノ、内今回執達吏ニ任セラレタルモノアリ右執達吏ハ俸給ヲ受ケサルモ職務  
上手數料ヲ收得シ若シ其手數料一程ノ額ニ達セサルトキハ裁判所構成法第六十九  
條及執達吏規則第十九條ニヨリ國庫ノ補助ヲ受クヘキ義ニ有之依テ全則第二十一  
條恩給法ノ如ク右手數料ハ俸給ト看做スヘキモノト認メラレ候ニ付給助例第九條  
一項ニ依リ給助ヲ停止スヘキモノニ有之候哉

○内務省指令 明治二十五年一月廿一日  
給助ヲ停止スルノ限ニ非ス

○京都府伺 明治二十六年三月七日

巡查勤續年金給與方ノ義ニ付伺

巡查看守給助例ニ依リ勤續年金ヲ給與シタルモノ再ヒ巡查トナリ奉職中不都合有  
之懲罰免職シタル場合ニ於テハ給助例第八條二項ニ依リ再度ノ勤續ニ對シ年金給  
與スヘカラサルハ勿論ニ候得共其初ノ勤續ニ對スル年金ハ依然給與致可然ト存候  
右ハ給助例中文無之ニヨリ相伺候也

○内務省指令 明治二十六年三月二十二日

巡查年金給與ノ件伺ノ通

○長崎縣伺 明治二十六年四月十一日

巡查退職給助勤續年數計算ノ義伺

元巡查 白倉 四郎

右ハ明治十九年二月當縣巡查ニ採用シ同廿二年八月試驗ヲ經ス更ニ當縣警部補ニ  
任用在官中同廿三年七月二十四日付調第四九五號御訓令ニ基キ再ヒ巡查ニ引戻シ  
爾后勤續ノ末今般解職ノ者ニ有之候處右警部補ニ任用シタル中間ノ年月ハ必竟自  
己ノ任意ニ因リ該職ヲ離レタルモノニアラサルノミナラス其舊職タル巡查ニ引戻  
シタルモノニ付總テ勤續ニ算入スヘキモノ、如ク相考候得共警部補在官中ニ係ル  
退官賜金ハ其際支給シタルヲ以テ該中間ニ於ケル年月ノミ之ヲ控除シ其前後ヲ通  
算勤續ト看做シ可然哉將タ一旦警部補ニ任用シタルヲ以テ前職タル巡查ノ勤續年  
數ハ同時ニ消滅シタルモノト看做シ復職後ヨリ起算シ可然儀ニ候哉明治十五年第  
四十一號公達ニ據リ給助金支給上疑義ヲ生シ候得共他ニ類例モ無之決兼テ候條至  
急何分ノ御指揮ヲ仰キ候也

○内務省指令 明治二十六年四月二十四日

巡査退職給助勤續年數計算ノ件ハ後段伺ノ通  
○香川縣伺 明治二十七年五月二十五日

巡査死亡給助年金計算方ノ義ニ付伺

職務ノ爲メ死亡セシ巡査有之候處其當時姪娘中ノ遺子數月ノ後分岐シ家名相續ノ上給助顯出ニヨリ年金給助證書ヲ下付セリ右年金ハ出生ノ月(出生當日ヨリ日割)ヨリ給與シ可然哉將又其翌月ヨリ給與スル義ニ候哉此段相伺候也

○警保局長通牒 明治二十七年七月三十一日

巡査死亡給助年金計算ノ件御伺出有之候處其後御回答相成候書面及戸籍面寫等ニ依レハ遺妻コマツナル者ハ其際入籍ヲ了セサリシヲ以テ妻ト見做サス本年一月ニ至リ出生シタル遺子忠夫ニ給助年金ヲ支給セラレタル義ニ可有之候得共忠夫ヲ遺子ト爲ス以上ハ其母タルコマツハ嫡妻タラサルヲ得ス若シコマツヲ嫡妻ニ非スト爲ストキハ忠夫ハ私生兒ニシテ給助ヲ受クルコト能ハル義ニ有之然ルニ忠好ヨリハ死亡ノ前日コマツノ入籍届書ヲ出シタルモ原籍村役場ニ在テハ透籍狀ノ到着ヲ待チ五月一日入籍ノ取扱ヲ終ヘタルモノニシテ忠好ノ妻ト稱スヘキハ勿論ニ有之付テハ給助例第五條第一項ニ依リ寡婦コマツヘ給助支給候様改正可相成依命此段及照會候也

○警保局長通牒 明治廿七年六月廿五日

巡査看守給助例第九條第一項ニ依リ給助金ヲ停止スヘキ者則チ俸給ヲ受クルノ官職ニ就キタル者ノ區分ニ付テハ往々御問合セ相成候向モ有之候處右ハ一般官吏ノ外監獄ノ教誨師押丁授業手裁判所ノ廷丁并寫字生守衛門衛其他何等ノ名稱ヲ以テ

スルニ拘ラス諸官廳ノ雇(賃雇)井小使ニ同シキ者ヲ除クハ該項ニ該當スル者ニ有之候依命此段及通牒候也

○大分縣問合 明治二十七年九月七日

明治二十七年勅令第八十八號ニ依リ休職ヲ命シタル巡査ニシテ召集中戰死若クハ病死セシトキハ巡査看守給助例ニ依リ祭祀料ヲ給スヘキハ無論ノ義ト相見込候得共例規無之ニ付及御問合候也

○警保局長回答 明治二十七年十月十一日

休職中ノ巡査看守死亡ノ際ニハ祭祀料給與ノ限ニ無之候經伺ノ上及回答候也

○熊本縣伺 明治二十七年十月二十六日

巡査職務上ノ疾病ニ關スル療治科手當金支給ノ義ニ付伺

巡査職務執行ノ爲メ傳染病ニ感染シ療治中若クハ全癒後未タ療治料手當金ヲ支給セサル前懲罰例ニ照ラシ免職セシ場合ニ於テハ療治料ハ巡査看守給助例第八條ニ依リ又手當金ニ付テハ明治十九年閣令第二十三號中支給セサル明文無之候得共傳染病ニ罹リ治癒シタル巡査ニ該閣令ヲ適用スルハ給助例ノ補足ナルニ付同例第八條ノ規定ニ準據シ療治料手當金トモニ給與スヘカラサル義ト心得可然哉又ハ手當金ヲ給スルハ至ク恩惠ニ出テタルモノナレハ之ヲ與フル限ニアラサレトモ療治料ハ治療上ニ要シタル實費ヲ下附スルモノナレハ之ヲ(治療中免職ノ者ハ)支給シ可然哉右ハ差掛リタル事件有之此段相伺候也

○警保局長通牒 明治二十七年十二月十日

閣令第二十三號ニ係ル救助料並巡查看守給助例ニ係ル療治料ハ免職當日マテノ分ヲ支給スヘキモノト存候依命此段及通牒候也

○大分縣知事伺 明治二十九年二月十五日

本縣巡查ニシテ巡查看守給助例ニ依リ已ニ年金ヲ給與セシモノ爾後再ヒ本縣巡查奉職滿五年以上勤績退職セシモノ有之右ハ其年數相當一時限リ給助金ヲ支給スヘキモノニ候哉果シテ然ラハ再ヒ滿十年以上勤績退職セシトキハ年金ヲ下賜セサルヲ得ス然ルトキハ最初ヨリ滿二十年以上引續キ勤務ノ者ニ支給スル年金額ニ對シ權衡ヲ失スルノ嫌有之依テ右等ノモノニ對シテハ前後ノ年數ヲ通算シ年金ヲ加給スル方穩當ト見込候得共該給助例中其明文無之疑義ヲ生シ候條至急何分御指令有之度此段相伺候也

○警保局長通牒 明治廿九年五月廿一日

本年二月十五日付内四地第三九號ヲ以テ巡查給助金ノ義御伺出相成候處右再任退職ノ場合ハ前後通算年金加給ノ義ト御承知相成度御伺出ニ對シテハ別ニ指令及ハレス經伺ノ上此段及通牒候也  
右同時ニ廳府縣へ通牒セリ

○岐阜縣問合 明治廿九年四月二日

五年未滿奉職ノ巡查公務ノ爲メ負傷セシヲ以テ明治十五年太政官達第四十一號巡查看守給助例ニ依リ傷痍給助終身年金ヲ給與シタルトキト雖モ右ノ者ニ對シ其負傷ニ依リ職務ニ堪ヘサルノ廉ヲ以テ官ヨリ諭旨免職シタル場合ニ在テハ別ニ明治十五年太政官達第六十六號ノ一時慰勞金ヲ支給致シ差支無之義ニ候哉至急何分ノ御回答相煩シ度此段及御問合候也

○警保局長回答 明治廿九年四月廿八日

本年四月二日付發第四三九號ヲ以テ御問合ノ件一時慰勞金ヲ支給スルハ妨ケナキ義ト存シ候經伺ノ上此段及回答候也

○茨城縣照會 明治廿九年六月十六日

巡查看守給助例第九條第一項官職ニ就キタル者ノ區分ニ付テハ明治廿七年六月廿五日警甲第八五號ヲ以テ御通牒ノ次第モ有之候處本縣巡查ニシテ退職給助年金ヲ給與セシモノ神奈川縣立蠱毒院兼蠱毒検査所事務係トナリ月俸金八圓ヲ受クル者アリ右ハ給助例第九條第一項ノ官職ニ就キタルモノトモ難認ニ依リ其時間給助ヲ停止セス引續年金給與可然哉去廿七年六月御通牒ノ次第モ有之候得共聊カ其趣キヲ異ニシ疑義ヲ生シ候條至急何分ノ御回答ヲ煩シ度此段及照會候也

○警保局長回答 明治廿九年六月廿六日

本年六月十六日付第二一七一號ヲ以テ御照會ノ趣了承同神奈川縣立蠱毒院事務係ニシテ備契約ニ基キ從事スルモノナルハ給助停止ノ限ニ無之候得共雇員ノ辭令ヲ受ケ官吏服務規律ヲ以テ論セラレハモノナルハ停止スヘキ義ト相考候此段及回答候也

巡查滿年賜金

(本項ハ北海道沖繩ニ於テ必用アルニ付之ヲ存ス)

〔沿革〕明治十二年五月内務省第七第二十五號達ヲ以テ七年内蔵兩省第四十七號達ヲ廢シ巡查滿年賜金ヲ定ム○十五年一月内務省第七第三號ヲ以テ經濟ヲ異ニスル向ヘ轉任ノ節一旦打切滿年賜金支給方ヲ達ス○同年七月第四十二號達ヲ以テ五年未滿ニシテ退職スル者ニ慰勞金支給方ヲ示ス○同年八月内務省第七第四十五號達ヲ以テ給助例實施ノ府縣八十二年五月内務省第七第二十五號達ヲ廢止ス○同年十二月第六十六號ヲ以テ人員減少等ニ因リ免職シタル者ニ一時慰勞金ヲ支給ス○十七年二月内務省内達ヲ以テ滿年賜金及ヒ免職歸郷旅費ハ給助例實施ノ日マテ支給ス

○内務省達乙第二十五號 明治十二年五月廿三日 府 縣東京府ヲ除ク  
明治七年<sup>内務大藏</sup>兩省達第四拾七號手當金五圓以下給與ノ成規ヲ廢シ自今巡查滿年賜金左ノ通相定候事

一 巡查奉職滿二年勤續ノ者ハ明治七年第六十一號公達ニ照シ滿年賜金給與スヘシ

一 官ノ都合ヲ以テ免職シ又ハ病死スルキ勤續二年未滿ト雖モ已ニ滿一年ニ至ル者ハ滿年賜金ノ例即月給半ケ月分ニ照シ給與スヘシ

一 該賜金ハ府縣警察費ヨリ支辨スルモノトス右規則ハ來ル六月一日ヨリ施行スヘシ此旨相達候事

○内務省達乙第三號 明治十五年一月廿日

警視廳 府縣東京府ヲ除ク

巡查監獄看守等經濟ヲ異ニスル向ヘ轉任スル節ハ一旦打切滿年賜金ヲ給スヘク此旨相達候事

○内務省達乙第四拾五號 明治十五年八月廿一日

警視廳 府縣東京府并ニ沖繩函館札幌根室四縣ヲ除ク

今般第四十一號公達ニ依リ給助例實施ノ府縣ハ十二年五月乙第二十五號兩省達

廢止候儀ト可心得此旨相達候事

○内務省內達 明治十七年二月十四日

府 縣東京府ヲ除ク

本年太政官達第五號月俸規則及ヒ第六號旅費定則中改正相成候處巡查滿年賜金並ニ免職歸郷旅費ノ義ハ給助例實施ノ日マテ從前ノ通支給スヘシ爲心得此旨相達候事

○<sup>内務大藏</sup>兩省訓令 明治二十二年九月廿日

北海道廳

其廳巡查看守ニシテ他ノ官吏ヘ轉任ノ場合ニ於テハ經濟ヲ同フスルモノト雖モ自今其際滿年賜金打切支給スヘシ沖繩縣ヘハ二十二年七月十二日付同縣伺出ニ對シ同年九月二十日付ヲ以テ拵合ス

○内務省訓令第四號 明治二十六年四月一日

府 縣東京府ヲ除ク

府縣ノ分合又ハ管轄替ニ依リ巡查看守等甲廳ヨリ乙廳ヘ引繼キ勤務スル者ハ勤續トシ明治十五年一當省達乙第三號ニ依リ滿年賜金ヲ支給スルノ限リニアラス

(參照)

○大藏省伺 明治十七年四月十四日

月俸規則第二十二條ニ明示有之官吏一時賜金給與方ノ義ハ今日既ニ判任官以上奉職ノ者ニシテ判任以上ノ官ヲ奉スル一滿五年以上ニ及フモノニ限リ其第二十三條モ亦同様ノ順序ト相考ヘ候果シテ然ラハ本人素ト該兩條改正前等外吏巡查等ヨリ



判任官へ轉任セシモノニ係ルハ最前ノ等外吏若クハ巡查奉職年數以上五年ハ既往ノ轉任ニ屬スルヲ以テ全ク計算外ニ付シ支給スヘカラサル様相見ヘ候得共斯クテハ該兩條改正後等外吏巡查以上五年等ヨリ判任官へ轉任ノ際打切支給スル者ニ對シ彼是權衡ヲ得サルニ付該賜金ノ義ハ假令該條例改正前判任官へ轉任ノ者ト雖モ其轉任前ノ奉職年數以上五年ハ打切計算スヘキ義ト相心得等外吏ハ同則第三十三條ニ據リ巡查ハ過般内務省上申請ノ例ニ據リ巡查給助例實施ノ期マテハ從前巡查滿年賜金給與法ニ照シ支給候テ可然哉

○太政官指令 明治十七年六月二日  
伺之趣判任へ轉任スル等外吏八月俸規則第二十三條ニ依ルノ限ニアラス但巡查滿年賜金ハ伺之通

○静岡縣伺 明治十七年七月廿二日

本年一月太政官第五號ヲ以テ月俸規則第廿三條一時賜金給與之儀御達相成候處以前滿年賜金ハ給助例實施ノ日マテ從前ノ通支給スヘキ旨御内達ノ趣モ有之然ル處以前ヨリ判任官ニ轉任セシモノ明治十五年一月御省シ第三號御達前ニ係ル滿年賜金ハ打切支給スヘキ義ニ候哉將タ已前ニ係ル滿年賜金ハ消滅ニ屬シ候モノト相心得可然哉

○内務省指令 明治十七年十一月十七日

書面以前奉職中ノ滿年賜金ハ他日退官又ハ死去等ノ際打切支給スル義ト可心得申但該賜金ハ本年五十五號公達ニヨリ大藏省へ申出ヘシ

吊祭扶助療治料

〔沿革〕明治六年十一月第三百九十二號達ヲ以テ遷卒番人死傷ノ者扶助並ニ追賞規則ヲ定ム○八年一月第三號達ヲ以テ同上規則改定○同年六月第二百二十八號達ヲ以テ遷卒ヲ巡查ト改稱シ及ヒ遺族扶助ノ條但書改正○同年十月第八十六號達ヲ以テ人民ニシテ巡查同様ノ勳ヲナシ死傷ノ者ハ同年一月第三號達巡查死傷者吊祭扶助療治料規則ニ照準セシム○十三年四月第二十五號達ヲ以テ水火防禦ノ爲メ死傷ノ者恩給支給方ヲ定ム○十五年七月第四十一號達巡查看守給助例ニ依リ該例施行ノ地ニ對シテハ八年第三號達自然効力ヲ失ス○同年十二月第六十七號達ヲ以テ人民吊祭扶助療治料支給方ヲ定ム○同六年十二月第五十五號達ヲ以テ十三年第二十五號達ヲ廢シ其支給方ハ八年第三號達ニ照準セシム○十八年十二月内務省甲第三十七號達ヲ以テ扶助料ヲ受ケタル者ニ印紙賣捌方ヲ許ス○二十五年九月勅令第八十號ヲ以テ官吏傷痍療治料ノ事ヲ達ス

○太政官達第三號 明治八年一月 使 廳 府 縣

明治六年十一月第三百九十二號達書中「遷卒番人」死傷ノ者扶助並ニ追賞規則左ノ通改定候條本年二月一日ヨリ施行可致此旨相達候事

巡查並「遷卒」死傷ノ者吊祭扶助療治料規則  
一重傷死ニ至ル者

吊祭料三拾圓

但父母妻子親戚等ナキ者ハ同僚ニ給シテ吊祭セシム

遺族扶助金百圓

但父母妻子等遺留ノ家族ニ給ス

療治料

但疵ノ輕重ニ依リ其適度ヲ量リ之ヲ給ス

一一等傷痕 終身不具ニシテ自用ヲ辨スル能ハサル者

扶助金百圓

療治料

但疵ノ輕重ニ依リ其適度ヲ量リ之ヲ給ス

一二等傷痕 同上其次ナル者

扶助金七拾圓

療治料

但疵ノ輕重ニ依リ其適度ヲ量リ之ヲ給ス

一三等傷痕 同上稍其次ナル者

扶助金五拾圓

療治料

但疵ノ輕重ニ依リ其適度ヲ量リ之ヲ給ス

一四等傷痕 不具ニ至ルト雖モ用便ニ差支ナキ者

扶助金拾五圓

療治料

但疵ノ輕重ニ依リ其適度ヲ量リ之ヲ給ス

一五等傷痕 至ク不具ニ至ラサル者

療治料

但疵ノ輕重ニ依リ其適度ヲ量リ之ヲ給シ別ニ扶助金ヲ給セス

右ハ其職務上ノ事ニ就テ傷痕ヲ受シ者ノ例トス

○太政官達第六十七號 明治十五年十二月十二日

警視廳 府縣東京府 神戶府 四縣函館函館 札

一般人民ニシテ巡查同様ノ働ヲナシ死傷セシ者吊祭扶助療治料支給方左ノ通相  
定候條此旨相違候事

吊祭扶助療治料

一吊祭料

重傷死ニ至ル者へ金三十圓ヲ給ス親族故舊ナキモノハ戶長役傷ニ付シ便宜處分セシム

一遺族扶助料

父母妻子若クハ死者ニ依リ從來生計ヲナセシモノへ金五拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

一傷疾扶助料

一等傷終身不具トナリ自用ハサリ者へ金六拾圓ヨリ少カラス百圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

二等傷終身不具トナル者へ金拾圓ヨリ少カラス五拾圓ヨリ多カラサル額ヲ給ス

一療治料

傷疾ノ輕重ニ依リ其適度ヲ量リ之ヲ給ス

○内務省達乙第拾七號 明治十一年二月二十八日

東京警視本署

府縣

東京府ヲ除ク

一般人民時機不得止場合ニ於テ身ノ危難ヲ不顧巡查同様ノ働ヲナシ死傷ノ者吊

祭及扶助料給與方ニ付明治八年太政官第百八拾六號御達ノ趣有之候處自家ノ賊難ニ罹リ死傷スル者ハ給與ノ限リニアラス候條此旨爲心得相達候事

但特ニ愍諒ノ事情アツテ救恤セサルヲ得サルモノハ其都度事實ヲ具狀可伺出候事

○太政官達第五十五號

明治十六年十二月十三日

警視廳

府縣

東京府ヲ除ク

明治十三年<sup>四</sup>月<sup>四</sup>第二十五號達廢止候條同十五年<sup>七</sup>月<sup>七</sup>第四十一號達ヲ實施セサル府縣ニ於テハ水火防禦ノ爲ニ死傷セシ巡查ハ同八年<sup>一</sup>月<sup>一</sup>第三號達ニ照準處分スヘシ此旨相達候事

○内務省達甲第三十七號

明治八年十二月七日

府

縣

明治十七年第九號布達ヲ以テ印紙類賣捌規程改定相成候處未タ巡查看守給助例ヲ實施セサル地方モ有之ニ付八年第三號公達ニ依リ扶助料ヲ受ケタル巡查看守若クハ其遺族ニ限リ右規程第一條<sup>(寡婦孤兒ニ非ル)</sup>ニ依リ許可スルヲ得ヘシ爲心得此旨相達候事

○内務省訓令第四十二號

明治二十年九月七日

警察及監獄備員ニシテ職務上死傷セシモノ吊祭扶助療治料ハ十五年第六十七號

公達ニ照準支給ヘシ

但警察備ハ警察費監獄備ハ監獄費ヨリ支辨スルモノトス

○勅令第八十號 明治二十五年九月廿六日

官吏ニシテ職務ノ爲メ傷痍ヲ受ケタル者ハ特別ノ規定アル者ヲ除クノ外療治料實費ヲ以テ給與ス

但府縣ノ收入ヨリ給料ヲ受クル者ノ療治料ハ其府縣ノ負擔トス

(參照)

○愛媛縣伺 明治二十三年四月十五日

臨時人民ヲ雇入レ罪犯探偵ニ從事セシメ其際兇徒ノ爲メ負傷シ修身不具トナリ自用ヲ辨シ得サルニ至リタル者アリ十五年第六十七號公達ニ依リ扶助料及療治料ヲ支給スル見込ノ處警察ノ常備員ニ之ナキ以上ハ國庫ノ支辨ニ屬スル義ト心得可然哉將タ臨時雇ト雖モ二十年御省第四十二號訓令但書ニヨリ警察費ヨリ支辨スヘキヤ果テ後段ノ通トセハ雜給中巡查給助ノ外死傷手當ノ目ヲ設ケ整理シ可然哉

○內務省指令 明治二十三年五月十三日  
前段伺ノ通

○愛媛縣照會 明治二十三年五月廿八日

本縣巡查ニシテ教習所科業練習中柔術修業ノ際右肩胛關節白兼肋骨ヲ折傷シ爾來縣立病院ニ於テ治療相加ヘ候者有之候處右柔術ハ本縣ニ於テ教習所ノ科業ニ屬ス

ルヲ以テ職務ト同視シ給助例ニ依リ相當療治料給與シ可然哉一應御意見承知致度候

○警保局長回答 明治二十三年六月六日

巡查教習所科業練習中柔術ノ爲メ折傷シタルモノ給助例ニ依リ療治料給與方御間合セノ趣了承然ルニ明治十九年警察署ニ於テ擊斃修行ノ爲メ負傷シタルモノニ支給セサル旨指令相成タル類例モ有之候得共御來示ニ依レハ教習所科業中柔術ノ設ケアリテ教習生タル巡查力之ヲ修ムルハ當然ノ職務ト云ハサルヲ得サレハ先キノ指令トハ形跡同シキモ其旨趣ニ至テハ別異アルヲ以テ御見込ノ通リ職務ト同視シ支給相成候儀ハ差支有之間敷存候

○山梨縣伺 明治二十五年九月廿八日

本年九月勅令第八十號ニ療治料ヲ給與スヘキモノハ官吏ト有之候得共常時官職ニ從事セシムル見込ヲ以テ雇用スル雇員ニシテ規定ノ場合ニ遭遇シタルトキハ該令ニ依リ療治料ヲ支給スル義ニ候哉

○內務省指令 明治二十五年十月  
伺ノ通

職務ノ爲メ流行病ニ罹リタル者ノ恩給

○太政官達第八十九號 明治十年十二月一日 省 使 府 縣

流行病豫防救治ノ爲諸官廳ニ於テ該事ニ服從セシムル雇ノ醫師檢疫委員並ニ地方公立病院醫師其他從事ノ者該病毒ニ感染及ヒ死亡候節ハ本年ヨリ左ノ規則ニ照準シ處分可致此旨相達候事

流行病豫防救濟ニ備使スル醫師以下感染及ヒ死亡手當規則

第一條 凡流行病アル節諸官廳ニ於テ豫防救治ノ方法ヲ施行スル爲メ備使スル醫師檢疫委員會員ニテ委員トナルモ此限ニアラス看護人並地方公立病院醫師其他人夫等該病毒ニ感染及ヒ死亡スルモノハ此規則ニ照ラシ手當金ヲ給スヘシ

第二條 手當金ヲ分テ療養埋葬及ヒ遺族扶助ノ三種八等トナシ病者ハ療治料ヲ給シ死者ハ埋葬料及ヒ扶助料ヲ給スヘシ

第三條 手當金ノ差等ハ其月給ノ多寡ニ因リテ之ヲ定ム則チ貳百圓以上百五拾圓以上百圓以上七拾圓以上五拾圓以上貳拾圓以上拾圓以上拾圓未満トナシ等級ニ應シテ支給スヘシ

但日給ノモノハ壹ケ月ヲ平均三十日ト看做シ該日數ヲ乘シテ本條月給ノ等差ニ準スヘシ

第四條 療治料ハ自宅ニ於テ治療スルモノニ一日ニ付壹圓ヲ給シ其官公立病院ニ入ルモノハ適宜官費ヲ以支給スヘシ

第五條 遺族扶助料ハ戶主ニシテ家族ナキ者及ヒ戶主ニアラスシテ妻子ナキ者ハ給セス尤死者戶主ニアラス且妻子ナキ者ト雖モ其死者ニ依リ活計ヲ營ミ來

タル遺族一戶籍内ニアルモノハ之ヲ給スヘシ

第六條 埋葬料ヲ給スルニ獨身ニシテ且親戚ナキ者ハ病院或ハ同僚或ハ區戶長ニ下付スヘシ

第七條 流行病ノ節雇入ル、醫師ノ月給ハ明治八年第四拾九號達ノ通タルヘシト雖モ現ニ十五圓以上ノ給料ヲ以使府縣公立病院ニ從事スル醫師ヲ臨時該流行病ノ治療ニ任スルモノ並ニ虎列刺病ノ節拾五圓以上ヲ以雇タル檢疫委員ハ此規則ノ表面ニ照シテ給スヘシ

手當表

月給	等級	療治料	埋葬料	扶助料
貳百圓以上	一等	一日ニ付壹圓	五拾圓	貳百五拾圓
百五拾圓以上	二等	同	四拾圓	貳百圓
百圓以上	三等	同	三拾五圓	百五拾圓
七拾圓以上	四等	同	三拾圓	百貳拾五圓
五拾圓以上	五等	同	貳拾五圓	百圓
貳拾圓以上	六等	同	貳拾圓	八拾圓

拾圓以上	七等	同	拾五圓	六拾圓
拾圓未滿	八等	同	拾圓	四拾圓

各官廳

○閣令第二十三號 明治十九年七月十三日  
 官吏準官吏公務ニ依リ傳染病豫防救治ニ從事シ爲メニ感染シ又ハ死亡シタルト  
 キハ左ノ區別ニ從ヒ手當金ヲ給ス

- 一 手當金ヲ分チ吊祭料救助料療治料ノ三種トス
- 一 救助料ハ感染者又ハ死亡シタル者ノ遺族ニ之ヲ給ス
- 一 療治料ハ感染者治療看護ノ雜費トシテ之ヲ給ス
- 一 吊祭料ハ年俸十二分ノ一若クハ月俸一箇月分若クハ日給三十日分ヲ給ス但官  
 ヨリ埋葬スル者ハ之ヲ給セス
- 一 救助料ヲ分テ二等トス
  - 一 一等 俸給五箇月分日給百五十日分
  - 一 二等 俸給三箇月分日給九十日分
- 一 感染者死亡シタルトキハ一等救助料ヲ給シ死亡セサルトキハ二等救助料ヲ給ス
- 一 療治料ハ一日壹圓ヲ給ス但官ヨリ治療スル者ハ之ヲ給セス

○内務省訓令第五九八號 明治十九年八月十九日  
 傳染病豫防救治ニ從事シ爲メニ感染シ又ハ死亡シタル者等へ手當金給與之儀ハ  
 左ノ手續ニ依リ支給スヘシ

- 一 官吏准官吏ハ本年七月第二十三號閣令ニ依リ廳府縣ノ定額經費内ヨリ支給  
 シ直ニ内務大臣へ報告スヘシ
- 一 但高等官ニ係ルモノハ其都度具申スヘシ
- 一 該閣令ハ恩給令及一時賜金ノ法ニ拘ラス特ニ其手當金ヲ支給スルモノトス
- 一 巡查看守ハ明治十五年七月第四十一號公達巡查看守給助例ニ依リ巡査ハ警  
 察費ヨリ看守ハ監獄費ヨリ支給シ其感染死ニ至ラサル者ハ該閣令ニ依リ二  
 等給助料ヲ支給シ直チニ内務大臣ニ報告スヘシ
- 一 但該給助例實施以前ニ在テ未タ支給セサル者ハ明治八年第三號公達ニ依  
 リ巡査ハ警察費看守ハ監獄費ヨリ支給スヘシ
- 一 該閣令以前ニ係ル者ニシテ給與未濟ノモノハ此手續ニ據リ具申スヘシ
- 一 備醫師檢疫掛看護夫人夫等ハ總テ明治十年十二月第八拾九號公達ニヨリ地  
 方稅中衛生費若クハ身分所屬ノ地方費ヨリ適宜支給スヘシ

右訓令ス

(参照)

○内務書記官ヨリ通牒 明治十九年八月廿七日

傳染病豫防救治ニ從事シ爲ニ感染シ又ハ死亡シタル者等へ手當金給與ノ義ニ付本年訓第五九八號ヲ以テ訓令有之候ニ付テハ該訓令ニ依リ具申相成モノ並ニ給與清御報告ノモノハ左ノ儀々御附記相成度此段及御通知候也

追テ該訓令第一項中廳府縣ノ定額經費内ヨリ支給シ云々ト有之候處右廳府縣ノ定額經費トハ官吏準官身分所屬ノ經費ヨリ支給スル義ニ有之候條右様御了知相成度爲念此段申添候也

一傳染病豫防檢疫等ノ職務ヲ命シタル辭令書ノ寫  
但辭令書ヲ附セサルモ當然其職務ニ從事セシモノアルトキハ其證左トナルヘキモノ

一傳染セシト認ムル場所並ニ發病ノ狀況年月日(六傳染病ノ種別ヲ記ス)及全治死亡等ノ年月日

一相當醫師ノ診斷書

一該死者ニ依リ救助ヲ受クヘキ遺族ノ氏名年齢

○衛生兩局長通牒 明治二十年二月十四日

傳染病豫防救治ニ從事ノ爲メニ感染シ又ハ死亡シタル者手當金給與ノ件昨年七月第二十三號訓令有之候處右ノ内天然痘ノ如キハ種痘ヲ以テ之ヲ豫防スルノ良法モ有之且種痘規則ヲ以テ一般ニ接種セシムルノ方法モ相立居候義ニ付自今天然痘右疫ニ從事ノ者ハ必ス天然痘清又ハ規則ノ種痘ヲ行ヒ候者ノミニ限リ候様致度檢ハ豫メ其方法モ御設相成居候事トハ存候得共爲念此段申進候也

○勅令第七十一號 明治二十八年六月六日

傳染病豫防救治ニ從事スル官吏準官吏及備員ニシテ專ラ該病者又ハ病毒汚染ノ虞アル物品ニ接近スル者ニハ各其ノ俸給又ハ給料月額三分一以内ノ月手當ヲ給スルコトヲ得

但府縣ノ收入ヨリ俸給又ハ給料ヲ受クル官吏準官吏及備員ニシテ本官職ノ資格ヲ以テ從事スル者ニ給スル手當並ニ明治十三年第三十四號布告傳染病豫防規則第十四條ニ依リ檢疫委員ト爲ル者ニ給スル手當ハ府縣ノ負擔トス

第十四章 精勤證書

○内務省訓令第二十一號 明治二十二年五月二十五日 廳 府 縣(東京府 除ク)

巡查看守精勤證書授與規則

第一條 精勤證書ハ巡查看守ノ精勤ヲ證シ其名譽ヲ表スルモノトス

第二條 精勤證書ハ警察署長若クハ典獄ノ具狀ニ依リ廳府縣長官審査ノ上之ヲ授與スルモノトス

第三條 精勤證書ハ左ノ諸項ニ適合スルモノニ授與スヘシ

- 一 行狀方正
  - 二 勤務勉勵
  - 三 事務熟達
  - 四 滿三年奉職
- 第四條 第三條ニ適合ノモノト雖モ左ノ事項ニ該當スルモノハ精勤證書ヲ授與スルコトヲ得ス
- 一 官吏服務規律ニ違背シ若クハ巡查懲罰例ニ依リ月俸一箇月百分ノ二十以上ノ罰金ヲ科セラレタルモノ及月俸百分ノ二十以下ノ罰金ト雖モ一年二回以上ニ及フモノ
  - 二 奉職後刑法其他ノ法律規則ニ依リ處分ヲ受ケタルモノ
- 第五條 精勤證書ヲ所持スルモノニシテ退職後再任ヲ求ムルトキハ試験ヲ爲サスシテ採用スルコトヲ得
- 但年齡制限及體格試験ハ此限ニアラス
- 第六條 水火災若クハ盜難等ニ罹リ精勤證書ヲ亡失シタルトキハ再ヒ之ヲ授與スヘシ

第七條 精勤證書ヲ受ケタル後其行狀修ラス若クハ第四條ノ事項ニ該當スルモノアルトキハ其證書ヲ沒收スルコトアルヘシ

第八條 精勤證書ハ左ノ雛形ニ依リ調製スヘシ

用紙鳥ノ子紙 「」ノ中ハ孰モ朱書



第 號

「巡查 精勤證書  
看守」

「廳府縣 巡查  
看守 氏名」

右行狀方正ニシテ勤務勉勵事務ニ熟達ス因テ此證ヲ付與スルモノナリ

年 月 日

「官位勳爵氏名印」

六寸

四寸



○内務省訓令第五九八號 明治二十二年八月廿四日  
巡查看守精勤證書授與並沒收之件左之通施行セラレヘシ

巡查看守精勤證書授與規則第四條ニ該當シ過誤失錯ニ依リ處分ヲ受ケタル後勤  
續精勤セシモノニハ其處分翌月ヨリ起算シ同則第三條ニ適合スルトキ該證書ヲ  
授與スルコトアルヘシ

巡査懲罰例ニ依リ免職シ若クハ在職中行狀修ラスシテ體面ヲ汚シ巡査懲罰例第  
二條ニ該當セ  
モサル又ハ退職後ト雖モ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルモノハ精勤證書ヲ沒收ス可  
シ  
右訓令ス

(参照)

○内務書記官通牒 明治二十二年八月廿四日

本年五月廿五日當省訓令第廿一號巡查看守精勤證書授與規則第三條第四項ノ年期  
ハ該發布以前ニ溯リ起算ス又巡査ヨリ看守ニ看守ヨリ巡査ニ轉シ前後其年月ヲ通  
算シ滿三年ニ及フモ同項ヲ適用スヘカラサル儀ニ有之候條此旨及御通牒候也

○警保局長通牒 明治二十二年八月二十六日

本年内務省訓令第二十一號巡查看守精勤證書授與規則第七條ノ趣意ハ職務上過誤  
失錯等ニ依リ罰金以下ノ處分ヲ受ケタルモノニ對シテハ精勤證書ヲ沒收セス全ク

本月廿四日訓第五九八號末項ノ通りニ有之候條御心得ノ爲メ此段申進候也

○埼玉縣伺 明治二十五年七月二日

○巡查看守精勤證書沒收ノ儀ニ付伺

巡查看守精勤證書ハ全國ニ通シテ効力ヲ有スヘキモノニ付假令甲縣在職中授與シ  
タルモノト雖モ乙縣奉職中二十二年御省第五九八號訓令ニ該當スルノ所爲アルト  
キハ乙縣ニ於テ直ニ之ヲ沒收シ而シテ後甲縣へ通牒可然哉右ハ甲乙兩縣ニ交渉スル  
事件ニシテ未タ管テ取扱上ノ規定無之聊カ疑義相生シ候條此段相伺候也

○内務省指令 明治廿五年七月七日

本年七月二日親第二二三號伺巡查看守精勤證書沒收ノ件伺ノ通

○山梨縣伺 明治二十二年十一月廿七日

巡查看守精勤證書授與規則第三條第四項ノ年期ハ巡査ヨリ警察雇ニ轉シ警察雇ヨリ  
巡査ニ轉シタルモノハ前後其年月ヲ通算シ滿三年ニ及フモノハ精勤證書ヲ授與ス  
ルモ差支無之哉至急何分ノ御指揮有之度此段相伺候也

○内務省指令 明治二十二年十二月十一日

本年十一月廿七日第七七六號伺巡査奉職年數計算ノ件前後通算之限ニアラス

○警視廳伺 明治二十六年五月二十六日

畿ニ東京府及神奈川縣境域變更ノ爲メ神奈川縣ヨリ當廳へ轉任ノ巡查看守ハ總テ  
勤續ノ取扱相成候義ニ付精勤證書授與方ノ義モ從來當廳奉職ノ者ト同様取扱可然  
トハ存シ候得共爲念相伺候條至急御指揮相成度候也

○内務省指令 明治二十五年六月一日

境域變更ノ際神奈川縣ヨリ勤務スルモノハ總テ勤績ナルヲ以テ甲乙兩廳ノ奉職年數滿三年以上ニ及フモノニハ精勤證書ヲ授與スルヲ得ル義ト心得ヘシ但神奈川縣奉職中ニ係ル規則第三條第一項乃至第三項ノ事項ハ同縣ニ就キ適否ヲ確ムヘシ

### 第十五章 執務時間

九月十一日ヨリ十月三十一日迄	午前八時ヨリ午後四時ニ至ル
十一月一日ヨリ翌年二月末日迄	午前九時ヨリ午後四時ニ至ル
三月一日ヨリ七月十日迄	午前八時ヨリ午後四時ニ至ル
七月十一日ヨリ九月十日迄	午前八時ヨリ午後十二時ニ至ル

但土曜日日曜日ハ從前ノ通

### 第十六章 休暇及旅行

○内務省達番外 明治十八年七月三十日 警視廳 府縣東京府ヲ除ク

巡查看守休暇概則左ノ通相定候條其細目順序ハ適宜相定可届出此旨相達候事  
但本文ニ抵觸スル從前ノ指令ハ取消候事

第一條 巡查看守ハ常ニ定員ノ充足ヲ要スルヲ以テ休暇ヲ許サ、ルヘキモノナ

レ其勤務上差支ナキニ於テハ皆勤ノ者ニ限リ特ニ慰勞ノ爲メ休暇ヲ與フルコトヲ得

#### 第二條 休暇ノ日數ハ左ノ割合ニ從フ

休暇日數

一ケ年間皆勤ノ者 三週間

半ケ年間皆勤ノ者 一週間

前項ノ外五ケ年以上皆勤ノ者ニハ一週間以内十ケ年以上皆勤ノ者ニハ三週間以内特ニ休暇ヲ與フルコトヲ得

第三條 非番父母祭日及職務上負傷者ノ欠勤ハ欠勤日數ニ算入セス

第四條 休暇日數ハ數年ニ通算シテ併與スルヲ得ス

○内務省達警丁第一三號 明治十八年七月十三日

警察官暑中休暇之儀事務ノ都合ニ依リ賜暇限内休暇難相成モノハ一ケ年ヲ通シ三十日間休暇差許シ來候向モ有之候處自今不相成候條渾テ一般官員同様暑中ニ限ル儀ト可心得此旨相達候事

(参照)

○秋田縣問合 明治二十年三月三日

巡查其家族若クハ同居人ノ傳染病ニ罹リタルニ依リ消毒日限中ニ係ル欠勤日數ハ法律上自然其服務ヲ停止セラレタル筋ニ付忌引日數計算法ニ比準シ勤續ヲ計算スル場合ニ於テ算入セサル方可然ヤ

○警保局長回答 明治二十年三月十一日

御問合之趣領承右ハ御見解ノ通り忌引日數ト同視シテ欠勤出務共ニ算入セサル方可然ト存候

○警視廳伺 明治二十八年一月十八日

一五箇年以上ノ皆勤ニ依リ一週間以内ノ休暇ヲ與ヘタル後尚引續キ五箇年以上皆勤シ前後十箇年以上ニ至リタルトキハ更ニ三週間以内ノ休暇ヲ與フルコトヲ得ル義ニ候哉

二前項ノ休暇ハ從來ノ休暇トハ稍其趣ヲ異ニスルヲ以テ本人ノ願ニ由リ許可スルノ手續ニ依ラス特ニ辭令ヲ以テ休暇ヲ與フル義ト心得可然哉

三五箇年以上ノ皆勤ニ依リ與フル休暇ハ本則第四條ノ制限ニ拘ハラズ幾年ヲ經過スルモ其効アルモノト心得可然哉

○内務省指令 明治二十八年二月七日

第一項 伺ノ通

第二項 休暇 總テ特賜ニ係ルヲ以テ本人ノ願ニ依リ許可スヘキモノニアラス但辭令ヲ用ユルト否トハ其體ノ適宜トス

第三項 五箇年以上ノ皆勤者ニハ十箇年ニ至ルノ間ニ於テ休暇ヲ與フヘキモノトス

右同時ニ各府縣、集治監、通牒セリ

○太政官達第二十七號 明治九年三月十二日

院省使廳府縣

従前一六日休暇ノ處來ル四月ヨリ日曜日ヲ以テ休暇ト被定候條此旨相達候事

但土曜日ハ正午十二時ヨリ休暇タルヘキ事

○太政官達第三百十八號 明治六年九月十四日

省使 府縣

自今諸官員父母ノ祭日ニハ休暇ヲ賜リ候此旨相達候事

○正院迴達無號 明治六年四月十二日

諸 省

官員歸省御暇日數之儀ハ往來ヲ除キ三十日御開屆相成候筈ニ付諸省使府縣ニ於テモ同様可取計且湯治御暇等之儀モ右ニ準シ候條此段爲心得相達候也

但病氣其外無據事故有之向ハ日延之儀追願爲致更ニ三十日間差許不苦候事

### 第十七章 會計法

○法律第四號 明治二十二年二月十一日

#### 會計法

##### 第一章 總則

第一條 政府ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

一會計年度所屬ノ歳入歳出ノ出納ニ關ル事務ハ翌年度十一月三十日マテニ悉皆完結スヘシ

第二條 租税及其ノ他一切ノ收納ヲ歳入トシ一切ノ經費ヲ歳出トシ歳入歳出ハ總豫算ニ編入スヘシ

第三條 各年度ニ於テ決定シタル經費ノ定額ヲ以テ他ノ年度ニ屬スヘキ經費ニ充ツルコトヲ得ス

第四條 各官廳ニ於テハ法律勅令ヲ以テ規定シタルモノ、外特別ノ資金ヲ有スルコトヲ得ス

第二章 豫算

第五條 歳入歳出ノ總豫算ハ前年ノ帝國議會集會ノ始ニ於テ之ヲ提出スヘシ

第六條 歳入歳出ノ總豫算ハ之ヲ經常臨時ノ二部ニ大別シ各部中ニ於テ之ヲ款項ニ區分スヘシ

總豫算ニハ帝國議會參考ノ爲ニ左ノ文書ヲ添附スヘシ

第一 各省ノ豫定經費要求書但シ各項目ノ明細ヲ記入スヘシ

第二 其ノ年三月三十一日ニ終リタル會計年度歳入歳出現計書

第七條 豫算中ニ設クヘキ豫備費ハ左ノ二項ニ分ツ

第一 豫備金

第二 豫備金

第一豫備金ハ避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フモノトス

第二豫備金ハ豫算外ニ生シタル必要ノ費用ニ充ツルモノトス

第八條 豫備金ヲ以テ支辨シタルモノハ年度經過後帝國議會ニ提出シ其ノ承諾ヲ求ムルヲ要ス

第九條 毎年度大藏省證券發行ノ最高額ハ帝國議會ノ協賛ヲ經テ之ヲ定ム

第三章 收入

第十條 租税及其ノ他ノ歳入ハ法律命令ノ規程ニ從ヒ之ヲ徵收スヘシ

法律命令ニ依リ當該官吏ノ資格アル者ニ非サレハ租税ヲ徵收シ又ハ其ノ他ノ歳入ヲ收納スルコトヲ得ス

第四章 支出

第十一條 毎會計年度ニ於テ政府ノ經費ニ充ツル所ノ定額ハ其ノ年度ノ歳入ヲ以テ之ヲ支辨スヘシ

第十二條 國務大臣ハ豫算ニ定メタル目的ノ外ニ定額ヲ使用シ又ハ各項ノ金額ヲ彼此流用スルコトヲ得ス  
國務大臣ハ其ノ所管ニ屬スル收入ヲ國庫ニ納ムヘシ直ニ之ヲ使用スルコトヲ得ス

第十三條 國務大臣ハ其ノ所管定額ヲ使用スル爲ニ國庫ニ向ヒテ仕拂命令ヲ發スヘシ但シ別ニ定ムル所ノ規程ニ從ヒ他ノ官吏ニ委任シテ仕拂命令ヲ發セシムルコトヲ得ス

第十四條 國庫ハ法律命令ニ反スル仕拂命令ニ對シテ仕拂ヲ爲スコトヲ得ス

第十五條 國務大臣ハ政府ニ對シ正當ナル債主若ハ其ノ代理人ノ爲ニスルニ非サレハ仕拂命令ヲ發スルコトヲ得ス

左ノ諸項ノ經費ニ限リ國務大臣ハ主任ノ官吏ニ委任シ又ハ政府ノ命シタル銀行ニ委任シテ現金支拂ヲ爲サシムル爲ニ現金前渡ノ支拂命令ヲ發スルコトヲ得

第一 國債ノ元利拂

第二 軍隊軍艦及官船ニ屬スル經費

第三 在外各廳ノ經費

第四 前項ノ外總テ外國ニ於テ仕拂ヲ爲ス經費

第五 運輸通信ノ不便ナル内國ノ地方ニ於テ仕拂ヲ爲ス經費

第六 廳中常用雜費ニシテ一箇年ノ總費額五百圓ニ滿タサルモノ

第七 場所ノ一定セサル事務所ノ經費

第八 各廳ニ於テ直接ニ從事スル工事ノ經費但シ一主任官ニ付三千圓マテヲ限ル

第五章 決算

第十六條 會計検査院ノ検査ヲ經テ政府ヨリ帝國議會ニ提出スル總決算ハ總豫算ト同一ノ様式ヲ用井左ノ事項ノ計算ヲ明記スヘシ

歳入ノ部

歳入豫算額

調定濟歳入額

收入濟歳入額

收入未濟歳入額

歳出ノ部

歲出豫算額

豫算決定後增加歲出額

仕拂命令濟歲出額

翌年度繰越額

第十七條 前條ノ總決算ニハ會計検査院ノ検査報告ト俱ニ左ノ文書ヲ添附スヘシ

第一 各省決算報告書

第二 國債計算書

第三 特別會計計算書

第六章 期滿免除

第十八條 政府ノ負債ニシテ其仕拂フヘキ年度經過後滿五箇年内ニ債主ヨリ支出ノ請求若ハ仕拂ノ請求ヲ爲ササルモノハ期滿免除トシテ政府ハ其義務ヲ免ル、モノトス但シ特別ノ法律ヲ以テ期滿免除ノ期限ヲ定メタルモノハ各、其ノ定ムル所ニ依ル

第十九條 政府ニ納ムヘキ金額ニシテ其ノ納ムヘキ年度經過後滿五箇年内ニ上

納ノ告知ヲ受ケサルモノハ其ノ義務ヲ免ル、モノトス但シ特別ノ法律ヲ以テ期滿免除ノ期限ヲ定メタルモノハ各、其ノ定ムル所ニ依ル

第七章 歲計剩餘定額繰越豫算外收入及定額戻入

第二十條 各年度ニ於テ歲計ニ剩餘アルトキハ其ノ翌年度ノ歲入ニ繰入ルヘシ  
第二十一條 豫算ニ於テ特ニ明許シタルモノ及一年度内ニ終ルヘキ工事又ハ製造ニシテ避クヘカラサル事故ノ爲ニ事業ヲ遅延シ年度内ニ其ノ經費ノ支出ヲ終ラサリシモノハ之ヲ翌年度ニ繰越シ使用スルコトヲ得

第二十二條 數年ヲ期シテ竣功スヘキ工事製造及其ノ他ノ事業ニシテ繼續費トシテ總額ヲ定メタルモノハ毎年度ノ仕拂殘額ヲ竣功年度マテ遞次繰越使用スルコトヲ得

第二十三條 誤拂過渡トナリタル金額ノ返納出納ノ完結シタル年度ニ屬スル收入及其ノ他一切豫算外ノ收入ハ總テ現年度ノ歲入ニ組入ルヘシ但シ法律勅令ニ依テ前金渡概算繰替拂ヲ爲シタル場合ニ於ケル返納金ハ各、之ヲ仕拂ヒタル經費ノ定額ニ戻入ルルコトヲ得

第八章 政府ノ工事及物件賣買貸借

第二十四條 法律勅令ヲ以テ定メタル場合ノ外政府ノ工事又ハ物件ノ賣買貸借ハ總テ公告シテ競争ニ付スヘシ但シ左ノ場合ニ於テハ競争ニ付セス隨意ノ約定ニ依ルコトヲ得ヘシ

第一 一人又ハ一會社ニテ專有スル物品ヲ買入レ又ハ借入ルルトキ

第二 政府ノ所爲ヲ祕密ニスヘキ場合ニ於テ命スル工事又ハ物品ノ賣買貸借ヲ爲ストキ

第三 非常急遽ノ際工事又ハ物品ノ買入借入ヲ爲スニ競争ニ付スル暇ナキトキ

第四 特種ノ物質又ハ特別使用ノ目的アルニ由リ生産製造ノ場所又ハ生産者製造者ヨリ直接ニ物品ノ買入ヲ要スルトキ

第五 特別ノ技術家ニ命スルニ非サレハ製造シ得ヘカラサル製造品及機械ヲ買入ルルトキ

第六 土地家屋ノ買入又ハ借入ヲ爲スニ當リ其ノ位置又ハ構造等ニ限アル場合

第七 五百圓ヲ超エサル工事又ハ物品ノ買入借入ノ契約ヲ爲ストキ

第八 見積價格二百圓ヲ超エサル動産ヲ賣拂フトキ

第九 軍艦ヲ買入ルルトキ

第十 軍馬ヲ買入ルルトキ

第十一 試験ノ爲ニ工作製造ヲ命シ又ハ物品ヲ買入ルルトキ

第十二 慈惠ノ爲ニ設立セル教育所ノ貧民ヲ備役シ及其ノ生産又ハ製造物品ヲ直接ニ買入ルルトキ

第十三 囚徒ヲ備役シ又ハ囚徒ノ製造物品ヲ直接ニ買入ルルトキ及政府ノ設立ニ係ル農工業場ヨリ直接ニ其ノ生産又ハ製造物品ヲ買入ルルトキ

第十四 政府ノ設立シタル農工業場又ハ慈惠教育ニ係ル各所ノ生産製造物品及囚徒ノ製造物品ヲ賣拂フトキ

第二十五條 軍艦兵器彈藥ヲ除ク外工事製造又ハ物件買入ノ爲ニ前金拂ヲ爲スコトヲ得ス

第九章 出納官吏

第二十六條 政府ニ屬スル現金若ハ物品ノ出納ヲ掌ル所ノ官吏ハ其ノ現金若ハ

物品ニ付一切ノ責任ヲ負ヒ會計検査院ノ検査判決ヲ受クヘシ

第二十七條 前條ノ官吏水火盜難又ハ其ノ他ノ事故ニ由リ其ノ保管スル所ノ現金若ハ物品ヲ紛失毀損シタル場合ニ於テハ其ノ保管上避ケ得ヘカラサリシ事實ヲ會計検査院ニ證明シ責任解除ノ判決ヲ受クルニ非ラサレハ其ノ負擔ノ責ヲ免ルルコトヲ得ス

第二十八條 現金又ハ物品ノ出納ヲ掌ルニ付身元保證金ヲ納メシムルコトヲ要スルモノハ勅令ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第二十九條 仕拂命令ノ職務ハ現金出納ノ職務ト相兼スルコトヲ得ス

第十章 雜則

第三十條 特別ノ須要ニ因リ本法ニ準據シ難キモノアルトキハ特別會計ヲ設置スルコトヲ得

特別會計ヲ設置スルハ法律ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第三十一條 政府ハ國庫金ノ取扱ヲ日本銀行ニ命スルコトヲ得

第十一章 附則

第三十二條 本法ノ條項帝國議會ニ關涉セサルモノハ明治二十三年四月一日ヨ

リ施行シ其ノ關涉スルモノハ帝國議會開會ノ時ヨリ施行ス

決算ニ係ル條項ハ帝國議會ノ議定ヲ經タル年度ノ歲計ヨリ施行ス

第三十三條 本法ノ條項ト抵觸スル法令ハ各其ノ條項施行ノ日ヨリ廢止ス

○法律第五十七號 明治二十三年八月二日

會計法補則

第一條 明治二十三年度歲出豫算中左ノ費用ハ明治二十四年度ノ豫算ニ於テ憲法第六十七條ニ規定シタル大權ニ基ケル既定ノ歲出トス

一 文武官ノ俸給及文官退官賜金

二 陸海軍軍事費憲兵費屯田兵費

三 賞勳年金及褒賞費

四 外國條約及約束ニ依レル支出

五 各廳ノ廳費及經常修繕費

第二條 帝國議會開會前ニ發布セラレタル法令ニ基ク左ノ費用ハ法律ノ結果ニ由ルノ歲出トス

一 帝國議會經費



- 二 裁判所並會計検査院經費
  - 三 恩給扶助料罷役恤金及死傷手當
  - 四 徵兵費
  - 五 徵稅費 證券印紙切手類製造買戻押印費雜札製造費所得稅調查委員  
手當市町村ニ交付スル徵稅費滯納處分費差押物件買上代
  - 六 囚徒費
  - 七 遞信事業及航路標識費
  - 八 内外國難破船費
  - 九 沖繩縣及小笠原島地方費
  - 十 備荒儲蓄
  - 十一 北海道拂下土地買上代
  - 十二 恩賞及救助費
- 第三條 明治二十四年度歲出豫算ニ於テ左ノ費用ハ憲法第七十六條第二項ニ規定シタル政府歲出上ノ義務トス
- 一 神社費
  - 二 公債償還利子支拂手數料

- 三 既ニ定マレル効力アル命令ニ依リ毎年各地方ニ付與スヘキ公共工事費補助及警察費聯帶支辨金
  - 四 沖繩縣諸祿
  - 五 既ニ定マレル効力アル命令ニ依リ航運鐵道製造殖産ノ會社及病院學校ニ付與スヘキ補助又ハ利子保證
  - 六 雇外國人ノ俸給恩給及手當
  - 七 法律上ノ賠償及訴訟費
  - 八 諸拂戻金
  - 九 國庫金取扱費
  - 十 預金利子
  - 十一 既約アル地所家屋借料
- 第四條 明治二十三年度以前ノ歲出豫算ニ於テ數年ヲ期シタル事業ニシテ明治二十四年度ニ至ルマテ未タ竣工ニ至ラサルモノハ繼續費ノ例ニ依ル
- 勅令第六十號 明治二十二年四月三十日
- 會計規則

第一章 會計年度所屬區分歲入歲出金出納

- 第一條 歲入ノ年度所屬ハ左ノ區分ニ據ル
    - 第一 納期ノ一定シタル收入ハ其納期末日ノ屬スル年度
    - 第二 隨時ノ收入ニシテ納額告知書ヲ發スルモノハ納額告知書ヲ發シタル日ノ屬スル年度
    - 第三 隨時ノ收入ニシテ納額告知書ヲ發セサルモノハ領收ヲ爲シタル日ノ屬スル年度
  - 第二條 歲出ノ所屬年度ハ左ノ區分ニ據ル
    - 第一 公債ノ元利賞勳年金恩給諸祿ノ類ハ仕拂期日ノ屬スル年度
    - 第二 諸拂戻欲損補填ハ其拂戻又ハ補填ノ決定ヲ達シタル日ノ屬スル年度
    - 第三 俸給手數料旅費ノ類ハ其支給スヘキ事實ノ生シタル時ノ屬スル年度
    - 第四 廳中雜費土木建築費其他物件ノ購入代價ノ類ハ契約ヲ爲シタル日ノ屬スル年度
- 但土木建築費ノ如キ契約ノ數年ニ涉ルコトヲ得ヘキモノハ契約ニ據リ定メタル仕拂期日ヲ以テ區分スヘシ

前各項ニ掲クル類別ニ入ラサル費用ハ總テ仕拂命令ヲ發シタル日ヲ以テ年度ノ所屬ヲ定ムヘシ

第三條 毎年度所屬歲入歲出金ヲ金庫ニ於テ出納スルハ翌年度八月三十一日限リトス

第二章 豫算

第一款 總豫算

- 第四條 大藏大臣ハ歲入ノ景況ヲ調査シ各省ノ豫定經費要求書ニ基キ歲入歲出總豫算ヲ調製スヘシ
  - 總豫算ノ首ニハ歲計全體ニ關スル説明ヲ付スヘシ
  - 第五條 歲入豫算ハ經常臨時共ニ款項ニ區分シテ調製シ成ルヘク歲入ノ性質ヲ明示スヘシ
  - 第六條 歲出豫算ハ經常臨時共ニ款項ニ區分シテ調製シ成ルヘク經費ノ目的ヲ明ニスヘシ
  - 第七條 歲入歲出總豫算款項ノ區分ハ大藏大臣之ヲ定ムヘシ
- 第二款 豫定經費要求書

第八條 各省大臣ハ毎年度其所管經費ノ需用高ヲ算定シ前年度ノ定額ト比較ヲ立テ豫定經費要求書ヲ調製シ前年度六月三十日マテニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第九條 各省ノ豫定費要求書ハ經常臨時共ニ款項ニ區分シ更ニ各項中所要ノ金額ヲ各目ニ區分シ尙ホ必要ノ場合ニ於テハ番號ヲ以テ之ヲ細分シ又經費所要ノ理由計算ノ基ク所ヲ示スヘシ  
目ノ區分ハ各省大臣大藏大臣ト協議シテ之ヲ定ムヘシ

第十條 各省ノ豫定經費要求書ニハ各省所管經費全體ニ關スル説明及各款各項ノ説明ヲ付スヘシ

第三款 仕拂豫算

第十一條 各省大臣ハ毎年度決定ノ豫算定額ニ基キ仕拂命令官毎ニ所要ノ費額ヲ定メ仕拂豫算ヲ調製シ大藏大臣ノ檢視ヲ受クヘシ  
仕拂豫算ハ各項ノ金額ヲ示スヘシ

第十二條 仕拂豫算ヲ更定セントスルトキハ其更定ヲ要スル金額理由ヲ詳具スル所ノ計算書ヲ作り大藏大臣ノ檢視ヲ受クヘシ

第十三條 大藏大臣仕拂豫算若クハ其更定計算書ヲ檢視シタルトキハ之ヲ會計検査院ニ通知スヘシ

第四款 歳入歳出現計書

第十四條 會計法第六條ニ掲クル歳入歳出現計書ハ大藏省ニ備ヘタル主計簿ニ據リ大藏大臣之ヲ調製スヘシ

第十五條 歳入歳出現計書ニハ總豫算ニ定メタル區分ニ從ヒ其年三月三十一日ヲ以テ終リタル年度ニ屬スル歳入歳出ノ八月三十一日ニ於ル左ノ事項ノ現計ヲ示スヘシ

- 歳入ノ部
- 歳入豫算額
- 調定済歳入額
- 收入済歳入額
- 收入未済歳入額
- 歳出ノ部
- 歳出豫算額

豫算決定後増加歳出額  
仕拂命令濟歳出額  
翌年度繰越額

第五款 豫備金支出

第十六條 豫備金ハ大藏大臣之ヲ管理ス

第十七條 豫備金ヲ以テ補充シ得ヘキ費途及豫備金ヲ以テ支辨スル費途ノ金額ハ他ノ費途ニ流用スルコトヲ得ス

第十八條 第一豫備金ヲ以テ補充シ得ヘキ費途ハ毎年度豫メ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十九條 各省大臣第一豫備金ノ支出ヲ要スルトキハ金額理由ヲ示ス所ノ計算書ヲ作り大藏大臣ノ承認ヲ經ヘシ

第二十條 大藏大臣第一豫備金ノ支出ヲ承認シタルトキハ之ヲ會計検査院ニ通知スヘシ

第二十一條 各省大臣第二豫備金ノ支出ヲ要スルトキハ金額理由ヲ示ス所ノ計算書ヲ作り之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第二十二條 大藏大臣ハ前條ノ計算書ヲ調査シ其意見ヲ付シテ勅裁ヲ請フヘシ

第二十三條 第二豫備金支出ノ勅裁アリタルトキハ大藏大臣其事故金額ヲ會計検査院ニ通知シ又官報ニ掲載スヘシ

第二十四條 豫備金ヲ以テ補充支辨シタル金額ハ各省大臣其計算書ヲ作り各費途毎ニ説明ヲ付シ年度經過後五箇月以内ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

大藏大臣ハ豫備金支出ヲ第一豫備金支出ト第二豫備金支出トニ大別シ其總計算書ヲ作り之ニ説明ヲ付シ各省大臣ヨリ送付シタル豫備金支出ノ計算書ト共ニ帝國議會ニ提出スルノ手續ヲ爲スヘシ

第三章 収入

第二十五條 収入官吏現金ヲ以テ租稅其他ノ収入ヲ領收スルトキハ其領收證ヲ納人ニ交付スヘシ

第二十六條 現金ヲ領收スル收入官吏ハ大藏大臣定ムル所ノ規則ニ從ヒ毎月一回若クハ數回其領收シタル金額ヲ金庫ニ拂込ムヘシ但外國及金庫ノ設ナキ運輸通信ノ不便ナル内國ノ地方ニ在ル收入官吏ノ領收シタル金額ハ該官吏之ヲ保管シ大藏大臣ノ指定ニ從ヒ金庫ニ拂込ノ手續ヲ爲スヘシ

第二十七條 金庫ハ收入官吏又ハ納人ヨリ租稅其他ノ收入金ヲ領收スルトキハ  
收入ノ目的ヲ記入シタル別符付ノ領收證ヲ拂込人又ハ納人ニ交付スヘシ  
第二十八條 第二十六條ノ拂込ニ對シ金庫ヨリ交付シタル領收證ハ收入官吏ヨ  
リ歲入ノ徵收ヲ監督スル所ノ官吏ニ送付シ別符ヲ切離セシメ其檢印ヲ受クヘ  
シ

第二十九條 納人ヨリ租稅其他ノ收入金ヲ直接ニ金庫ニ納付シタルトキハ收入  
官吏ハ金庫ヨリ納人ニ交付シタル領收證ニ檢印シ別符ヲ切離シ領收證ヲ納人  
ニ返付スヘシ

第三十條 收入官吏ハ其收入ヲ記入スル帳簿ノ結果ニ據リ毎月收入報告書ヲ調  
製シ参照書類ヲ添へ各省大臣ノ定メタル期限ニ之ヲ其事務管理廳ニ送付スヘ  
シ

第三十一條 歲入ノ事務管理廳ハ收入官吏ヨリ送付シタル收入報告書ニ據リ每  
月收入總報告書ヲ作り之ニ必要ナル参照書類ヲ添へ其翌月中ニ大藏大臣ニ送  
付スヘシ

第四章 支出

第一款 仕拂命令

第三十二條 仕拂命令官ハ總テ仕拂命令ヲ發スル前其經費ハ正當ニシテ必要ナ  
ルヤヲ調査シ該經費ノ金額ヲ算定シ又該經費ハ仕拂豫算額ニ超過スルコトナ  
キヤ支出科目及所屬年度ヲ誤ルコトナキヤ該經費ハ豫算ヲ以テ定メラレタル  
目的ニ違フコトナキヤヲ調査スヘシ

第三十三條 仕拂命令ニハ債主若クハ其代理人ノ氏名仕拂フヘキ金額支出科目、  
年度、番號、支出ノ目的ヲ記載スヘシ但俸給諸給恩給賞勳年金諸祿及定額拂切經  
費ノ仕拂ヲ爲ストキ支出科目ノ同一ナルモノハ數人ノ債主ニ對シ集合仕拂命  
令ヲ發シ別ニ各債主ノ金額氏名表ヲ添ユルコトヲ得

現金前渡ノ仕拂命令ニハ前渡ヲ受クヘキ官吏ノ資格、氏名(銀行ナレハ其名稱)前  
渡ヲ爲スヘキ金額、支出科目、年度及番號ヲ記載スヘシ

第三十四條 仕拂命令ハ一項毎ニ之ヲ發スヘシ

第三十五條 仕拂命令ニハ支出ノ證據ニ必要ナル書類ヲ添へ仕拂命令官ヨリ之  
ヲ會計主務官ニ交付スヘシ

第三十六條 會計主務官其仕拂命令ヲ正當ト認ムルトキハ之ニ「調定濟」ト記入シ

署名捺印シテ之ヲ受取人ニ交付スヘシ但數人ノ債主ニ對スル集合仕拂命令及仕拂命令ヲ當テタル金庫所在地ノ外ニ於テ仕拂ヲ要スルモノハ直ニ仕拂命令ヲ金庫ニ送付シ受取人ニ仕拂ノ手續ヲ爲スヘシ

第三十七條 會計主務官前條ニ據リ仕拂命令ヲ不當ト認ムルトキハ其事由ヲ本屬大臣ニ申立ヘシ

本屬大臣會計主務官ノ申立ニ拘ハラズ仕拂命令ヲ發スヘキコトヲ命スルトキハ會計主務官ハ仕拂命令ニ特命調定ト記入シ署名捺印シテ之ヲ受取人ニ交付スヘシ但仕拂命令ノ金額若シ仕拂豫算額ニ超過スルトキハ本屬大臣ノ特命ヲ受クト雖モ尙ホ大藏大臣ノ指揮ヲ請フヘシ

第三十八條 會計主務官仕拂命令ヲ受取人ニ交付シタルトキハ同時ニ金庫ニ案内仕拂命令ヲ送付スヘシ但第三十六條但書ニ據リ仕拂命令ヲ金庫ニ送付シタル場合ニ於テモ亦同シ

第三十九條 現金前渡ノ仕拂命令ハ左ノ區分ニ從ヒ之ヲ發スヘシ

第一 常時ノ費用ニ係ルモノハ每一箇月分ノ費額ヲ豫定シテ仕拂命令ヲ發スヘシ但在外各廳ノ經費外國ニ於テ仕拂ヲ爲ス經費運輸通信ノ不便ナル内國

ノ地方ニ於テ仕拂ヲ爲ス經費其他仕拂場所ノ一定セサル經費ハ事務ノ必要ニ由リ二箇月以上六箇月分マテ合セテ仕拂命令ヲ發スルコトヲ得

第二 隨時ノ費用ニ係ルモノハ所要ノ費額ヲ豫定シテ事務上差支ナキ限りハ成ルヘク分割シテ仕拂命令ヲ發スヘシ

第三 各廳ニ於テ直接ニ從事スル工事ノ經費ハ工事ノ大小ニ由リ其所要ヲ量リ三千圓以内ニ於テ仕拂命令ヲ發スヘシ

第四十條 會計法第十五條第八ニ據リ現金前渡ヲ爲シタルトキハ左ノ場合ヲ除クノ外更ニ同一ノ主任官吏ニ現金前渡ヲ爲スタメ仕拂命令ヲ發スルコトヲ得ス

第一 前ニ發シタル仕拂命令ノ金額三分ノ二以上ノ仕拂濟證明アリタルトキ但此場合ニ於テハ更ニ發スル仕拂命令ノ金額ト前ニ發シタル仕拂命令ノ仕拂濟證明未濟ノ金額ト合シテ三千圓ヲ超ルコトヲ得ス

第二 前ニ發シタル仕拂命令ノ金額三千圓未滿ニシテ更ニ發スル仕拂命令ノ金額ト合シテ三千圓ヲ超サルトキ

第四十一條 現金前渡ヲ受ケタル官吏監督ノ規則ハ大藏大臣各省大臣ニ協議シ

テ之ヲ定ムヘシ

第四十二條 會計法第十五條ニ據リ政府ノ命シタル銀行ニ委任シテ現金仕拂ヲ爲サシムル爲メニ發スル現金前渡ノ命令ハ國債元利金仕拂ノ場合ニ限ル

第四十三條 仕拂命令ハ所屬年度經過後滿五箇年內ハ仕拂ノ請求アル毎ニ金庫ニ於テ仕拂フモノトス

第四十四條 各年度ニ屬スル經費ヲ精算シテ仕拂命令ヲ發スルハ翌年度六月三十日限リトス

第二款 仕拂命令ノ執行

第四十五條 金庫ニ於テハ休日ヲ除クノ外毎日其開庫時間内ハ何時ニテモ仕拂命令持參人ニ仕拂命令ト引替ニテ現金ヲ交付スヘシ

第四十六條 左ノ場合ニ於テハ事由ヲ仕拂命令持參人ニ告ケ金庫ニ於テ仕拂命令ノ執行ヲ拒ムヘシ

第一 案内仕拂命令ノ到着セサルトキ

第二 仕拂命令ト案内仕拂命令ト符合セサルトキ

第三 仕拂命令汚損シ案内仕拂命令ト照合シ難キトキ

第四十七條 各年度ノ仕拂命令ニシテ翌年度八月三十一日マテニ仕拂ノ請求ナ

キ仕拂命令濟金額ニ相當スル資金ハ會計法第二十條ノ歲計剩餘ニ組入レス國庫ニ於テ繰越整理スヘシ

第四十八條 前條ノ資金中年度經過後滿五箇年內ニ仕拂ノ請求ナクシテ會計法第十八條ノ期滿免除ニ據リ政府カ負債ノ義務ヲ免レタルモノアルカ爲メ不用トナリタルモノハ其負債ノ期滿免除トナリタル年度ノ歲入ニ組入ルヘシ

第三款 計算報告

第四十九條 會計主務官ハ其支出ヲ記入スル帳簿ノ結果ニ據リ毎月支出報告書ヲ調製シ参照書類ヲ添ヘ各省大臣ノ定メタル期限ニ之ヲ各省中央會計主務官ニ送付スヘシ

第五十條 各省中央會計主務官ハ各會計主務官ヨリ送付シタル支出報告書ニ據リ毎月支出總報告書ヲ作り之ニ必要ナル参照書類ヲ添ヘ其翌月中ニ大藏大臣ニ送付スヘシ

第五章 決算

第一款 總決算

第五十一條 歳入歳出總決算ハ總豫算ト同一ノ區分ニ據リ大藏大臣之ヲ調製スヘシ

第二款 各省決算報告書

第五十二條 各省大臣ハ翌年度十二月三十一日マテニ各省豫定經費要求書ト同ノ區分ニ據リ其省所管ニ屬スル經費ノ決算報告書ヲ調製シ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第三款 國債計算書

第五十三條 國債計算書ハ大藏大臣之ヲ調製スヘシ

第五十四條 國債計算書ニハ左ノ事項ヲ示スヘシ

- 第一 當該年度末日ニ於ル國債ノ種類及現高ヲ示ス所ノ計算
- 第二 當該年度ニ於テ償還シ及仕拂ヒタル各種國債ノ元高及利息ノ計算
- 第三 最近五箇年度間ニ於ル各種國債増減ノ形況ヲ示ス所ノ計算

第四款 特別會計計算書

第五十五條 特別會計計算書ハ會計法第三十條ニ據リ特別ノ會計ヲ立ルコトヲ許サレタル事務ヲ管理スル所ノ各省大臣之ヲ調製シ毎年度經過後五箇月以内

ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第五十六條 特別會計計算書ニハ左ノ事項ヲ示スヘシ

- 第一 收入計算
  - 第二 支出計算
  - 第三 最近五箇年度間資金ノ増減
  - 第四 最近五箇年度間損益ノ比較
- 第六章 定額繰越過年度支出定額戻入
- 第一款 定額繰越

第五十七條 各省大臣會計法第二十一條及第二十二條ニ據リ定額ヲ翌年度ニ繰越サントスルトキハ年度經過後一箇月以内ニ繰越計算書ヲ作り大藏大臣ノ承認ヲ經ヘシ

本條繰越計算書ハ歳出豫算ノ區分ニ從ヒ調製シ左ノ事項ヲ示スヘシ

- 第一 繰越ヲ要スル項ノ定額
- 第二 右定額ニ對シ年度内ニ仕拂命令濟トナリタル額
- 第三 右定額ニ對シ仕拂命令ヲ發スヘキ額即チ翌年度ニ繰越ヲ要スル額



第四 右定額中全ク不用ニ歸シ決算ニ於テ取消スヘキ額

第五十八條 會計法第二十一條ニ據リ年度内ニ其經費ノ支出ヲ終ラサリシ金額ヲ翌年度ニ繰越サントスルトキハ其繰越サントスル金額ノ計算書ニ各事件毎ニ竣功遅延ノ事由ヲ示シ又請負ニテ爲サシムル工事若クハ製造ナレハ竣功遅延ノ事由ノ外ニ請負人職業住所氏名ヲ示シ契約書ノ寫ヲ添ユヘシ

第五十九條 大藏大臣各省定額ノ繰越ヲ承認シタルトキハ之ヲ會計検査院ニ通知スヘシ

第二款 過年度支出

第六十條 各省大臣過年度ニ屬スル經費ヲ支出セントスルトキハ其金額及其所屬年度ノ豫算ニ定メタル區分、年度、支出ノ事由ヲ示シ大藏大臣ノ承認ヲ經ヘシ大藏大臣前項ノ承認ヲ爲シタルトキハ翌月十日以内ニ之ヲ會計検査院ニ通知スヘシ

第六十一條 前條ニ據リ大藏大臣ノ承認ヲ經タル經費ヲ仕拂フ爲メ各省大臣ハ其承認ヲ經タル年度ノ各省定額ニ對シ仕拂命令ヲ發スヘシ

第六十二條 第六十條ニ據リ支出セントスル經費ノ金額ハ豫備金ヲ以テ補充シ

得ヘキモノ、外其經費所屬年度ノ豫算ニ於テ該經費ノ屬スル毎項定額中不用トナリタル金額ヲ超過スヘカラス

第三款 定額戻入

第六十三條 各省大臣會計法第二十三條但書ニ據リ定額ノ戻入ヲ爲サントスルトキハ定額戻入要求書ヲ作り大藏大臣ノ檢視ヲ受クヘシ

第六十四條 定額戻入要求書ニハ左ノ事項ヲ示スヘシ

第一 戻入ルヘキ金額

第二 金庫ニ於テ返納金ヲ領收シタル日付

第三 前金渡概算渡繰替拂ヲ爲シタル仕拂命令ノ金額、年度、科目、番號、日付

第四 戻入ノ事由

第六十五條 各年度ニ屬スル定額戻入ノ要求ヲ爲スハ翌年度六月三十日ヲ過クルコトヲ得ス

第六十六條 大藏大臣各省大臣ノ要求ニヨリ定額ノ戻入ヲ檢視シタルトキハ之ヲ會計検査院ニ通知スヘシ

第七章 政府ノ工事及物件ノ賣買貸借

第一款 總則

第六十七條 契約ニ據リ工事ノ既濟部分又ハ物品ノ既納部分ニ對シ完濟前ニ代價ノ一部分ヲ仕拂ハントスルトキハ各省大臣ハ特ニ検査ノ官吏ヲ命シテ事實ヲ測定シ其調書ヲ作ラシムヘシ

仕拂命令官ハ前項ノ調書ニ據ルニアラサレハ仕拂命令ヲ發スルコトヲ得ス

第六十八條 前條ノ仕拂ヲ爲サントスルトキハ工事ノ既濟又ハ物品ノ既納トナリタル部分ニ對スル代價ノ五分ノ四ヲ超ユヘカラス

第六十九條 工事又ハ物品供給ノ競争ニ加ハラントシ若クハ其契約ヲ結ハントスル者ハ其工事又ハ物品ノ供給ニ二年以來從事スルコトヲ證明スヘシ  
工事又ハ物品供給ノ競争ニ加ハラントシ若クハ其契約ヲ結ハントスル者ハ現金又ハ公債證書ヲ以テ保證金ヲ納ムヘシ

第七十條 前條ノ保證金ハ左ノ制限ニ據リ各省大臣ハ之ヲ定ムヘシ

第一 競争ニ加ハラントスル者ハ其事項ノ見積代金ノ百分ノ五以上

第二 契約ヲ結ハントスル者ハ其事項ノ代金ノ百分ノ十以上

第七十一條 競争ノ落札者請負ノ契約ヲ結ハサルトキハ其保證金ハ政府ノ所得

トス

第二款 競争契約

第七十二條 競争ハ總テ入札ノ方法ヲ以テ之ヲ行フヘシ

第七十三條 入札ノ方法ヲ以テ工事又ハ物件ノ賣買貸借ヲ契約セントスルトキハ其入札期日ヨリ少クモ十五日以前ヨリ揭示又ハ官報新聞紙其他ノ方法ヲ以テ成ルヘク廣ク公告スヘシ

第七十四條 前條ノ公告ニハ左ノ事項ヲ示スヘシ

第一 競争入札ニ付スル事項

第二 契約書案ヲ示ス場所及其契約取結ヲ擔任スル官吏ノ官氏名

第三 競争執行ノ場所日限及時刻

第四 入札ノ保證金額

第七十五條 各省大臣若クハ其委任ヲ受ケタル官吏ハ其競争入札ニ付シタル工事又ハ物件ノ價格ヲ豫定シ其豫定價格ヲ封書トシ開札ノトキ之ヲ開札場所ニ置クヘシ

第七十六條 開札ハ公告ニ示シタル場所日限時刻ニ入札人ノ面前ニ於テ之ヲ行

フヘシ

入札人又ハ其代理人若シ開札ノ場所ニ出席セサルトキハ其入札ハ無効トス

第七十七條 開札ノ上ニテ各人ノ入札中一モ第七十五條ニ據リ豫定シタル價格

ノ制限ニ達セサルトキハ直ニ入札人ヲシテ再度ノ入札ヲ爲サシムルコトヲ得

第七十八條 落札トナルヘキ同價ノ入札ヲ爲シタル者數名アルトキハ同價ノ入

札者ヲシテ直ニ再度ノ入札ヲ爲サシムヘシ

再度ノ入札ヲ爲スモ尙ホ同價ノ入札アルトキハ直ニ抽籤ヲ以テ落札人ヲ定ム

ヘシ

第七十九條 競争ノ落札者請負ノ契約ヲ結ハサルトキハ更ニ競争ヲ行フヘシ

第八十條 工事及物件ノ賣買貸借契約書ニハ其契約セントスル事項ノ細密ナル

設計仕譯落成期限受渡期限保證金額契約違背ノトキ保證金ニ對スル處分其他

一切必要ナル條件ヲ掲クヘシ

第八十一條 契約ハ各省大臣若クハ特ニ其委任ヲ受ケタル官吏其契約書ニ署名

捺印スルニアラサレハ確定セサルモノトス

第三款 隨意契約

第八十二條 隨意契約書ハ第八十條及第八十一條ニ準據シ之ヲ作ルヘシ但一口  
五百圓未滿ノ隨意契約ノ場合ニ於テハ左ノ書類ノ一ヲ以テ契約書ニ代用スル  
コトヲ得

第一 設計仕譯書ノ末ニ請負人ノ署名捺印シタルモノ  
第二 請負人ノ署名捺印セル承諾書  
第三 商業上ノ習慣ニ從ヘル往復書

第八十三條 隨意契約ノ場合ニ於テハ各省大臣ノ見込ニヨリ請負人ノ保證金ヲ  
免除スルコトヲ得

第八章 出納官吏

第一款 會計主務官收入官吏現金前渡ヲ受ケタル官吏

第八十四條 出納官吏ハ其責任ニ屬スル會計ニ付自身ニ事務ヲ執ラサルヲ理由  
トシテ其責任ヲ免ルコトヲ得ス但各省大臣ノ命令ヲ以テ特ニ其代理官ヲ定メ  
タルトキ其代理官ノ所爲ニ付テハ本條ノ限ニアラス

第八十五條 各省大臣ノ命シタル出納官代理官ハ其代理シタル所爲ニ付會計法  
第二十六條ノ責任ヲ免ルコトヲ得ス

第八十六條 出納官吏ハ各省大臣ニ隸屬シ大藏大臣ノ指揮監督ヲ受クヘシ  
第八十七條 會計主務官トナルヘキ官吏ノ任命罷免ハ豫メ大藏大臣ノ同意ヲ要ス但陸海軍武官ニ係ル場合ハ本條ノ限ニアラス

第八十八條 各省大臣ハ所屬出納官吏ノ所爲ニ由リ政府ノ損失ヲ生シタリト認ムル場合ニ於テハ會計検査院ノ判決以前ト雖モ其出納官吏ニ向テ辨償ヲ命スルコトヲ得

第八十九條 前條ノ場合ニ於テ其辨償ヲ命セラレタル出納官吏負擔ノ責ヲ免ルヘキ理由アリト信スルトキハ計算書ヲ作り證據書類ヲ添ヘ本屬大臣ヲ經由シテ之ヲ會計検査院ニ送付シ其判決ヲ求ムルコトヲ得  
各省大臣ハ前項ノ場合ト雖モ其命シタル損失金ノ辨償ヲ猶豫セス

會計検査院ニ於テ其出納官吏ニ向テ辨償ノ責ナシト判決シタルトキハ其既納ニ係ル辨償金ハ直ニ之ヲ還付ス

第九十條 現金ヲ領收スル收入官吏及現金前渡ヲ受ケタル官吏交替ノトキハ本屬大臣ヨリ特ニ命シタル検査員ノ立會ヲ以テ會計事務ノ引繼ヲ爲スヘシ  
第九十一條 現金ヲ領收スル收入官吏及現金前渡ヲ受ケタル官吏ノ帳簿金櫃ハ

毎年三月三十一日若クハ該官吏轉免死亡停職ノトキ本屬大臣検査員ヲ命シテ之ヲ検査セシムヘシ但臨時ニ現金前渡ヲ受ケタル官吏ノ帳簿金櫃ハ定時ノ検査ヲ要セス

大藏大臣又ハ各省大臣ハ必要ト認ムルトキハ臨時ニ検査員ヲ命シテ現金ヲ領收スル收入官吏及現金前渡ヲ受ケタル官吏ノ帳簿金櫃ヲ検査セシムルコトアルヘシ

第九十二條 前條ノ検査ヲ執行スルニ當リ主務ノ出納官吏事故ニ由リ自身検査ヲ受クル能ハサルトキハ其代理者若クハ特ニ本屬大臣ノ命シタル官吏ニ於テ立會ヲ爲スヘシ

第九十三條 現金ヲ領收スル收入官吏及現金前渡ヲ受ケタル官吏ノ帳簿金櫃ヲ検査シタルトキハ其檢定書二通ヲ製シ検査員及主務ノ出納官吏若クハ立會人ニ署名シ一通ハ該官吏若クハ立會人ニ交付シ一通ハ本屬大臣ニ提出スヘシ  
第九十四條 現金ヲ領收スル收入官吏及現金前渡ヲ受ケタル官吏他ノ公金ノ出納ヲ兼掌スルトキハ別ニ検査ノ方法アルニ拘ハラズ金櫃ノ検査ヲ執行スル場合ニ於テハ他ノ公金ヲ併セテ検査ヲ行フヘシ

第九十五條 會計主務官ハ每年度經過後五箇月以内又收入官吏ハ每年度經過後七箇月以内ニ會計検査院ノ検査判決ヲ受クル爲メ每年度會計事務ノ計算書ヲ調製シ證憑書類ヲ添ヘ之ヲ其所屬省又ハ歳入ノ事務管理廳ニ送付スヘシ

第九十六條 各省又ハ歳入ノ事務管理廳ノ部長若クハ特ニ監督ノ任アル官吏ハ前條計算書ノ下検査ヲ執行シ其下検査書ヲ添ヘ之ヲ會計検査院ヘ送付スヘシ

第九十七條 現金ヲ領收スル收入官吏ハ會計検査院ノ検査判決ヲ受クル爲メ一年度内ニ執行シタル出納ノ計算書ヲ調製シ證憑書類ヲ添ヘ每年度經過後二箇月以内ニ歳入ノ事務管理廳ヲ經由シテ之ヲ會計検査院ニ送付スヘシ  
在外各廳ニ勤務スル現金ヲ領收スル收入官吏ノ前條計算書及證憑書類ハ每年度經過後一箇月以内ニ其廳ヲ發シ之ヲ歳入ノ事務管理廳ニ送付シ其管理廳ハ之ヲ會計検査院ニ送付スヘシ

第九十八條 現金前渡ヲ受ケタル官吏ハ會計検査院ノ検査判決ヲ受クル爲メ各省大臣定ムル所ニ據リ毎月一回若クハ數回經費仕拂ノ計算書ヲ調製シ證憑書類ヲ添ヘ仕拂命令官ニ送付シ仕拂命令官ハ其下検査ヲ執行シ下検査書ヲ添ヘ

之ヲ會計検査院ニ送付スヘシ但行軍費航海費ノ如キハ行軍若クハ航海ノ終リタルトキ本條ノ手續ヲ爲スコトヲ得

第九十九條 出納官吏交替ヲ爲シタルトキハ其在職期限經過後六十日以内ニ其在職期限間ニ執行シタル會計ノ計算書ヲ調製シ第九十五條第九十七條第九十八條ノ手續ヲ爲スヘシ

第一百條 出納官吏死亡其他ノ事故ニ由リ自身ニ計算書ヲ調製スル能ハサルトキハ各省大臣特ニ命シタル官吏ヲシテ之ヲ調製セシムヘシ  
出納官吏定期内ニ計算書ヲ送付セサルトキハ各省大臣ハ他ノ官吏ニ命シテ之ヲ調製セシムヘシ

本條ニ據リ調製シタル計算書ハ出納官吏ノ自身ニ調製シタルモノト見做シ會計検査院ニ於テ検査判決ヲ爲スヘシ

第一百一條 出納官吏ノ計算書ハ提出ノ後修正變更スルコトヲ得ス

第一百二條 會計法第二十八條ニ據リ出納官吏ノ納ムヘキ身元保證金額ハ各省大臣大藏大臣ト協議シテ之ヲ定メ會計検査院ニ通知スヘシ

出納官吏相當ノ資産アル者二人以上ヲ以テ保證人ト爲ストキハ各省大臣前項

ノ身元保證金ノ全部若クハ一部ヲ免除スルコトヲ得此場合ニ於テハ各省大臣ヨリ其保證人ノ住所氏名職業ヲ大藏大臣及會計検査院ニ通知スヘシ  
第三百三條 身元保證金ハ現金ヲ以テ納ムヘシ但公債證書若クハ土地ヲ以テ現金ニ代用スルコトヲ得

第三百四條 身元保證ノ現金ハ大藏省預金局通常預金ノ利子ヲ付スヘシ  
身元保證ニ供スル公債證書若クハ土地ハ出納官吏ヨリ大藏大臣ニ書入トシ其土地ハ出納官吏ノ私費ヲ以テ登記ヲ受クヘシ

第三百五條 會計検査院ノ判決ニ依リ各省大臣出納官吏ノ損失金辨償ヲ命シタル場合ニ於テ其指定シタル期限内ニ出納官吏ヨリ損失金ノ辨償ヲ爲サ、ルトキハ其身元保證金ヲ以テ辨償ニ充ツヘシ  
前項ノ場合ニ於テ身元保證金ニ代用シタル公債證書若クハ土地ハ各省大臣ノ通知ニ依リ大藏大臣之ヲ公賣ニ付シ其代價ヨリ損失金額ヲ差引シ剩餘アルトキハ出納官吏ニ返付スヘシ  
保證人ヲ以テ身元保證金ノ免除ヲ得タル官吏損失金ノ辨償ヲ命セラレタル場合ニ於テ辨償スルコト能ハサルトキハ其保證人ヲシテ損失金ヲ辨償セシムヘシ

シ

第三百六條 前條ノ場合ニ於テ出納官吏ノ身元保證金ヲ以テ損失金ノ辨償ニ充ルニ足ラサルトキハ其不足ハ出納官吏及其保證人ヨリ徴收スヘシ

第三百七條 出納官吏數職ヲ兼務シタルカ爲メ各職毎ニ身元保證ヲ爲シタルトキト雖モ身元保證金ハ出納官吏ノ責任其何職ヲ行ヒタルヨリ生シタルヲ問ハス流用シテ辨償ニ充ツヘシ

第三百八條 出納官吏ハ其身元保證金ヲ以テ損失金ノ辨償ニ充テラレタルカ爲メ其身元保證金額定規ノ高ヨリ減シタルトキハ各省大臣ノ指定シタル期限内ニ其減少高ヲ追納スヘシ期限ヲ過キ追納ヲ爲ササルトキハ其職務ヲ執ルコトヲ得ス

第三百九條 出納官吏轉職其他ノ事故ニ由リ身元保證金ノ増納ヲ要スルトキハ其轉職若クハ事故ノ生シタル日ヨリ起算シ六箇月以内ニ増納スヘシ期限ヲ過キ増納ヲ爲ササルトキハ其職務ヲ執ルコトヲ得ス  
身元保證金トシテ納メタル公債證書若クハ土地ノ價格改定ノ爲メ身元保證金額定規ノ高ヨリ減少シ之カ補填ヲ要スル場合ニ於テハ前項ノ例ニ據ル

第一百十條 出納官吏ノ身元保證金ハ其解還後會計検査院ニ於テ其官吏ノ執行シタル會計事務ニ付責任解除ヲ與ヘタル後ニ非ザレハ之ヲ還付セス

第二款 金庫出納役

第一百一十條 會計法第三十一條ニ據リ國庫金ノ取扱ヲ日本銀行ニ命シタル場合ニ於テハ日本銀行總裁ハ金出納役トシテ金庫ノ出納ヲ掌ルヘシ  
金庫出納役ハ會計検査院ノ検査判決ヲ受クル爲メ毎年度經過後四箇月以内ニ一年度内ニ執行シタル出納ノ計算書ヲ調製シ證書類ヲ添ヘ大藏大臣ヲ經由シテ之ヲ會計検査院ニ送付スヘシ

第九章 帳簿

第一百十二條 大藏省ハ日記簿原簿補助簿ヲ備ヘ國庫ノ計算ニ入ルヘキ一切現金ノ出納ヲ登記スヘシ

第一百十三條 大藏省ハ歳入歳出ノ主計簿ヲ備ヘ總テ歳入ノ豫算額、調定濟額、收入濟額、收入未濟額、歳出ノ豫算額、仕拂命令濟額ヲ登記スヘシ

第一百十四條 收入官吏ハ收入簿ヲ備ヘ歳入ノ種類ヲ區分シ調定濟額、收入濟額、收入未濟額ヲ登記スヘシ

第一百十五條 歳入ノ事務管理廳ハ歳入簿ヲ備ヘ歳入ノ種類ヲ區分シ歳入ノ豫算額、調定濟額、收入濟額、收入未濟額ヲ登記スヘシ

第一百十六條 會計主務官ハ支出簿ヲ備ヘ歳出ノ科目ヲ區分シ仕拂豫算額、仕拂命令、調定濟額ヲ登記スヘシ

第一百十七條 各省中央會計主務官ハ歳出簿ヲ備ヘ歳出ノ科目ヲ區分シ歳出豫算額、仕拂命令、調定濟額ヲ登記スヘシ

第一百十八條 現金ヲ領收スル收入官吏、現金前渡ヲ受ケタル官吏及金庫出納役ハ現金出納簿ヲ備ヘ現金ノ出納ヲ登記スヘシ

第一百十九條 各年度經過後八箇月ノ末日ニ於テ大藏大臣ハ會計検査官ノ立會ノ上ニテ大藏省ニ備ヘタル主計簿ヲ締切ルヘシ

第十章 雜則

第一百二十條 本規則ニ據リ會計主務官、收入官吏、現金前渡ヲ受ケタル官吏及金庫出納役ヨリ會計検査院ニ提出スル所ノ證明書ニ關スル規程様式ハ會計検査院ニ於テ之ヲ定ムヘシ

第一百二十一條 前條ノ外本規則ニ掲タル諸計算書仕拂命令領收證ノ様式ハ大藏

大臣之ヲ定ムヘシ

第二百二十二條 張簿ノ様式及記入ノ方法ハ大藏大臣之ヲ定ムヘシ

第二百二十三條 本規則ハ明治二十三年四月一日ヨリ施行ス

本規則ト牴觸スル命令ハ本規則施行ノ日ヨリ總テ廢止ス

○勅令第八十四號 明治二十二年六月十一日

物品會計規則

第一條 此規則ニ於テ物品ト稱スルハ政府ニ屬スル器具器械備品消耗品動物其

ノ他一切ノ動産ヲ云フ但シ陸海軍ノ兵備ニ關ルモノハ各其ノ規則ニ依ル

第二條 物品ノ會計ハ總テ年度ヲ以テ區分シ毎年四月一日ヨリ翌年三月三十一

日ニ至ル十二箇月ヲ以テ一年度トス

第三條 物品ノ會計ハ現ニ其ノ出納ヲ執行シタル日ヲ以テ年度ノ所屬ヲ區分ス

ヘシ

第四條 物品ヲ保管シ之カ出納ヲ掌ル者ヲ物品會計官吏トス

第五條 總テ物品ハ責任アル官吏ノ保管ニ付スヘシ

第六條 物品會計官吏ハ各省大臣ノ定メタル規程ニ據リタル命令アルニアラサ

レハ物品ヲ出納スルコトヲ得ス

第七條 物品會計官吏ハ其ノ故意怠惰ニ據リ保管ノ物品ヲ亡失毀損シタルトキハ辨償ノ責ニ任スヘシ

第八條 各省大臣ノ定メタル規程ニ據リ各官吏以下ノ使用ニ供シタル物品ノ亡失毀損ニ就テハ物品會計官吏ハ合規ノ監督ヲ怠リタル場合ノ外ハ其ノ責任ヲ免ルコトヲ得

第九條 物品會計官吏ハ各省大臣ノ命シタル代理官ノ所爲ニ就テハ其責任ヲ免ルコトヲ得

物品會計官吏ノ代理官ハ其ノ代理セル所爲ニ就テハ物品會計官吏タルノ責任ヲ免ルコトヲ得ス

第十條 物品會計官吏ハ物品ノ出納帳簿ヲ備ヘ其ノ出納ノ事實ヲ登記スヘシ物品ノ消耗賣拂亡失毀損生産ノ爲メノ消費及其他物品會計官吏ノ保管ヲ離ル、ヲ出トシ買入生産及其ノ他其ノ保管ニ屬スルヲ納トス

第十一條 常時出納ヲナサ、ル倉庫若ハ貯藏所ノ物品ハ各省大臣ヨリ毎年一回若ハ物品會計官吏交替ノ際検査ノ官吏ヲ命シ目錄ト現在品ノ照合ヲナサシメ



其ノ調書ヲ作ラシムヘシ

第十二條 在外各廳其他特ニ主任ノ官吏ヲ置ク能ハサル支部局ニアル物品ハ各省大臣ヨリ毎年一回若ハ物品會計官吏交替ノ際検査ノ官吏ヲ命シテ現在品及出納ノ實況ヲ調査セシメ其ノ調書ヲ作ラシムヘシ

第十三條 第十一條第十二條ノ調書ニハ検査官吏及検査ヲ受タル物品會計官吏若ハ特ニ命セラレタル立會人之ニ署名スヘシ

第十四條 各省大臣ハ一般ノ會計規則ニ據ルモノト特別ノ會計規則ニ據ルモノトヲ區分シ毎年度間ニ買入生産及其ノ他政府ノ所有ニ歸シタル物品ト消耗賣拂亡失毀損又ハ生産ノ爲メニ消費シ其ノ他政府ノ離權シタル物品ノ數量價格ヲ記シタル報告書ヲ調製シ年度後六箇月以内ニ之ヲ大藏省ニ送付スヘシ但シ官有財産管理規則ニ據リ送付スル計算書ニ掲クルモノヲ除ク

第十五條 物品會計官吏ハ會計検査院ノ検査判決ヲ受ル爲メ毎年度間ニ執行シタル物品出納ノ計算書ヲ製シ年度後四箇月以内ニ憑證書類ヲ添ヘ之ヲ本屬大臣ニ差出スヘシ

物品會計官吏交替ヲナシタルトキ前任官吏ハ前項ニ準シテ計算書ヲ差出スヘシ

シ但シ前任官吏死亡其ノ他ノ事故ニ由リ自身計算書ヲ調製スル能ハサル場合ニ於テハ各省大臣ハ他ノ官吏ニ命シテ之ヲ調製セシムヘシ

第十六條 前條第二項但書ニ據リ調製シタル計算書ハ責任ヲ有スル物品會計官吏ノ自身ニ調製シタルモノト同一ニ見做シ會計検査院ニ於テ検査判決ヲナスヘシ

第十七條 各省ノ部長若ハ特ニ監督ノ任アル官吏ハ第十五條計算書ノ下検査ヲ執行シ其下検査書ヲ添付シテ之ヲ會計検査院ヘ送付スヘシ

第十八條 常時出納ヲナサル倉庫若ハ貯藏所ノ物品又ハ在外各廳其ノ他特ニ主任ノ官吏ヲ置ク能ハサル支部局ノ物品ヲ保管スル物品會計官吏ハ第十一條又ハ第十一條第十二條ノ調書ヲ以テ第十五條ノ計算書ニ代ヘ責任ノ解除ヲ會計検査院ニ求ムルコトヲ得

第十九條 物品會計官吏ノ身元保證ニ關スル規則ハ總テ會計規則出納官吏身元保證ノ例ニ據ル

第二十條 物品出納ノ順序ハ各省大臣之ヲ定ムヘシ

第二十一條 官吏ノ執務上必要ナル物品ノ交付及其ノ交付ヲ受タル官吏ノ責任

ニ就テハ各省大臣之ヲ規定スヘシ

第二十二條 此ノ規則ハ明治二十二年十月一日ヨリ施行ス

○大藏省令第十三號 明治二十二年十月四日

出納官吏現金取扱規則

第一章 義務委託

第一條 金庫所在地ノ出納官吏ハ其取扱フ所ノ現金ヲ保管ノ爲メ其地ノ金庫ニ委託スヘシ

第二條 前條ニ據リ委託ヲ爲サントスルトキハ出納官吏ハ其資格氏名ヲ記シタル印鑑二通ヲ大藏大臣ニ送付シ同時ニ其旨ヲ金庫ニ申込ムヘシ

第三條 出納官吏ヨリ保管金ノ拂込ヲナストキハ金庫ハ其保管證書ヲ製シ現金ト引換ニ之ヲ出納官吏ニ交付スヘシ

第四條 大藏大臣ハ第二條ノ印鑑送付ヲ受ルトキハ出納官吏ノ資格ヲ調査シ一通ノ印鑑ヲ金庫ニ送付シ同時ニ其旨ヲ出納官吏ニ通知スヘシ

第五條 金庫ハ大藏大臣ヨリ出納官吏ノ印鑑送付ヲ受ルトキハ保管金引出切符用紙ヲ出納官吏ニ交付スヘシ

第六條 出納官吏ハ保管金ノ仕拂ヲ金庫ニ請求セントスルトキハ總テ引出切符ヲ以テスヘシ

第七條 出納官吏ハ其委託シタル保管金ト同種ノ貨幣ヲ以テ仕拂ヲ請ハントスルトキハ拂込ノ際特ニ之ヲ金庫ニ求ムヘシ拂込ノ際特別ノ請求ナキモノハ總テ有合ノ通貨ヲ以テ仕拂フヘシ

第八條 出納官吏ハ其委託シタル保管金ヲ以テ收入又ハ返納ノ爲メ金庫ニ拂込ヲナサントスルトキハ引出切符ヲ以テ拂込ヲナスヘシ

第九條 金庫ハ毎年三月三十一日ニ於テ其年度中ニ委託セラレタル保管金額ヨリ仕拂タル金額ヲ扣除シ其殘金額ニ對シ更ニ保管證書ヲ製シ同年度中ニ出納官吏ニ交付シタル保管證書ト引換フヘシ

第十條 陸海軍隊費ニシテ現金仕拂ヲ要スル場合及廳中雜費工事費ニシテ小口ノ現金仕拂ヲ要スル場合ニ於テハ金庫所在地ニアリテモ所要ノ金額ニ限リ本規則第二章ニ據リ現金ヲ保管スルコトヲ得  
前項所要ノ金額ハ仕拂命令官之ヲ定ム

第二章 隨意保管

第十一條 金庫ノ設ナキ場所ニ於テ現金ヲ保管スル所ノ出納官吏ハ堅牢ナル函ヲ備ヘ之ニ其保管ニ係ル現金及ヒ出納ノ帳簿ヲ藏置スヘシ  
二人以上共同責任ヲ以テ現金ヲ保管スル場合ニ於テハ二箇以上ノ鎖鑰ヲ有スル堅牢ノ函ヲ備ヘ出納官吏其鎖鑰ヲ分管スヘシ  
出納官吏現金ヲ携帶シテ旅行スル場合ニ於テハ前二項ニ據ラス相當ノ保護法ヲ設ルコトヲ得

第十二條 出納官吏ノ保管ニ係ル現金ハ私有金ト混スルヲ得ス

第十三條 出納官吏他ノ公金ノ出納ヲ兼掌スルトキハ其現金ヲ官金ト同一ノ函中ニ藏置スルコトヲ得

第十四條 出納官吏ハ第十一條ニ據リ現金保管ヲナシ難キ場合ニ於テハ自己ノ責任ヲ以テ確實ナル銀行又ハ身代ノ確實ナル一私人ニ其保管スヘキ現金ノ保管ヲ托スルコトヲ得  
前項ノ場合ニ於テハ私金ト區別シ其計算ヲ混スヘカラス

第三章 拂込

第十五條 金庫所在地ノ收入官吏現金ヲ以テ租稅其他ノ收入ヲ收納スルトキハ

毎日之ヲ取纏メ拂込書ヲ添ヘテ翌日マテ金庫ニ拂込ムヘシ但收入金額五拾圓未滿ナルトキハ每一個月取纏メ金庫ニ拂込ムコトヲ得

第十六條 金庫ノ設置ナキ地方ノ收入官吏現金ヲ以テ租稅其他ノ收入ヲ收納スルトキハ左ノ制限ニ從ヒ之ヲ取纏メ拂込書ヲ添テ大藏大臣ノ指定シタル金庫ニ拂込ムヘシ但次條ニ定メタル場合ハ此限ニアラス

第一 收入金高百圓未滿ハ 毎十日

第二 同 三百圓未滿ハ 毎五日

第三 同 三百圓以上ハ 翌日限

第十七條 外國及運輸通信ノ不便ナル地方ニシテ金庫ノ設置ナキ場合ニ於テ收入官吏現金ヲ以テ租稅其他ノ收入ヲ收納スルトキハ毎月其金額ヲ取調ヘ本屬大臣ヲ經由シテ之ヲ大藏大臣ニ報告シ同時ニ其金額ノ監守證ヲ製シテ大藏大臣ノ指定シタル金庫ニ送付スヘシ

第十八條 金庫ハ前條ノ場合ニ於テ收入官吏ト同場所又ハ其場所ト爲替送金ノ便アル地方ニ於テ仕拂フヘキ仕拂命令ヲ受ルトキハ收入官吏ノ監守證ニ別符付ノ領收證ヲ添ヘテ之ヲ受取人ニ送付スヘシ

第十九條 收入官吏ハ前條ノ受取人ヨリ監守證ヲ以テ現金ノ拂渡ヲ請求セラル  
トキハ其監守證ト引換ニ現金ヲ交付シテ金庫ノ領收證ヲ受クヘシ

雜則

第二十條 本規則ハ收入官吏現金前渡ヲ受タル官吏特別會計ニ係ル官金出納官  
吏ニ適用ス

第二十一條 本規則ハ明治二十三年四月會計法施行ノ日ヨリ施行ス

○勅令第四號 明治二十三年一月十八日

○出納官吏身元保證金ノ件

朕出納官吏身元保證金ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 左ノ出納官吏ニシテ其取扱金額一箇年五百圓以上又ハ常時保管スル物  
品ノ價格千圓以上ニ達スルモノハ身元保證金ヲ納ムヘシ

但兵備品ノ出納ヲ取扱フ武官ハ本條ノ限ニアラス(廿四年六月勅令第五十一號ヲ以テ追加)

第一 現金ノ領收ヲ常職トスル官吏

第二 常時現金前渡ヲ受クル官吏

第三 物品會計官吏

第二條 身元保證金ハ就職ノ時納付スヘキモノトス但現ニ明治二十三年四月一  
日ニ在職セル出納官吏ニ限リ明治二十三年四月以後明治二十八年三月マテ五  
箇年間ヲ期シ其身元保證金額ヲ平分シ毎年四期又ハ毎月ニ之ヲ納付セシムヘ  
シ

前項明治二十三年四月一日ニ在職セル出納官吏ニシテ土地若クハ公債證書ヲ  
以テ身元保證金ニ代用セントスル者ハ明治二十三年九月マテニ一時ニ納付セ  
シムヘシ

第三條 身元保證金ニ代用セントスル公債證書ハ有利足ノモノヲ以テシ其價格  
ハ明治二十三年三月中東京取引所平均ノ相場ニ依リ爾後五箇年毎ニ其年三月  
中ノ同所平均相場ニ依リ其價格ヲ改定スヘシ但明治二十三年三月以後新ニ發  
行シタル公債證書ノ價格ハ身元保證金納付前月ノ東京取引所ノ平均相場ニ依  
リ爾後本條ノ期限ト同時ニ其價格ヲ改定スヘシ

第四條 身元保證金ニ代用セントスル土地ノ價格ハ總テ土地臺帳ノ登記ニ依ル  
ヘシ

第五條 會計規則第一百五條第二項ニ依リ身元保證金ニ代用シタル公債證書若ク

ハ土地ヲ公賣スルトキ其公賣公告入費ハ損失金ノ辨償ヲ命セラレタル出納官吏ヲシテ辨償セシムヘシ

第六條 (明治廿六年勅令第百四號ヲ以テ削除)

○内務省訓令第二十三號 明治二十六年十二月十一日

○内務省所管出納官吏身元保證金納付及拂戻等ニ關スル取扱規則

- 警視廳 北海道廳 府 縣
- 集治監 土木監督署 衛生試驗所
- 臨時橫濱築港局

當省所管出納官吏身元保證金納入及拂戻等ニ關スル取扱規則左ノ通相定メ明治二十七年一月一日ヨリ施行ス

内務省所管出納官吏身元保證金納付及拂戻等ニ關スル取扱規則

第一條 出納官吏會計規則第百三條ニ依リ現金ヲ以テ身元保證金ヲ納付セントスルトキハ其現金ヲ金庫ニ預ケ入レ其保管證書ヲ得之レニ納付書ヲ添ヘ所屬長官ヲ經由シテ内務大臣ニ納付スヘシ

第二條 出納官吏會計規則第百三條但書ニ依リ土地ヲ以テ現金ニ代用セントス

ルトキハ所屬長官ノ認可ヲ得タル後チ土地ノ所在地價格及登記ヲ受ケントスル日限ヲ記シタル請求書二通ヲ製シ所屬長官ヲ經由シテ内務大臣ニ進達スヘシ

第三條 内務大臣ハ前條ノ申出ニ依リ登記日限ヲ定メ土地所在地ノ北海道廳長官府縣知事ニ命シ登記法第二十一條ノ手續ヲ代理セシムヘシ

第四條 北海道廳長官府縣知事ハ土地ノ登記ヲ了シタルトキハ其書入證書ヲ内務大臣ニ進達スヘシ

第五條 出納官吏會計規則第百三條但書ニ依リ現金ニ代用スル公債證書ハ記名トシ札付ノ儘之ヲ金庫ニ預ケ入レ其保管證書ヲ得之ニ書入證書ヲ添ヘ所屬長官ヲ經由シテ之ヲ内務大臣ニ納付スヘシ

第六條 出納官吏身元保證金ヲ納付シタルトキハ内務大臣ハ其納付金額ニ對スル納付濟證ヲ調製シ所屬長官ヲ經由シテ之レヲ出納官吏ニ交付スヘシ

第七條 明治二十三年勅令第四號第二條但書ニ依リ身元保證金ヲ納付スルモノハ左ノ期限ニ依ル但本人ノ便宜ニ依リ數回分ヲ合セテ前納シ若クハ納付殘額ヲ一時ニ皆納スルコトヲ得

四期納付ノ分

第一期 六月末日マテ 第二期 九月末日マテ 第三期 十二月末日マテ  
 第四期 三月末日マテ  
 毎月納付ノ分  
 毎月末日マテ

第八條 出納官吏土地若クハ公債證書ヲ以テ現金ニ代用シタル場合ニ於テ明治二十三年勅令第四號第三條及第四條ノ計算ニ依リ身元保證金額ニ對シ過剩ヲ生スルコトアルモ其儘納付スルハ妨ケナシ

第九條 出納官吏公債證書ヲ以テ身元保證金ニ代用シタル場合ニ於テハ其利子渡期ニ至リ前ニ公債證書ヲ預ケ入レタル金庫ニ於テ其利札ヲ受取ルヘシ

第十條 會計規則第一百條ニ依リ身元保證金ノ拂戻シヲ要スルトキハ出納官吏ハ所屬長官ヲ經由シテ責任解除ヲ得タルコトヲ内務大臣ニ證明シ身元保證金ノ拂戻シヲ請求スヘシ

第十一條 身元保證金ヲ拂戻ストキ現金及公債證書ハ内務大臣ヨリ所屬長官ヲ經由シテ保管證書又ハ書入證書ヲ出納官吏ニ返付スヘシ又土地ハ内務大臣其

書入證書ヲ北海道廳長官府縣知事ニ送付シ書入レノ解除ヲナス爲メ登記法第二十三條ノ手續ヲ代理セシメ書入證書ヲ出納官吏ニ返付セシムヘシ  
 前項保管證書又ハ書入證書ハ身元保證書ノ納付濟證ト引換ニ之ヲ出納官吏ニ返付スヘシ

第十二條 前條ニ依リ北海道廳長官府縣知事ニ於テ土地書入解除ノ手續ヲ了シタルトキハ其旨内務大臣ニ具申スヘシ

第十三條 會計規則第一百五條ニ依リ出納官吏ノ身元保證金ヲ以テ損失金ノ辨償ニ充テントスルトキハ所屬長官ヨリ會計検査院判決書ノ寫ヲ添ヘテ其旨ヲ内務大臣ニ具申スヘシ

前項ノ場合ニ於テ内務大臣ハ出納官吏身元保證金(土地公債證書ハ公賣ノ後)ヨリ損失金ノ辨償ニ充ツヘキ金額ヲ控除シ所屬長官ヲ經由シテ其旨ヲ出納官吏ニ通知スヘシ

第十四條 内務大臣ハ會計規則第一百五條第二項ノ場合ニ於テ土地公債證書ヲ公賣シタルトキハ同時ニ所屬長官ヲ經由シテ出納官吏ニ對シ公賣公告入費ノ辨償ヲ命スヘシ

第十五條 會計規則第一百五條第三項及ヒ第六條ノ場合ニ於テ所屬長官ハ直ニ其辨償追徴ノ手續ヲ履行シ其顛末ヲ内務大臣ニ具申スヘシ

第十六條 會計規則第八條ニ依リ身元保證金ノ追納ヲ要スルトキハ所屬長官ニ於テ其期限ヲ定メ出納官吏ニ通達シ其旨内務大臣ニ具申スヘシ

第十七條 數職ヲ兼ヌル出納官吏ノ身元保證金ハ各職毎ニ區別シ納付スヘシ

第十八條 二人以上連帶責任ヲ有スル出納官吏ノ身元保證金ハ各其納金額ヲ各自ニ區別シ納付スヘシ

第十九條 本規則中身元保證金納付書以下ノ書式ハ左ノ如シ  
(以下略ス)

○太政官布告第十三號 明治十八年五月三十日

預金規則

預金規則左ノ通制定ス

預金規則

第一條 大藏省中ニ預金局ヲ置キ左ノ貯金積立金ヲ預リ之ヲ保管利殖セシム

第一 驛遞局貯金

第二 各官廳ノ成規ニ從ヒタル積立金

第三 社寺教會社其他人民ノ共有ニ係ル積立金ニシテ其請願ニ據ルモノ

第二條 預リ金取扱手續ハ大藏卿之ヲ定ム

第三條 預リ金ノ利子割合大藏卿之ヲ定ム

第四條 預リ金ニ關スル損益ハ國庫ノ負擔トス

第五條 預リ金ノ證書ハ賣買讓與又ハ書入質入スルヲ得ス

第六條 預リ金ノ運用ハ日本銀行ヲシテ取扱ハシムルモノトス

第七條 大藏卿ハ便宜ノ地ヲ撰ミ預金局出張所ヲ設置シ又ハ國庫金取扱所ヲシテ預リ金受渡ヲ取扱ハシムルコトアルヘシ

第八條 預リ金ノ受渡ニ屬スル證書ハ證券印稅ヲ納ムルニ及ハス

○大藏省令第十九號 明治二十六年九月二十日

預金取扱規程

明治二十三年大藏省令第三十三號預金取扱規程左ノ通改正シ本年十一月一日ヨリ施行ス

預金取扱規程

- 第一條 明治十八年布告第十三號明治二十三年法律第七十五號ニ依ル預金ノ保管受渡ハ此規程ニ依リ金庫ニ於テ取扱フモノトス
- 第二條 預ケ人ニ於テ預ケ金ヲ爲ストキハ現金ニ第一號書式ノ拂込書及第二號書式ノ印鑑ヲ添ヘ金庫ヘ差出スヘシ但第二回以後ノ預ケ金ヲ爲ス場合ニハ印鑑ヲ要セス
- 第三條 金庫ニ於テ前條ノ現金ヲ領收シタルトキハ第三號書式ノ預金通帳ニ記入證印シ之ヲ預ケ人ヘ交付スヘシ
- 第四條 預ケ人ニ於テ預金ヲ以テ公債證書ノ購入ヲ請求スルトキハ第四號書式ノ請求書ヲ其預ケ金ヲ爲シタル金庫ヘ差出スヘシ金庫ハ式ノ如ク該預リ金額ヲ記入證明シ之ヲ大藏省ヘ進達スヘシ
- 第五條 大藏省ニ於テ前條ノ請求書ヲ受ケタルトキハ請求書到達ノ日ヨリ休日ヲ除キ五日以内ニ日本銀行ヲシテ時價ヲ以テ公債證書ヲ購入シ之ヲ中央金庫ヘ納付セシメ其額面金高購入代價ヲ記載シタル第五號書式ノ通知書ヲ製シ金庫ヲ經テ之ヲ預ケ人ヘ送付スヘシ
- 第六條 大藏省ニ於テ預金制限超過額ヲ以テ公債證書ヲ購入スル場合ニハ日本

- 銀行ヲシテ時價ヲ以テ購入シ之ヲ中央金庫ヘ納付セシメ其額面金高購入代價ヲ記載シタル第五號書式ノ通知書ヲ製シ金庫ヲ經テ之ヲ預ケ人ヘ送付スヘシ
- 第七條 中央金庫ニ於テ前二條ニ依リ日本銀行ヨリ公債證書ヲ領收シタルトキハ第六號書式ノ保管證書ヲ調製シ之ヲ取扱金庫ヘ送付スヘシ
- 第八條 預ケ人ニ於テ公債證書購入濟ノ通知ヲ受ケタルトキハ該通知書ニ式ノ如ク保管證書領收ノ證印ヲ爲シ預金通帳ヲ添ヘ之ヲ金庫ヘ差出シ該通帳ニ購入代價ニ對スル預金仕拂ノ記入證印ヲ受ケ保管證書ヲ受取ルヘシ
- 第九條 預ケ人ニ於テ預金ノ拂戻ヲ要スルトキハ第七號書式ノ領收證書ニ預金通帳ヲ添ヘ之ヲ其預ケ金ヲ爲シタル金庫ヘ差出スヘシ
- 第十條 金庫ニ於テ前條ノ拂戻請求ヲ受ケタルトキハ預金通帳ヘ式ノ如ク記入調印シ現金ノ仕拂ヲ爲スヘシ
- 第十一條 預ケ人ニ於テ公債證書全部ノ受戻ヲ請求スルトキハ保管證書ヘ式ノ如ク裏書ヲ爲シ第八號書式ノ請求書ト共ニ中央金庫ヘ差出スヘシ
- 第十二條 預ケ人ニ於テ公債證書ノ内幾分受戻ヲ請求スルトキハ第九號書式ノ請求書ニ第十號書式ノ領收證書及保管證書ヲ添ヘ之ヲ中央金庫ヘ差出スヘシ



中央金庫ニ於テ前項ノ請求ヲ受ケタルトキハ保管證書ニ式ノ如ク裏書ヲ爲シ該公債證書ト共ニ返付スヘシ

第十三條 中央金庫ニ於テ前二條ノ請求ヲ受ケタルトキハ請求書到達ノ日ヨリ休日ヲ除キ五日以内ニ保管ノ公債證書ヲ交付スヘシ  
書留郵便其他ノ運送便ヲ以テ遞送ヲ望ムモノアルトキハ預ケ人ノ危険ニテ之ヲ遞送スヘシ

第十四條 前條ノ遞送費ハ預ケ人ノ負擔トシ書留郵便ヲ以テ遞送ヲ要スルモノハ相當ノ郵便切手ヲ前以テ中央金庫ヘ送付シ其他ノ便ニヨルモノハ遞送賃金先拂ヲ以テ遞送スヘシ

第十五條 預金ノ利子ハ毎年三月末日ヲ期トシテ之ヲ計算シ其元金ニ組入ルヘシ

預ケ人ハ毎年六月預金通帳ヲ其預ケ入ヲ爲シタル金庫ヘ差出シ利子元加ノ記入ヲ受クヘシ

第十六條 元金ニ加ヘサル預金ノ利子ハ預金ノ金額ヲ拂戻ストキニ限り之カ仕拂ヲ爲スモノトス

預ケ人ニ於テ前項ノ利子ヲ受取ラントスルトキハ第十一號書式ノ請求書ヲ金庫ヘ差出スヘシ金庫ハ式ノ如ク利子金額ヲ記入證明シ之ヲ大藏省ヘ進達スヘシ

第十七條 大藏省ハ前條第二項ノ請求書ニ依リ第十二號書式ノ通知書ヲ製シ金庫ヲ經テ預ケ人ヘ交付シ請求書ハ案内トシテ之ヲ日本銀行ヘ送付スヘシ

第十八條 預ケ人ニ於テ前條ノ通知書ヲ受ケタルトキハ式ノ如ク裏面ニ領收ノ證印ヲ爲シ之ヲ其通知書ニ記載シタル日本銀行本支店又ハ其代理店ヘ差出シ現金ノ仕拂ヲ受クヘシ

第十九條 預金ハ預ケ入タル月及拂戻ス月ハ其金額ニ利子ヲ附セス  
預金ハ拾錢未滿ノ端金ニ利子ヲ附セス

第二十條 第七條ニ依リ領收シタル公債證書ノ利子ハ中央金庫ニ於テ受取り取扱ノ金庫ヲシテ之ヲ其所有主ノ預金ニ組入レシメ第十三號書式ノ通知書ヲ製シ金庫ヲ經テ之ヲ預ケ人ヘ送付スヘシ

第二十一條 預ケ人ニ於テ前條ノ通知ヲ受ケタルトキハ預金通帳ニ該通知書ヲ添ヘ其預ケ金ヲ爲シタル金庫ヘ差出シ金額預ケ入ノ記入ヲ受クヘシ

第二十二條 預ケ人ニ於テ預金全額ノ拂戻ヲ受ケタルトキハ預金通帳ヲ返付スヘシ

第二十三條 預ケ人ニ於テ甲ノ金庫ヨリ交付シタル預金通帳ヲ以テ乙ノ金庫ニテ受渡ヲ請求スルトキハ第十四號書式ノ申込書及印鑑ニ預金通帳ヲ添ヘ乙金庫ヘ差出シ番記號ノ書換ヲ受クヘシ

第二十四條 預金ノ受渡ニ關スル書類ニハ共有ニ係ルモノハ其總代人二名調印シ又社寺教會々社ニアリテハ其名稱ヲ記シ且押印ヲ爲シ其擔當者一名記名調印スヘシ但法人タル會社ニアリテハ擔當者ノ記名調印ヲ要セス

第二十五條 前條ノ社寺教會會社ニシテ名義變更改印位置移轉シタルトキハ其旨金庫ヘ届出ヘシ擔當者總代人氏名變換改印轉住ノトキ又同シ前項改印ノ届書ニハ印鑑ヲ添フヘシ

第二十六條 前條ノ擔當者及總代人變更シタルトキハ前任者連署ノ届書ニ後任者ノ印鑑ヲ添ヘ金庫ヘ差出スヘシ但前任者連署シ能ハサルトキハ證人ヲ立ツヘシ

○法律第七十五號 明治廿三年八月二十七日

預金ニ制限ヲ置キ整理公債證書ニ交換ノ件

朕預金ニ制限ヲ置キ整理公債證書ニ交換ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 預金規則第一條第二第三ニ依リ預金局ニ預リタル金額三百圓以上ニ達スルトキハ預ケ人ノ請求ニ依リ整理公債證書ヲ購入シテ之ヲ預ケ人ニ交付スルコトヲ得

第二條 前條預金ノ額二千圓ヲ超過スルトキハ預金局長ハ其超過額ヲ以テ整理公債證書ヲ購入シテ之ヲ預ケ人ニ交付スルコトヲ得

第三條 前二條ニ依リ購入シタル整理公債證書ハ預金ノ全額ヲ仕拂又ハ拂戻シタル場合ヲ除クノ外所有者ノ望ニ依リ之ヲ預金局ニ保管スルコトヲ得

第四條 本法ハ明明二十四年一月一日ヨリ施行ス

○法律第一號 明治二十三年一月四日

保管金規則

朕保管金規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 法律勅令又ハ從來ノ規則ニ依リ政府ニ於テ保管スル公有金私有金ハ左ノ計算法ニ從ヒ滿三十年ヲ過キテ拂戻ノ請求ナキトキハ政府ノ所得トス但別

ニ法律ヲ以テ失權ノ期限ヲ定メタルモノハ各其定ムル所ニ依ル

第一 保管義務解除ノ期アルモノハ其義務ヲ解除シタル翌日ヨリ起算ス

第二 保管義務解除ノ期ナキモノハ保管ノ翌日ヨリ起算ス

第三 訴訟事件ノ爲ニ拂戻ヲ請求スル能ハサル場合ニ於テハ裁判確定ノ翌日ヨリ起算ス

第二條 保管金ハ法律勅令又ハ從來ノ規則若シクハ契約ニ依ルノ外利子ヲ付セ

第三條 保管金ノ證書ハ賣買讓與又ハ書入質入スルコトヲ得ス

第四條 保管金ノ受渡ニ屬スル證書ハ證券印稅ヲ納ムルニ及ハス

○大藏省令第二十號 明治二十六年九月二十日

保管物取扱規程

明治二十三年大藏省令八號保管金取扱規程左ノ通改正シ本年十一月一日ヨリ施行ス

保管物取扱規程

第一條 明治二十三年勅令第二號明治二十六年勅令第七十號ニ依ル金錢有價證

券ノ保管受渡ハ此規程ニ依リ金庫ニ於テ取扱フモノトス

第二條 現金又ハ有價證券ハ權利者ヨリ寄托スルモノト官廳ヨリ寄托スルモノトノ二種ニ分チ之ヲ取扱フヘシ

第三條 取扱官廳ニ於テ權利者ヲシテ現金又ハ有價證券ヲ寄托セシムルトキハ

第一號書式ノ寄托通知書ヲ製シ之ヲ權利者ヘ交付スヘシ

第四條 權利者ハ現金又ハ有價證券ニ前條ノ寄托通知書ヲ添ヘ之ヲ金庫ニ差出スヘシ

第五條 金庫ニ於テ前條ノ寄托ヲ受ケタルキハ第二號書式ノ保管證書ヲ製シ之ヲ權利者ヘ交付スヘシ

第六條 官廳ニ於テ現金又ハ有價證券ヲ寄托スルトキハ第三號書式ノ送付書ヲ製シ之ヲ現金又ハ有價證券ニ添ヘ金庫ヘ送付スヘシ

第七條 金庫ニ於テ前條ノ寄托ヲ受ケタルトキハ第四號書式ノ領收證書ヲ製シ之ヲ寄托官廳ヘ交付スヘシ

第八條 官廳ニ於テ數人ノ權利者ニ屬スル現金ヲ取纏メ寄托スルトキハ其送付書ニ第五號書式ノ仕譯書ヲ添付スヘシ

但權利者不分明ナル者ハ其旨ヲ送付書又ハ仕譯書ニ記入スヘシ

第九條 取扱官廳ハ本規程ニ依リ現金又ハ有價證券等受渡ノ證明ニ供スル爲メ豫メ其廳及取扱主任官ノ印鑑ヲ金庫ヘ送付スヘシ廳印ノ更改主任官ノ改印又ハ主任官變更ノ場合ニ於テモ亦同シ

有價證券ニ屬スル利札交付ノトキ其受渡ヲ證明スル爲メ權利者ハ有價證券寄托ノ際印鑑ヲ金庫ヘ差出シ置クヘシ

第十條 權利者ニ於テ其寄托シタル現金又ハ有價證券ノ拂戻ヲ受ケントスルトキハ取扱官廳ノ裏書ヲ爲シタル保管證書ヲ得テ金庫ヘ差出シ之カ拂戻ヲ請求スヘシ

第十一條 取扱官廳ノ裏書アル保管證書ヲ以テ現金又ハ有價證券ノ拂戻ヲ請求スル者アルトキハ金庫ハ取扱官廳及主任官ノ印鑑ニ照合シ相違ナキモノハ之ト引換ニ現金又ハ證券ヲ交付スヘシ

第十二條 權利者ニ於テ官廳ヨリ寄托シタル現金又ハ有價證券ノ拂戻ヲ受ケントスルトキハ其事由ヲ具シ其取扱官廳ニ請求スヘシ取扱官廳ニ於テ前項ノ請求ヲ審査シ相當ト認ルトキハ金庫ニ宛タル第六號書式ノ拂渡シ證書ヲ製シ之

ヲ權利者ヘ交付スヘシ

權利者ニ於テ前項ノ拂渡證書ヲ受ケタルトキハ之ヲ金庫ヘ差出シ現金又ハ證券ノ拂渡ヲ受クヘシ

第十三條 金庫ハ前條ノ拂渡證書ヲ以テ現金又ハ有價證券ノ拂渡ヲ請求スル者アルトキハ取扱官廳及主任官ノ印鑑ニ照合シ相違ナキモノハ之ト引換ニ現金又ハ證券ヲ交付スヘシ

第十四條 政府ノ所有ニ歸シタル保管金ハ左ノ手續ニ依リ取扱フヘシ

- 一 保管證書ヲ發シタルモノハ取扱官廳ニ於テ該證書ノ裏面ニ事由ヲ記載シ
- 一 收入官吏ヲシテ歳入トシテ金庫ヘ納付セシムヘシ
- 一 保管證書ヲ發セサルモノハ大藏大臣ノ令達ニ依リ金庫ニ於テ歳入ヘ編入スヘシ

第十五條 取扱官廳ニ於テ保管金ノ幾分ヲ歳入ト爲シ又ハ幾分ヲ權利者ニ拂戻スコトヲ要スルトキハ保管證書ニ事由書ヲ付シ保管證書ノ分割ヲ金庫ニ請求スヘシ

第十六條 金庫ニ於テ前條ノ請求ヲ受ケタルトキハ新ニ保管證書ヲ製シ舊保管

證書ト交換スヘシ

第十七條 保管金ノ利子ハ毎年三月三十一日ヲ期トシテ之カ計算ヲ爲スヘシ  
權利者ニ於テ保管金利子ノ拂渡ヲ請求スルトキハ第七號書式ノ請求書ヲ取扱  
金庫ヘ差出スヘシ金庫ハ式ノ如ク利子金額ヲ記入證明シ之ヲ大藏省ヘ進達ス  
ヘシ

第十八條 大藏省ハ前條ノ請求書ニ依リ第八號書式ノ通知書ヲ製シ取扱官廳ヲ  
經テ權利者ヘ交付シ請求書ハ案内トシテ之ヲ日本銀行ヘ送付スヘシ  
權利者ニ於テ前項ノ通知書ヲ受ケタルトキハ式ノ如ク裏面ニ領收ノ證印ヲ爲  
シ之ヲ其通知書ニ記載シタル日本銀行本支店又ハ其代理店ヘ差出シ現金ノ拂  
渡ヲ受クヘシ

第十九條 官廳又ハ權利者ニ於テ其寄托シタル有價證券ニ屬スル利子ノ渡期ニ  
至リ之カ利札ノ交付ヲ請求セントスルトキハ第九號書式ノ請求書ヲ金庫ヘ差  
出スヘシ  
金庫ニ於テ前項ノ請求ヲ受ケタルトキハ第十號書式ノ領收證書ヲ徴シ之ト引  
換ニ利札ヲ交付スヘシ

第二十條 保管證書又ハ領收證書ヲ亡失シタルカ爲メ官廳又ハ權利者ヨリ保管  
ノ證明方ヲ金庫ニ請求スルトキハ金庫ニ於テハ第十一號書式ノ證明書ヲ製シ

之ヲ官廳又ハ權利者ヘ交付スヘシ  
保管證書又ハ領收證書ヲ汚染毀傷シ證書ノ要點ヲ見認メ難キニ至リタルカ爲  
メ官廳又ハ權利者ヨリ之カ引換ヲ金庫ニ請求スルトキハ金庫ハ更ニ保管證書  
又ハ領收證書ヲ製シ舊證書ト交換スヘシ

第二十一條 官廳ニ於テ金庫ヘ寄托シタル保管金ニシテ權利移轉又ハ其他ノ事  
故ノ爲メ其送付書ニ記載シタル期滿失效ノ年月日(本文期滿失效ノ年月日トハ  
各其據ルヘキ法律規則ニ依  
リ算出シタル)ニ變更ヲ生スルトキハ即日其旨ヲ金庫ヘ通知スヘシ(第二十七年省  
令第一七號ヲ  
以テ  
追加)

附則

第二十二條 前條保管金ニシテ本令發布以前既ニ其送付書ニ記載シタル期滿失  
效ノ年月日ニ變更ヲ生シタルモノハ明治二十七年二月廿八日迄ニ當該官廳ヨ  
リ其旨ヲ金庫ヘ通知スヘシ(同上)

第二十三條 金庫ニ於テ前條ノ通知ヲ受ケタルトキハ直ニ調査シ全ク期滿失效

トナリタルモノハ計算書ヲ作り明治二十七年三月三十一日迄ニ當該官廳ニ送付シ其證明ヲ受ケ之ヲ整理スヘシ(同上)

○勅令第二號 明治二十三年一月四日

預金規則ニ定メタルモノ、外法律勅令又ハ從來ノ規則ニ依リ政府ニ於テ保管ノ義務ヲ有スル公有金私有金ハ總テ大藏省預金局ニ寄托スヘシ

法律勅令又ハ從來ノ規則ニ依ルノ外政府ハ公有金私有金ヲ保管セス

○大藏省訓令第七十八號 明治廿三年五月十日

本年一月勅令第二號ヲ以テ公有金私有金寄托ノ儀ヲ定メラレ候處各廳ニ於テ一時ノ取扱ニ係ル金錢ハ包含セサル儀ナルニ往々警察官拾得金未決囚所持金ノ類ニシテ直チニ交付又ハ仕拂ヲナス場合ニ於テモ預金局ニ寄托シ却テ事務取扱ノ不便ヲ醸スモノ有之候ニ付今後ハ數日內ニ其交付又ハ仕拂フヘキ見込ナキモノヲ預金局ニ寄托スル儀ト心得ヘシ

(參照)

○警保局長通牒 明治二十三年四月廿三日

客年六月本省訓第四九六號ヲ以テ地方稅警察費及請願巡査費其他爲換方等へ預入

方訓令相成居候處本年勅令第二號ヲ以テ保管金寄托方公布セラレ候ニ付テハ向後請願巡査費及囚徒所持金遺失金賊捨置金ノ義ハ右勅令ニ依リ大藏省預金局へ預入スヘキ善ニ有之候條此段爲念及御通知候也(請願巡査費ニ關スル廉ハ消滅ス)

○警保局長通牒 明治二十三年十一月廿八日

保管金ノ件ニ付別紙和歌山縣伺ニ對シ指令相成候間爲心得此段及通牒候也

○和歌山縣伺 明治二十三年五月十五日

保管金寄托方ノ義ハ本年一月勅令第二號ニ據ルハ勿論ニ候處賊捨置金ノ如キ後日證據ト爲スヘキモノハ預金局へ寄托ヲ爲サス各警察署ニ於テ保管致度此段相伺候也

○指令 明治二十三年十一月廿八日

物品會計官吏ニ於テ保管スヘキ義ト心得ヘシ

○右ニ付警保局長ヨリ再通牒 明治二十四年四月廿七日

客歲十二月中賊捨置金ニシテ證據トナルヘキモノハ物品會計官吏ニ於テ保管スヘキ旨和歌山縣へ指令セラレタルニ付御心得ノ爲メ及通牒置候處右ハ該金ノ内特ニ犯罪ノ證據ヲ止マルモノ、ミ物品會計官吏ノ保管ニ付シ何等ノ證據ナキモノハ普通保管金ノ例ニ依リ取扱フヘキ善ニ有之然ルニ往々疑義ヲ生シ本省へ伺出又ハ間合來ル向有之候間爲念此段及通牒候也

○内務省總務局長通牒 明治二十三年六月十二日

囚徒所持金及盜犯贓金其他本年勅令第二號ニ依リ大藏省預金局へ寄托セシモノニシテ囚徒押送其他ノ事項ニ關シ他ノ官廳へ送致ヲ要スルトキハ現金ヲ以テセス左ノ手續ニ據リ取扱可相成候此段及通牒候也

一 預金本局又ハ金庫ヨリ發シタル保管證書ヲ以テ他ノ取扱官廳ヘ移シ他ノ金庫ニ於テ拂戻ヲ要スルトキハ取扱官廳ハ其事由書ニ保管證書ヲ添ヘ當初拂込ミタル預金本局又ハ金庫ヘ送付シ證書ヘ裏書ヲ受ケ之ヲ他ノ取扱官廳ヘ送付スルモノトス

一 前項ノ保管證書ノ送付ヲ受ケタル取扱官廳ハ該保管證書ヲ以テ拂戻ヲ要スルトキハ成規ノ如ク證書ヘ裏書調印ノ上權利者ヘ交付シ其官廳及取扱主任ノ印鑑ヲ金庫ヘ送付スルモノトス

但彙ニ印鑑ヲ交付シアルモノハ更ニ送致スルニ及ハス

一 預金本局又ハ金庫ヨリ發シタル保管金領收證書ノ全部又ハ幾分ヲ他ノ金庫ニ於テ拂戻ヲ要スルトキハ取扱官廳ハ其事由書ヲ當初拂込ミタル預金本局又ハ金庫ヘ送付シ其承諾ノ旨ヲ受ケ他ノ取扱官廳ヘ領收證書ノ記番號拂戻ヲ要スル金額等ヲ通知スルモノトス

前項ノ通知ヲ受ケタル取扱官廳ニ於テ其保管ノ拂戻ヲ要スルトキハ成規ノ拂戻金證明書ヲ發スルモノトス

但印鑑ヲ送付スルハ前第二項ニ同シ

右ノ外因徒給與工錢ハ預金規則ニ依リ預金局ヘ寄託スルモノナリト雖モ他ノ官廳ヘ送致ヲ要スルトキハ改メテ保管金トシテ預入レタル上前記ノ手續ニ據リ取扱フモノトス

○内務省總務局長通牒

明治二十四年二月四日

保管金期滿失効期日之件ニ付別紙寫之通大藏省ヨリ通牒ニ付爲御心得此段及通牒候也

(別紙)明治廿三年十二月二十三日

本年當省令第八號保管金取扱規程第四條ニ據リ權利者ヲシテ寄託通知書ヲ以テ拂

込マシムル期限及同第七條ニ據リ各廳ヨリ送付書ヲ以テ拂込モノ、期滿失効ノ期日往々區々ニ涉リ整理上不都合不少候ニ付別紙之通概要ヲ掲記シ之ニ照準可取扱旨金庫出納役へ及通達置候條御省支部局於テモ區々ノ取扱無之様無洩御通知置有之度此段及御通牒候也

追テ既ニ御差出ノ分ニテ前紙ニ相違スルモノハ便宜當省預金局ニ於テ訂正可取扱候爲念申添候也

(別紙)

一 寄託通知書ヲ以拂込ム保管金ノ保管期限

裁判所豫納金

裁判所保證金

保釋金

財產公賣代金

裁判所又ハ行政官廳ノ差押金

差押物件賣却代

差押中ニ收入シタル利子元金之類

所有權ノ爭訟ニ係ル財產ヨリ生スル收入金

右各項ノ類ハ裁判ノ結了ヲ以テ保管ノ義務解除ノ期日ヲ定ムヘキモノニシテ頭初

期限未定ト記シ追テ確定シ更ニ官廳ヨリ通知スヘキモノトス但期滿失効ハ本年法

律第一號第一條第一項ニ依ル

出納官吏身元保證金

執達吏身元保證金

右ハ責任解除ノ期ヲ以テ保管義務解除ノ期限トナスモノニシテ豫シメ期限ヲ定メ難キモノナレハ期限未定ト記スルモノトス但期滿失効ハ前ニ全シ

聯合馬車人力車營業身元保證金  
 右ハ廢業ノ日ヲ以テ保管義務解除ノ期トナスモノナレハ拂込ノ日ハ期限未定トス  
 但期限失効ハ前ニ全シ  
 工事受負身元保證金  
 會計規則第六十九條第七十條ニ據ルヘキモノ  
 物品納賣契約保證金  
 右各項ハ結約者双方間ニ成立セシ期限ヲ以テス但シ期限失効ハ前ニ全シ  
 一保管金送付書ヲ以テ拂込ム保管金ノ期限失効  
 郵便爲替金ノ請求ナキモノ  
 郵便沒書收入金  
 警察官拾得金  
 拾得金  
 但取ノ拾置金及郵便函投入金モ此例ニ依ル  
 漂流物賣却代  
 但全規則第三十八條ニ依ルモノハ  
 遺失物賣却代 警察官拾得物  
 人民拾得物  
 溺死行倒人等ノ所持金  
 右各項ノ期限失効期限ハ各定ムル所ノ規則ニ依レルモノナリ但期限内及失効ノ當  
 日拂戻金證明書ヲ交付シタル日ハ更ニ該拂戻金證明書ニ對シ其日ヨリ滿三十ケ年  
 ヲ以テ期限失効トス  
 相續人未定ノ遺產金  
 同上物件賣却代  
 同上利子元金地家賃ノ類

五ケ年  
 三ケ年  
 一ケ年  
 二ケ年  
 三ケ年  
 一ケ年

負債主身代限リノ分配ヲ受クヘキ債主ノ請求ナキ分配金  
 差押物件賣却代金餘剩返付ノ請求ナキモノ  
 右ハ期限ナキモノニ付本年法律第一號第一條第二項ニ依リ保管ノ翌日ヨリ滿三十  
 年ヲ以テ期限失効トス

附言

期限及期滿失効ノ期日ハ滿何年ト記載セス之ニ該當スル年月日ヲ記入スルモノト  
 ス  
 拾得物及取ノ拾置物賣却代ヲ一ケ年ノ失効期限トセシハ拾得者届出タル當日ニ於  
 テ賣却セシモノニ對シシモノニテ届出ノ日ヨリ數日經過ノ後賣却セシトキハ其届  
 出ノ日ヨリ起算スルモノトス  
 期限又ハ期滿失効ノ年月日訂正方官廳ノ通知ヲ得タル日ハ預金局又ハ金庫ニ於テ  
 ハ該通知書ニ據リ保管證書又ハ領收證書并ニ原簿ヲ訂正シ證書ハ官廳ヘ還付シ通  
 知書ヘハ記番ヲ記入シ金庫ニ屬スルモノハ中央金庫ヲ經由預金局ヘ送付スヘシ

○愛知縣伺 明治二十四年四月廿九日

警察署ニ領置スル得遺失物金品ハ警察署長ヲ以テ物品取扱委員又ハ現金出納官吏  
 トナシ保管セシムル規程實施以前ニ該金品ノ紛失セシヲ當今ニ至リ覺知シタルト  
 キ其事ニ關シタル官吏ヲ懲罰スルハ勿論ナレ尙之レカ賠償ヲモ爲サシメ人民ニ  
 給スヘキ金品ニ係ルトキハ欠損補填トシテ官ヨリ賠償可相成カ且其物品ノ價格ニ  
 異義ヲ生シ評價等ノ費用ヲ要シタルトキハ如何ナル費途ヲ以テ支辨スヘキ乎  
 警察署長ヲ以テ物品取扱委員又ハ現金出納官吏トナシ保管ノ責任者ト定メタル後  
 ト雖モ實際其取扱ヲ分任セラレタル巡查員ノ過失ニ依リ亡失シタル日ハ御省明治  
 廿二年訓令第三十六號物品取扱規定第二十條ノ主旨ニ依リ其巡查員ヲシテ賠償セ



シメ取扱委員又ハ出納官吏ハ懲戒ニ止ムヘキヤ  
○内務書記官通牒 明治二十四年五月廿日

第一項前段ハ其事實ニヨリ國庫ヨリ辨償可相成後段ハ警察費ヲ以テ支辨シ可然第  
二項ハ御見込ノ通ニ有之取扱委員ノ懲戒ハ其事實ニ依リ處分セラルヘク又巡查雇  
等ハハ現金ヲ保管セシメサル様取計ヒ可相成候右ハ別段指令ニ及ハレス候條此段  
及通牒候也

○勅令第四百四十五號 明治二十三年七月二十五日

供託規則

朕供託規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

供託規則

- 第一條 法律ノ規定ニ依リ供託スル所ノ金錢有價證券ハ總テ大藏省預金局ニ於テ之ヲ保管スヘシ
- 第二條 供託シタル金錢ハ拂込ノ日ヨリ六十日ヲ過ルトキハ拂込ノ翌月ヨリ拂渡請求ノ前月マテ通常預金ノ利子ヲ付スヘシ
- 第三條 供託ヲ爲サントスルトキハ大藏大臣定ムル所ノ式ニ依リ供託書ヲ製シテ供託物ニ添ヘ其申込ヲ爲スヘシ
- 第四條 供託者ハ民法財産編第四百七十七條債權擔保編第二百六十八條及商法

第七百四十條ノ場合ニ於テハ其供託シタル旨ヲ債權者ニ通知スヘシ

第五條 供託物ハ供託者ノ指定シタル者ニ拂渡シ又ハ裁判所ノ通知ニ依リ拂渡スヘキモノトス但供託者ニ於テモ其受領スヘキ理由アルコトヲ證明シ返戻ヲ請求スルコトヲ得

第六條 有價證券ノ償還金利子又ハ配當金ヲ受取ンドスルトキハ有權者ヨリ大藏省預金局ニ請求スヘシ此請求ナキトキハ政府ハ損害ノ責ニ任セサルヘシ

第七條 前條ノ請求ニ依リ大藏省預金局ニ於テ受取リタル償還金利子又ハ配當金ハ代供託物又ハ附屬供託物トシテ之ヲ保管スヘシ

○大藏省令第二十一號 明治二十六年九月二十日

供託物取扱規程

明治二十三年大藏省令第三十九號供託物取扱規程左ノ通改正シ本年十一月一日ヨリ施行ス

供託物取扱規程

第一條 明治二十三年勅令第四百四十五號ニ依リ保管スル供託物ノ保管受渡ハ此規程ニ依リ金庫ニ於テ取扱フモノトス

第二條 供託者ニ於テ金錢有價證券ヲ寄托セントスルトキハ其物件ニ左ノ事項ヲ記載シタル第一號書式ノ供託書ニ通テ添ヘ金庫ヘ差出スヘシ但金錢ト有價證券トハ各別ニ供託書ヲ調製スヘシ

第一 供託者ノ住所氏名若シ代人ヲ用ユルトキハ尙代人ノ住所氏名官吏ノ公務上取扱ニ係ルモノハ其官廳名官氏名

第二 金錢ハ其金額有價證券ハ其種類記號番號券面ノ金額枚數但種類其他多數ニテ一紙ニ認メ難キトキハ別冊ニ調製添付スルモ妨ケナシ

第三 供託ヲ爲スヘキ法律ノ條項

供託ノ事由

但裁判中ノ事件ニ係リ供託ヲ爲ストキハ尙其件名及其裁判所名ヲ記スヘシ

第四 年月日

第三條 金庫ニ於テ前條ノ供託書ヲ受ケタルトキハ其物件ヲ供託書ニ照シ之ヲ受領シ其一通ニ受領ノ旨記載捺印シ供託者ヘ交付スヘシ

第四條 供託物ハ郵便ヲ以テ寄托スルコトヲ得前項ノ場合ニ於テ金錢ハ寄托スヘキ金庫所在ノ銀行又ハ郵便局ニ於テ拂渡スヘキ送金手形若クハ爲換券等ヲ以テ寄托スルコトヲ得

第五條 金庫ニ於テ前條ノ送金手形若クハ爲換券ヲ以テ寄托ヲ受ケタルトキハ之ヲ其現金ニ交換シタル後テ第三條ニ於ケル受領ノ手續ヲ爲スヘシ

第六條 供託者ニ於テ供託物ノ分割ヲ要スルトキハ更ニ分割シタル供託書各二通ヲ調製シ第二號書式ノ請求書ニ第三條及第九條ノ受領證ヲ添ヘ金庫ヘ差出スヘシ

第七條 金庫ニ於テ前條ノ分割請求ヲ受ケタルトキハ更ニ差出シタル供託書ニ第三條ニ於ケル受領ノ手續ヲ爲シ新受領證ヲ舊受領證ト引換ニ交付スヘシ

第八條 供託者ニ於テ有價證券ノ償還金利子又ハ配當金ノ受取方ヲ要スルトキハ第三號書式ノ請求書ニ通テ調製シ委任狀ヲ添ヘ之ヲ金庫ヘ差出スヘシ

第九條 金庫ニ於テ前條ノ請求ニ依リ償還金利子又ハ配當金ヲ受取リタルトキハ償還金ハ代供託物トシ利子又ハ配當金ハ附屬供託物トシテ之ヲ領收シ請求書ノ一通ニ受領ノ旨記載捺印シ請求者ヘ交付スヘシ

第十條 供託者ニ於テ供託物ノ全部又ハ幾分ノ拂渡又ハ返戻ヲ請求スルトキハ其事由ヲ記載シタル第四號書式ノ請求書ニ第三條及第九條ノ受領證ヲ添ヘ金庫ヘ請求スヘシ

其全部拂戻ノトキハ式ノ如ク奥書ヲ爲シタル受領證幾分拂戻ノトキハ第五號書式ノ受取證ヲ差出スヘシ但供託者ニ於テ返戻ヲ受クル場合ニ官廳ノ證明書ヲ要スルモノハ其證明書ヲ第四號請求書ニ添付スヘシ

第十一條 裁判所ニ於テ裁判ノ結果等ニ依リ供託物ノ分割拂渡ヲ要スルトキハ第六號書式ノ請求書ニ第三條及第九條ノ受領證ヲ添ヘ之ヲ金庫ヘ送付シ同時ニ第七號書式ノ拂渡證書ヲ調製シ之ヲ受取人ヘ交付スヘシ

第十二條 受取人ニ於テ前條ノ拂渡證書ヲ受ケタルトキハ其末尾ニ式ノ如ク領收ノ旨記載捺印シ之ヲ金庫ヘ差出シ拂渡ヲ受クヘシ

第十三條 金庫ニ於テ第十條及第十二條ノ拂渡又ハ返戻ノ請求ヲ受ケタルトキハ供託物ヲ受取人ヘ交付スヘシ

金庫ニ於テ裁判所ノ通知ニ依リ供託物ノ全部ヲ一時ニ拂渡ストキハ式ノ如ク奥書ヲ爲シタル第三條及第九條ノ受領證ト引換ニ供託物ヲ受取人ヘ交付スヘシ

金庫ニ於テ裁判所ノ通知ニ依リ供託物ノ内幾分ヲ拂渡ストキハ其送付ヲ受ケタル第三條及第九條ノ受領證ニ式ノ如ク内渡ノ旨記入捺印シ受取人ヨリ第五號書式ノ受取證ヲ徴シ其供託物ヲ交付スヘシ

第十四條 供託者ニ於テ明治二十六年十一月三十日以前ニ屬スル供託金ノ利子ヲ受クルニハ其元金仕拂ノ後チ第八號書式ノ請求書ヲ金庫ヘ差出スヘシ

第十五條 大藏省ハ前條ノ請求書ニ依リ第九號書式ノ通知書ヲ製シ金庫ヲ經テ請求人ヘ交付シ請求書ハ案内トシテ之ヲ日本銀行ヘ送付スヘシ

第十六條 請求人ニ於テ前條ノ通知書ヲ受ケタルトキハ式ノ如ク裏面ニ領收ノ證印ヲ爲シ之ヲ其通知書ニ記載シタル日本銀行本支店又ハ其代理店ヘ差出シ現金ノ仕拂ヲ受クヘシ

(以下書式畧ス)

### 第十八章 警察費

○勅令第六十一號 明治二十一年八月六日

明治十四年<sup>日</sup>第十六號布告府縣警察費ニ對スル國庫下渡金ノ割合左ノ通改定ス

第一條 地方稅中警察費及警察廳舍建築修繕費ニ對スル國庫下渡金ノ割合ハ東

京府ハ其總高ノ拾分ノ四トシ其他ノ府縣<sup>沖繩縣ハ六分ノ一トス</sup>

第二條 前條割合ノ外警察官吏并ニ之ニ準スヘキ備内外國人ノ諸給與警視廳ノ

廳費ハ從前ノ通國庫ヨリ支給ス

第三條 本令ハ明治二十二年<sup>度</sup>ヨリ施行ス

○太政官達第十二號 明治十四年三月十八日

本年<sup>日</sup>第十六號布告第三條警察官吏並之ニ準スヘキ雇内外人ノ諸給與ハ從前ノ

通國庫ヨリ支給スルトアルハ是迄全ク國庫ノ支辨ニ係リシ費項ヲ指シタルモノ

ニシテ地方稅ト連帶支辨ニ係ル費項ニ關係ナキ儀ト心得ヘシ此旨相達候事<sup>(第六十</sup>

布告第三條ハ前掲廿一年勅令第六十一號第二條ニ當ル)

○內務省達乙第十九號 明治九年二月廿二日

從前賊徒捕縛方府縣互ニ依頼致候處右ニ屬スル諸費辨償方ニ付彼是無益ノ手數

相掛ケ候趣不都合ニ付以來互ニ辨償不致該地警察費ニテ悉皆仕拂相立候様可取

廳 府 縣

計此旨相達候事

○太政官達第二十九號 明治十三年四月三十日

官舍建築修繕等官費ト相定候旨明治十年<sup>日</sup>第十六號以テ相達置候處警察署分署

建築修繕費ハ本年七月以後國庫下渡金ト地方稅ト連帶支辨スヘキ儀ト心得ヘシ

此旨更ニ相達候事

○內務省達乙第二十二號 明治十三年五月廿日

警察上賞與吊祭扶助療治料等交附方ニ付明治八年<sup>日</sup>當省乙第三百三十四號達ノ趣

有之候處十三年<sup>度</sup>ヨリ別途不相渡候條巡查以下ヘ給與スヘキ分ハ警察費ニ屬ス

ル國庫下渡金ト地方稅ト連帶支辨可致尤モ右賞與等伺届ノ節一般人民ト區別候

義ハ從前ノ通り可心得此旨相達候事

但一般人民ヘ給與候分ハ客歲第五拾號公達ノ費途ヨリ支出スヘシ

○內務省達乙第十八號 明治十四年四月十一日

巡查并警察諸備等懲罰金巡查還納被服類及警察本分署不用品賣却代處分方之儀

ニ付明治九年當省乙第二十一號同年乙第九十五號同年乙第九十八號本年乙第一

號ヲ以テ相達候處右ハ相廢候條以來該金ハ地方稅一般ノ費途ヘ可仕拂此旨相達

使 府 縣<sup>東京府 除ク</sup>

府 縣<sup>東京府 沖繩 除ク</sup>

府 縣<sup>東京府 除ク</sup>

候事

但十三年當省乙第四十六號達中賣淫罰金ノ項ヲ除クノ外總テ廢止ト心得ヘシ  
○内務省達乙第八號 明治十五年一月廿六日 府 縣沖繩縣

本年第二號布告第三條第二項警察廳舎建築修繕費ハ警察費ヨリ分裂セシ科目ニ  
付客年第十六條布告ニ依リ國庫下渡金ヲ算出スル儀ト心得ヘシ此旨相達候事(六十  
年十一月十四號達ヲ以テ算  
出スル以下十三字アリ之ヲ刪除ス)

○大藏兩省訓令訓第七五四號 明治二十一年十二月十五日

府縣諸經費中廳費及傭人料ハ事務ノ所屬 郵便電信ノ如キハ知事名若クハ部課長  
所ノ費用ニ屬シ收稅事務ノ爲メ知事出張先ニ於テ要スニ依リ左ノ區別ヲ以テ支  
ル借家料傭人料ノ如キハ内國稅徵收費ニ屬スルノ類ニ依リ左ノ區別ヲ以テ支  
辨ス可シ

〔第一部第二部〕ノ分ハ府縣費

〔收稅部〕ノ分ハ内國稅徵收費

〔警察本部〕ノ分ハ警察費

〔監獄分課〕ノ分ハ監獄費

同上費途ノ兩費以上ニ連涉シテ分ツ可ラサルモノハ其重ナル方ノ費用ニ屬ス

但附屬書類等ニシテ區分シ得ラルヘキモノハ其相當費途ニ屬スルモノトス  
此區分ハ明治二十二年ヨリ施行ス

右訓令ス

○内務省訓令訓第五七二號 明治二十一年九月二十四日

今般閣令第十二號ヲ以テ地方稅警察費中へ警察機密費ノ一科目並ニ衛生及病院  
費中へ檢儆費ノ一科目ヲ置カレ候ニ付テハ其取扱方左ノ通心得ラルヘシ

一警察機密費ハ廳費ノ次檢儆費ハ傳染病豫防費ノ次ニ編入スヘシ

一警察機密費ハ警察費中他ノ科目ト交互流用スヘカラス

一同費支拂中探偵等ノ事件ニヨリ事實領収書ヲ得カタキ場合ニ於テハ探偵主

務ノ官吏ヨリ之ヲ徵シ正當領收書トナスヘシ

右訓令ス

○勅令第二百二十一號 明治二十二年十一月二十日

第一條 (第三款ニ掲ク)

第二條 (略ス)

第三條 地方稅ノ補助トシ國庫ヨリ支出スル府縣警察費連帶支辨金ハ豫算ニ依

リ概算渡ヲ爲スコトヲ得

第四條 本令ハ明治二十三年四月一日ヨリ施行ス

○内務省訓令訓第二一五號 明治二十五年三月廿二日

官吏懲戒例ニ於ケル罰俸ノ義ハ自今減俸ト同ク俸給中ヨリ之ヲ控除シ雜收入ニ編入セシムル義ト心得ヘシ

但巡查懲戒例ニ於ケル罰俸モ本文同様取扱フヘシ

右訓令ス

○内務 兩省訓令第三〇二號 明治十九年五月

地方税及備荒儲蓄金中水火盜難又ハ遺失等ニ依リ損失ニ歸セシモノハ其事實明瞭ナルモノハ自今伺出ニ及ハス其損失金地方税ニ係ルモノハ豫備費雜出ヨリ備荒儲蓄金ニ係ル者ハ其雜出ヨリ支辨シ他日追徴金有之節ハ各其年度ノ雜收入ニ編入シ渾テ精算報告書ニ其事由ヲ詳記スヘキ義ト心得ヘシ

(參照)

○大藏 兩書記官通牒 明治十六年一月十八日

昨年十二月兩省乙第七十二號ヲ以テ地方税豫算及報告書式達ニ據リ費目編入方取

調候處概略別冊ノ通ニ有之候條御參考迄ニ差進候也 (別冊ノ内)

費目編入備考

警察費	俸給	巡査月給	御用掛月給
警察廳舎 建築修繕費	雜給	旅費 <small>(巡查御用掛諸雇人無罪解放人等ノ類)</small>	滿年賜金、賞與、被服費、雇給 <small>(雇人臨時雇人寫字生評價人小便繩取人足不寢番人馬車船雇料人足水火夫給職工賃運賃給等ノ類)</small>
	廳費	手數料 <small>(爲替手數料新聞廣告料)</small>	死傷手當 <small>(甲察料扶助料諸品入札拂手數料等ノ類)</small>
	建築費	備品、消耗品、印刷費、郵便税、電信料、運搬費、	賄料 <small>(巡查辨當料巡查以下宿直賄料賄料荷造用品等ノ類)</small>
	修繕費	全上修繕ノ費用	賄料 <small>(馬車馬具被服馬醫手當雜費(借家料借地料)土木費區町村協議費) 歸ニ係ル雜札製作費等ノ類</small>
			<small>(工役人夫死傷ノ手當ハ其工事ノ費目ニ編入スルモノトス以下之ニ全シ)</small>
			警察本署、警察署、分署、派出所、囚人留置所等新築及土地買上等ニ係ル費用

○愛媛縣伺 明治二十年十二月十二日

巡査警邏ノ際怪訝ノ荷物ヲ携帶スル者アリ其舉動疑敷ヲ以テ一應之ヲ檢セン爲メ止ムヲ得ス或ル民家ヲ借受該家へ連行キ取糺中贓物タル事顯然シ愈舉動犯タルコトヲ認メ之ヲ逮捕セントスルニ際シ彼ハ兇器ヲ以テ拒捕シ爲メニ巡査ハ數ヶ所ノ傷ヲ負フモ屈セス遂ニ捕獲スルコトヲ得タリ而シテ右力爭中器物ヲ破損シ又ハ鮮血進リテ疊建具ヲ汚染シタルヲ以テ家主ヨリ器物代價并ニ修繕費等金四圓四十五錢ノ賠償ヲ申立タリ然ル處元來賊ノ潛匿セシカ如キ場合ナレハ之ヲ辨償スルニ及ハサル筈ナレモ前陳ノ如キ事情ニテ一時官ニ於テ借受ケタルヨリ起因セシ義ニ付家主へハ警察費中ヨリ辨償致シ可然哉異例ノ件ニ付此段相伺候也

○内務省指令 明治二十年十二月廿八日

伺ノ通

○内務書記官通牒 明治二十一年九月二十七日

德島縣ヨリ警察費ニ對スル國庫下渡金割合之儀ニ付別紙之通伺出指令相成候間爲御心得此段及御通知候也

○德島縣伺 明治二十一年九月五日

去月六日勅令第六十一號ヲ以テ地方稅中警察費及警察廳舎建築修繕費ニ對スル國庫下渡金ハ其總高六分ノ一ト御改正相成候ニ付テハ寄附金ヲ以テ同費へ支出候場合ニ於テモ同様ノ割合ニテ國庫金御下渡可相成儀ニ候哉此段相伺候也

○指令 明治二十一年九月廿七日

伺之通寄附金ニ對スル國庫下渡金ハ下付セサル儀ト心得ヘシ

○内務省訓令第二三六號 明治二十二年三月廿七日

地方稅ニ對シ金穀物件ヲ寄附シタルモノ其寄附者指定ノ事業又ハ費途ノ廢絶シタ

ル場合ニ於テ其金穀物件ハ自今左之各項ニ依リ處分セララルヘシ  
 第一 一旦使用ノ後寄附者指定ノ事業又ハ費途ノ廢絶シタル場合ニ於テハ府縣會ノ議決ニ依リ其事業又ハ費途ニ最モ近似ノ事業ニ充用シ若クハ寄附者ニ還付スルコトヲ得  
 同上ノ金穀物件ニシテ未タ使用スルニ至ラスシテ寄附者指定ノ事業又ハ費途ノ廢絶シタル場合ニ於テハ之ヲ寄附者ニ還付スヘシ  
 第二 元金又ハ原物ヲ委託シ其收得ヲ寄附シタルモノ若シクハ元金又ハ原物ヲ据置トナシ其收得ヲ使用スルノ方法ヲ以テ元金又ハ原物ヲ寄附シタルモノ其事業又ハ費途ノ廢絶シタル場合ニ於テハ其元金又ハ物件ハ之ヲ寄附者ニ還付シ其現存ノ收得又ハ之ヲ以テ支辨シタル原物ハ前項ニ依リ處分ス  
 第三 寄附ノ金穀物件ニシテ其處分方ニ付特別ノ約束ヲ附セルモノハ各其約束ニ依ル  
 第四 區町村費ノ支辨ニ係ル事業ニ對スル寄附ノ金穀物件ノ處分モ本訓令ニ準ス右訓令ス

○内務省總務局長通牒 明治二十三年八月廿一日

府縣警察費連帶支辨金支出方ノ義ハ各府縣ニ於テ精算拂又ハ概算拂トナシ其取扱區々ニ涉リ居候趣ノ處右ハ客年十一月勅令第百二十一號第三條ニ依リ自今概算拂ニ御取計有之度此段及通牒候也

○内務書記官通牒 明治二十三年九月十日

本年當省訓令第三十號改正報告例中從前報告例週報第六警察費警察廳舎建築修繕費豫算決議額ノ項刪去相成候ニ付テハ右地方稅ヨリ支出額ニ對スル國庫下渡金ノ増額ヲ要スルトキハ本年五月第三三六號訓令府縣費取扱手續第二項ニ依リ増額求相成儀ト御承知有之度此段及通牒候也

追テ増額請求計算書事由欄内へ警察費ト警察廳舎建築修繕費ノ内譯及地方税ヨリ支出高ヲ掲載相成度此段申添候也

○警保兩局長通牒 明治二十三年十月二十四日

今般本省訓令第三十八號ヲ以テ請願巡查配置及費用取扱方規定セラレ候處警察費國庫下渡金ヲ算出スル場合ニ於テハ右請願者ヨリ徴收シタル金額ハ警察費總高ノ内ヨリ控除スヘキ筈ニ付警察費ノ目ヲ掲ケ豫算積算御取計相成ルヘキ義ト御承知有之度此段及通牒候也

○警視廳伺 明治二十四年二月十二日

保安條例執行ニ關スル費用別紙第一號寫ノ通常府常置委員會へ諮問候處第二號寫ノ通府知事ヨリ通牒有之今又第三號寫ノ通照會相成候右ハ單ニ理論上ノ觀察ニ依ルトキハ一應尤ノ様ナレトモ其實ノ現象ハ皆異ニシテ皇居所在ノ首府其首府ニ居住スル其人國務大臣特ノ安寧幸福ヲ維持スルニ必要ヲ認メタル警察ノ運動ニ伴フ所ノ費用ナレハ其地方ノ負擔スヘキハ當然ト存候得共前件ノ事情ニ付尚御詮議ノ上費途ノ區分相定メ度此段仰御指揮候也

○内務省指令 明治二十四年二月廿六日

地方税ノ負擔ト心得ヘシ

○内務書記官通牒 明治二十四年十一月二日

地方税警察費及警察廳舎建築修繕費ハ縣會決議額并地方税豫備費ヨリ支出ノ場合トモ府縣制施行後ニアツテハ二十三年法律第三十五號府縣制第九十條第三項ニ據リ其都度認可ヲ經ラルヘキ筈ニ候條此段爲念及御通牒候也

○警保局長通牒 明治二十四年十一月十七日

警察費連帶支辨金ノ義ハ縣會決議額並地方税豫備費ヨリ支出ノ都度豫算増額相成來候處自今ハ先ツ豫算内ヲ以テ支出シ置年度末ニ於テ不足ヲ生スル場合ニ請求相成度就テハ府縣同費増減之都合モ有之候條二十四年度豫算殘餘ノ見込有之候ハ、二十五年二月廿八日迄當局へ到達候様御通報相成度此段申進候也

○内務書記官通牒 明治二十五年二月四日

客歲本省令第十二號府縣歳入歳出豫算書式中警察廳舎修繕費及同建築費ニ屬スル國庫下渡金ノ儀ハ右二科目各別ニ算出スヘキ筈ニ有之候條爲念此段及通牒候也追テ本文若シニ科目ヲ合セ算出シ既ニ府縣會決議ノ上認可ヲ與ヘラレタルモノハ其儘据置キ精算ノトキ更正相成可然此段申添候

○内務書記官通牒 明治二十五年四月一日

本年三月廿二日訓第二一五號ヲ以テ官吏罰俸取扱ノ義ニ付訓令相成候處地方税支辨ニ屬スル官吏ノ罰俸其範圍外ニ候條爲念此段及通牒候也

○山梨縣伺 明治二十五年五月卅一日

警察官ニ於テ水火傷痕等ノ爲メ死ニ瀕スル者ヲ認メ事突嗟ノ間ニ在テ親戚隣保ヲ疎ツノ猶豫ナク直ニ醫師ニ命シテ一時治療セシメタル費用ニシテ本人身元亦貧ニシテ辨償スルノ資力ナキ場合之ヲ縣警察費ヨリ支出スルハ聊カ穩カナラサルノ嫌有之候ニ付原籍府縣稅救費中ヨリ支辨シ可然哉

○内務書記官通牒 明治二十五年六月十三日

御見込ノ通ニテ可然別段指令不相成候條此段及御通知候也

○内務省達乙第二十二號

明治十四年四月十八日

警視廳

府縣東京府除ク



銀行又ハ諸會社又ハ町村協議或ハ人民一己ヨリ其費用ヲ納メ巡查ノ配置ヲ請願スル者ハ自今聞届請願ノ場所ヘ配置不苦候條該費收支方ハ國庫下渡金地方稅等ニ連帶セス別ニ其帳簿ヲ調製シ毎年地方稅收出精算書ト同時ニ報告スヘシ此旨相達候事

但シ本文配置ノ巡查ハ一般ノ成規ニ從ヒ異同無之様取計フ可シ

○内務省訓令第三十八號 明治二十三年十月廿三日 警視廳 府縣沖繩縣ヲ除ク

明治十四年<sup>四</sup>内務省乙第二十二號達銀行又ハ諸會社其他ヨリ請願ニ依リ配置スル巡查ハ他方稅支辨ニ屬スル巡查ヲ以テ之ニ充テ其請願者ヨリ納ムヘキ費用ハ府縣會ノ決議ヲ經其額ヲ定メテ徵收シ地方稅雜收入ニ編入警察費ニ支出スヘシ

○内務省訓令訓第三一三號 明治二十五年四月十四日 北海道廳 沖繩縣

銀行諸會社其他人民ヨリ巡查ノ配置ヲ請願シタルキハ國庫費支辨ノ巡查ヲ以テ之ニ充テ其願者ヨリ納ムヘキ費用額ハ北海道廳長官沖繩縣知事之ヲ定メ木大臣ノ認可ヲ經テ徵收シ國庫ノ歲入ニ編入スヘシ

(參照)

○内務省ヨリ内閣ヘ請議 明治二十二年十二月二十日

布哇國ヘ巡查派遣ノ件

神奈川縣知事沖守固ヨリ別紙ノ通郵船會社瀨船山城丸ヲ以テ布哇國出稼人ヲ搭載渡航可致ニ付該航海中取締トシテ同縣巡查二名同國ホノル、府迄出張ノ義全會社ヨリ願出巡查往復旅費ハ一切同會社ニ於テ支辨ノ答ニシテ差支無之ニ付出張爲致度旨伺出タリ右ハ航海中取締上必要ニ付伺之通許可セントス尤モ今後追々全國ヘ出稼人モ増加スルニ付テハ右全様ノ伺出アルヘシト存候然ルニ其都度閣議ヲ經候テハ渡航ノ時期ヲ失スルノ恐モ有之旁以當省限許可ノ上報告スルコトニ致度仍テ閣議ヲ請フ(別紙神奈川縣伺ハ畧ス)

○内閣指令 明治二十二年十二月廿五日

明治廿二年十二月廿日神甲第三二號ノ内 布哇國ヘ巡查派遣ノ件請議ノ通

○長崎縣伺 明治二十一年十一月二十日

部下人民又ハ外國人ニテ時日ヲ期シ一時巡查ノ貸與ヲ願出ル者アル時ハ常務ニ當ラサル者即チ非番巡查ヲ以テ無報酬貸與致シ來候得共自今相當ノ報酬金額ヲ定メ願主ヨリ之ヲ徵收シ而シテ右金額ハ巡查ニ給與候事ニ致度右ハ差掛候件ニ付至急何分ノ御指示相成度此段相伺候也

○内務省指令 明治二十一年十二月四日

本年十一月二十日甲警第七五二號貸與巡查報酬金ノ義ニ付伺之件ハ一時時日ヲ期シ派出セシムル場合ト雖モ明治十四年當省乙第二十二號達ニ依ルヘキ義ト心得ヘシ

○神奈川縣伺 明治二十四年十月十四日

銀行又ハ諸會社其他ノ請願ニ係ル巡查配置方等之義ニ付テハ明治十四年御省シ第二十二號御達ノ趣モ有之候處國庫經濟ニ屬スル外國人居留地ノ如キハ會計法實施以降其費用収支方右御達ノ如ク取扱兼候ニ付該地ニ限リ姑ク其配置方ヲ拒絕シ來候得共居留外國人中種々事情申出懇請スルモノ往々有之到底拒絕シ能ハサルノミナラス取締上不都合ニモ有之候間自今ハ請願ヲ閉居候様致度最臨時數日間ヲ期シ配置スルモノ、如キハ便宜非番巡查ヲ以テ之ニ充テ而シテ請願者ヨリ納付スル費用ハ國庫ノ收入ニ收納シ當該巡查ニハ別ニ手當トシテ相當ノ金額ヲ給與シ可然乎

○内務書記官通牒 明治二十四年十月卅一日  
十四年本省シ第二十二號達及客年十月第三十八號訓令ニ依リ地方稅支辨ニ屬スル巡查ヲ以テ配置相成可然且別ニ手當金等給與ノ義ハ不相成筋ニ有之候本件ハ別ニ指令及ハレス

○警視廳伺 明治二十三年十一月十四日

諸遊所又ハ人民輻輳ノ場所其他火災ノ虞アル場所ヨリ消防手ノ配置ヲ請願スルモノ有之候節ハ便宜之レヲ聞届ケ其費用ハ請願者ヨリ辨償セシメ來リシ處本年十月第三十八號ヲ以テ巡查配置ニ係ル件訓令相成候ニ付テハ消防手配置ノ義モ右訓令ニ準據シ經費収支候様致度此段相伺候也

○内務省指令 明治二十四年十二月十四日  
聞届ク

### 第十九章 俸給令及給與

〔警視廳高等官俸給沿革〕十四年一月第一號達ヲ以テ警視廳ヲ置キ官等俸給ヲ定ム○

同年三月第二十三號達同年七月第六十號達十五年第三十八號達十七年第六十五號達六號達ヲ以テ漸次其幾分ヲ改正ス○十八年七月第三十四號達ヲ以テ警視廳職制章程ト共ニ官等俸給ヲ改正ス○十九年五月勅令第四十二號警視廳官制改正ニ依リ官等改正セラル○廿四年四月勅令第三十五號ヲ以テ警視廳高等官俸給令ヲ定ム○同年七月勅令第百十八號ヲ以テ同俸給令改正○廿六年三月勅令第十三號ヲ以テ同俸給令改正○廿六年十月勅令第百八十號ヲ以テ同俸給令改正○廿九年六月勅令第二百五十二號ヲ以テ同俸給令改正

〔警部長官等俸給沿革〕十四年十一月第九十八號達ヲ以テ府縣官中警部長ヲ置キ官等俸給ヲ定ム○十八年十二月第六十五號達ヲ以テ府並開港場鎮臺控訴裁判所在ル縣ノ警部長ノ官等ヲ定ム○十九年七月勅令第五十四號地方官官制ニ依リ奏任官四等以下トナル○二十二年十二月勅令第百三十六號ヲ以テ府及開港場師團控訴院在ル縣ノ警部長ハ奏任二等ニ陞ルコトヲ得セシム○廿三年十月勅令第二百二十五號地方官官制及同第二百二十六號地方高等官官等俸給令ニ依リ官等俸給トモニ改正○廿四年七月勅令第百二十號地方高等官俸給令ニ依リ官等ヲ廢シ俸給ヲ改正ス○廿四年七月勅令第百二十一號ヲ以テ北海道廳官制改正ニ依リ該廳ニモ警部長ヲ置キ同月勅令第百十九號ヲ以テ其俸給ヲ定ム

○勅令第九十六號 明治二十五年十一月十二日

### 高等官官等俸給令

#### 官等及叙任

第一條 親任式ヲ以テ叙任スル官ヲ除ク外高等官ヲ分テ九等トス親任式ヲ以テ叙任スル官及一等官二等官ヲ勅任官トシ三等官乃至九等官ヲ奏任官トス

第二條 勅任官中親任式ヲ以テ叙任スル官ノ辭令書ハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ内閣總理大臣又ハ首座ノ大臣之ニ副署ス

第三條 親任式ヲ以テ叙任スル官ヲ除キ其他ノ勅任官ノ辭令書ハ御璽ヲ鈐シ内閣總理大臣之ヲ奉行ス

第四條 奏任官ノ任官及叙等ハ内閣總理大臣之ヲ奏薦シ其各省及各省所屬ノ官廳ニ屬スルモノハ内閣總理大臣ヲ經由シテ主任大臣之ヲ奏薦ス

第五條 奏任官ノ辭令書ハ内閣ノ印ヲ鈐シ内閣總理大臣之ヲ宣行ス

第六條 高等官官等ハ別ニ定ムルモノヲ除ク外本令中ノ文武高等官官等表ニ依ル

官制上他ノ官ニ在ル者ヲ以テ兼任シ又ハ之ニ充ツルノ官ニシテ別ニ官等ヲ定メサルモノハ本官ノ官等ニ依ル

第七條 初メテ奏任文官ニ任セラル、者ノ官等ハ六等以下トス

奏任文官ヲ勤メ退官シタル者再ヒ奏任官ニ任セラル、場合ニ於テ其官等ハ前官ノ官等以下トス

但前官々等七等以下ナルトキハ陞シテ六等官ニ至ルコトヲ得

第八條 奏任官ノ官等ハ別ニ進級ノ例ヲ定メタル者及七等以下ノ者ヲ除ク外在職滿二年ヲ踰ユルニ非サレハ陞叙スルコトヲ得ス

俸給

第九條 高等文官ノ俸給ハ別ニ定ムルモノ、外左ノ如シ

内閣ノ部

年俸九千六百圓

内閣總理大臣

内閣所屬職員

年俸三千五百圓

書記官長

高等文官年俸一號表ニ依ル

局長

高等文官年俸二號表ニ依ル

書記官

内閣總理大臣秘書官

年俸千六百圓

恩給局審査官

賞勳局

總裁

年俸三千五百圓

副總裁

年俸三千圓

書記官

一級俸二級俸各一人トス

一級俸年俸二千圓  
二級俸年俸千六百圓

法制局

長官

年俸四千圓

參事官

高等文官年俸二號表ニ依ル

各省ノ部

大臣

年俸六千圓

次官

年俸四千圓

局長

高等文官年俸一號表ニ依ル

參事官

秘書官

高等文官年俸二號表ニ依ル

書記官

外務省翻譯官

高等文官年俸三號表ニ依ル

大藏省主計官

大藏省主稅官

高等文官年俸二號表ニ依ル

農商務省特許局審判官

年俸千二百圓

農商務省特許局審査官

技術官俸給令ニ依ル

遞信省鐵道事務官

高等文官年俸二號表ニ依ル

第十條 高等文官ノ俸給ニ關シテ別ニ定ムル所ナキモノハ總テ本令ノ規定ニ依ル

陸海軍武官ノ俸給ニ關スル規程ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第十一條 同一ノ官職ニシテ官等ニ依リ其俸給ヲ異ニスルモノハ本令定ムル所ノ高等文官官等相當俸給表ニ依リ各其官等ニ照シテ之ヲ給ス

第十二條 同一官職ノ同一官等内ニ於テ其俸給ニ數級アル場合ニ於テハ其等級ニ依リ事務ノ繁簡ニ從ヒ本屬長官便宜之ヲ増減スルコトヲ得

第十三條 高等文官死亡シタルトキハ其在職中ナルト非職中ナルトニ拘ハラズ在職最終年俸三分ノ一ヲ其遺族ニ給ス但遺族トハ官吏遺族扶助法ニ於テ遺族ト稱スル者ヲ云フ

終身官ハ其在職中死亡シタル者ニ限リ前項ノ規定ニ依ル

第十四條 年俸ハ十二分シテ每月之ヲ支給ス

第十五條 俸給ハ新任増俸減俸トモ總テ發令ノ翌日ヨリ計算ス

第十六條 非職廢官退官退職及死亡ノトキハ年俸ヲ月割計算トシ當月分ノ全額ヲ給ス

第十七條 非職廢官退官者事務引繼殘務調理ノ爲特ニ命ヲ承ケ公務ニ從事スルトキハ其間尙従前ノ年俸ヲ給ス

第十八條 病氣ノ爲メ執務セサルコト九十日ヲ踰ユル者及私事ノ故障ニ由リ執務セサルコト三十日ヲ踰ユル者ハ俸給ノ半額ヲ減ス但公務ノ爲傷痍ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リ又ハ服忌ヲ受クル者及特旨ニ由リ賜暇休養スル者ハ此限ニアラス

第十九條 俸給支給ニ關スル細則ハ大藏大臣省令ヲ以テ之ヲ定ム  
附則

第二十條 本令ハ明治二十五年十一月二十日ヨリ施行ス  
但第十四條ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行ス

第二十一條 明治二十四年勅令第八十二號高等官任命及俸給令並ニ同年勅令第二百十五號文武高等官官職等級表ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

俸給ニ關スル他ノ勅令ニ於テ明治二十四年勅令第八十二號中第一號表第二號表若ハ第三號表ニ依ルヘキコトヲ規定セルモノハ本令施行ノ後ハ本令中同號ノ高等官年俸各表ニ依ル

第二十二條 現任ノ高等官ニシテ本令施行ノ際別ニ辭令書ヲ交付セサルモノハ左表ニ依リ明治廿四年勅令第二百十五號文武高等官官職等級表ニ規定シタル等級ト相對照スル官等ニ叙セラレタルモノトス

現任判事檢事ニシテ本令施行ノ際別ニ辭令書ヲ交付セサルモノハ現ニ受クル所ノ俸給ニ照シ高等文官官等相當俸給表ニ定ムル所ノ相當官等ニ叙セラレタルモノトス

(俸給ニ關スル諸表ハ略ス)

對照表

文武高等官官職等級表ノ官等	親任	一等	二等	三等	四等	五等	六等	七等	八等	九等	十等
文武高等官官等表	一等	二等	二等	三等	四等	五等	六等	七等	八等	九等	

文武高等官官等表 (抜萃)

官等	官職		官等	官職	官等	官職	官等	官職	官等	官職	官等	官職	官等	官職	官等	官職	官等	官職				
	親任	勅任																				
大臣	内務省	警視廳	一等	内務次官	警視總監	二等	同上	三等	同上	警視廳長	四等	同上	五等	同上	六等	同上	七等	同上	八等	同上	九等	同上
局長	中央衛生會會長	神宮祭主	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
警視廳長	警視廳長ニ補スル者	警視廳長ニ補スル者	警視廳長ニ補スル者	警視廳長ニ補スル者	警視廳長ニ補スル者	警視廳長ニ補スル者	警視廳長ニ補スル者	警視廳長ニ補スル者	警視廳長ニ補スル者	警視廳長ニ補スル者	警視廳長ニ補スル者	警視廳長ニ補スル者	警視廳長ニ補スル者	警視廳長ニ補スル者	警視廳長ニ補スル者	警視廳長ニ補スル者	警視廳長ニ補スル者	警視廳長ニ補スル者	警視廳長ニ補スル者	警視廳長ニ補スル者	警視廳長ニ補スル者	

○勅令第二百五十二號 明治二十九年六月十日

警視廳高等官俸給令

第一條 警視廳高等官ノ年俸左ノ如シ

官職	官等	俸給
警視總監	第一部長ニ補スル者	四、二、八、千、圓
警視	第二部長ニ補スル者	三、千、圓
警視	官房第一課長ニ補スル者	二、千、圓
警視	官房第二課長ニ補スル者	二、千、圓
警視	官房第三課長ニ補スル者	二、千、圓
警視	警察署長ニ補スル者	二、千、圓
警察醫長		二、千、圓
消防司令長		二、千、圓
典獄		二、千、圓

第二條 警察署長ニ補スル警視ノ俸給區別ハ内務大臣其ノ警察署ニ就テ之ヲ指定スヘシ

○勅令第二百二十號 明治二十四年七月二十四日

地方高等官俸給令

第一條 府縣知事書記官警部長收稅長及典獄ノ年俸左ノ如シ  
 東京府知事四千圓  
 京都府知事、大阪府知事、神奈川縣知事、兵庫縣知事、長崎縣知事、新潟縣知事、愛知縣知事、宮城縣知事、廣島縣知事、熊本縣知事三千五百圓  
 其他ノ縣知事三千圓

典	獄	收	稅	長	警	部	長	書	記	官	二	千	圓	其	他	ノ	諸	縣
								獄	八	百	圓	六	百					

三府及神奈川兵庫長崎新潟愛知  
宮城廣島熊本ノ八縣

第二條 東京府書記官ハ特ニ年俸二千二百圓ヲ給スルコトヲ得  
 大阪府警部長ハ特ニ年俸千八百圓ヲ給スルコトヲ得  
 大阪府典獄ハ特ニ年俸千圓ヲ給スルコトヲ得

第三條 參事官ノ年俸ハ千圓トス但九百圓又ハ八百圓ヲ給スルコトアルヘシ  
 第四條 郡長ノ年俸ハ六百圓トス  
 內務大臣ニ於テ特ニ指定スル各郡ノ郡長ハ年俸八百圓ヲ給ス但其人員ハ二百二人以內トス  
 第五條 島司ノ年俸ハ千二百圓トス

附則

第六條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス  
 明治二十三年勅令第二百二十六號地方官官等俸給令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

○勅令第百十九號 明治二十四年七月二十四日

第一條 北海道廳高等官ノ年俸左ノ如シ

長官 四千圓  
 書記官 上級二千二百圓  
 警部長 千八百圓  
 財務長 千八百圓

參事官

千圓

典獄

八百圓

郡區長

六百圓

第二條 內務大臣ニ於テ特ニ指定スル各郡區ノ郡區長ハ年俸八百圓ヲ給ス但其人員ハ七人以内トス

第三條 書記官ハ上級俸下級俸各一人トス

附則

第四條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

### 判任官俸給

〔警視廳判任官俸給ノ沿革〕十四年一月第一號達ヲ以テ警視廳ヲ置クト共ニ警視廳、巡查長、巡查副長、巡查部長、警察副使、書記、消防大司令、消防中司令、消防少司令ノ俸給ヲ定ム○同年三月第二十三號達ヲ以テ消防少司令ノ俸給ヲ改定ス○同年七月第六十號達ヲ以テ警察副使ノ俸給ヲ改定ス○十五年六月第三十八號達ヲ以テ巡查長、巡查副長、巡查部長、消防大中少司令ノ俸給ヲ改定ス○十八年七月第三十四號達ヲ以テ警視廳職制章程改正ニ依リ前記ノ官ヲ廢シ警視廳、警部、警部補、消防司令、消防司令補ヲ置キ其俸給ヲ定ム○十九年五月勅令第四十二號警視廳官制ニ依リ官等ヲ定メ俸給ヲ改正ス○二十一年十月勅令第六十九號ヲ以テ警視廳官制中警部以下ノ俸給ヲ改正ス○二十二年三月勅令第二十四號ヲ以テ官制中消防機關士ヲ加ヘ其官等俸給ヲ定

ム○二十三年四月勅令第七十四號ヲ以テ警部以下ノ官等及俸給ヲ改正ス○二十四年四月勅令第三十四號ヲ以テ官制改正ニ依リ警部補、消防司令、消防司令補ノ官ヲ廢シ消防士ヲ置キ同月勅令第三十六號ヲ以テ巡查本部警察署警察分署詰警部及消防士消防機關士ノ俸給ヲ定メ本廳勤務ノ警部及屬ハ一般判任官ノ俸給令ニ依ルコトトナル  
〔地方警部俸給ノ沿革〕八年十月第百八十一號達ヲ以テ警部ノ官等ヲ定ム○十年一月第十一號達ヲ以テ官等ヲ改正ス○十四年十二月第十一號ヲ以テ警部ノ等級ヲ廢シ警部、警部補(新置)ノ俸給ヲ定ム○十九年七月勅令第五十五號ヲ以テ地方官官等俸給令中警部警部補ノ官等俸給ヲ定ム○廿一年十月勅令第六十八號ヲ以テ地方官官等俸給令中警部以下ノ俸給ヲ改定ス○廿三年三月勅令第三十七號ヲ以テ判任官官等俸給ヲ改正セシモ警部警部補等ハ當分ノ内從前ノ規定ニ依ラシム○同年四月勅令第七十四號ヲ以テ警部其他特ニ官等ノ規定アリシモノ、官等俸給ヲ改定ス○二十三年十月勅令第二百二十五號ヲ以テ地方官官制改正ニ依リ警部補ヲ廢セラレ廿四年七月勅令第八十三號ヲ以テ判任官俸給令ヲ定メラレタルニ依リ警部ノ俸給ハ該令ニ依ルコトトナル  
○廿五年十一月十二日勅令第九十七號ヲ以テ判任官俸給令中改正

### 判任官俸給令

○勅令第八十三號 明治二十四年七月二十四日  
第一條 判任文官ノ月俸ヲ別テ十級トシ別表ニ依リ毎月下旬ニ於テ之ヲ支給ス  
第二條 陸海軍准士官下士ノ月俸ハ別ニ定ムル所ニ依ル其他特ニ定ムルモノハ前條ノ限ニアラス



第三條 判任官ハ每級在職一年以上ニ至ラサレハ増給スルコトヲ得ヌ  
 第四條 判任官最上級俸ヲ受ケ五年ヲ踰ヘ事務練熟優等ナルモノハ特別ヲ以テ別表ノ範圍ニ拘ハラヌ漸次七十五圓マテ増俸スルコトアルヘシ  
 第五條 官ニ在リテ死亡シタルモノハ月俸三箇月分ヲ其遺族ニ給ス非職者ニ於テモ亦同シ但遺族トハ官吏遺族扶助法ニ於テ遺族ト稱スルモノヲ謂フ  
 第六條 前條ノ外俸給支給ニ關シテハ高等官官等俸給令第十五條第十六條第十七條第十八條ノ例ニ依ル  
 第七條 俸給支給ニ關スル細則ハ大藏大臣省令ヲ以テ之ヲ定ム

附則

第八條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

明治十九年勅令第三十六號判任官官等俸給令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

(別表)

一級	六十圓	三級	四十五圓	五級	三十五圓	七級	二十五圓	九級	十五圓
二級	五十圓	四級	四十圓	六級	三十圓	八級	二十圓	十級	十二圓

○勅令第八十四號 明治二十四年七月二十四日

技術官俸給令

第一條 各廳ニ於テ工藝技術ヲ要スルモノハ職員ノ外特ニ技術官ヲ置ク  
 第二條 技術官ヲ分テ技監技師技手トス  
 第三條 技監ハ勅任トシ技師ハ奏任トシ技手ハ判任トス  
 第四條 技監ノ年俸ハ三千圓トシ技師ノ年俸ハ特ニ定ムルモノノ外本年勅令第八十二號高等官任命及俸給令第二號表ニ依ル  
 第五條 技術官ハ各廳事務ノ繁簡ニ依リ俸給最低額以下ヲ給スルコトアルヘシ  
 第六條 本令ニ規定スルモノヲ除クノ外技監技師ニ關シテハ本年勅令第八十二號高等官任命及俸給令ヲ適用シ技手ニ關シテハ本年勅令第八十三號判任官俸給令ヲ適用ス

附則

第七條 技術官ニシテ現ニ休職中ノ者ハ其休職滿期迄仍ホ現俸三分ノ一ヲ支給ス  
 第八條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

明治十九年勅令第三十八號技術官官等俸給令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス  
 ○內務省告示第四十九號

明治二十九年六月勅令第二百五十二號警視廳高等官俸給令第二條ニ依リ警察署長俸給ノ區別ニ關シ警察署ヲ指定スルコト左ノ如シ

麴町警察署

神田警察署

日本橋警察署

京橋警察署

芝警察署

下谷警察署

淺草警察署

本所警察署

右警察署長一級俸

麻布警察署

牛込警察署

本郷警察署

深川警察署

品川警察署

八王子警察署

右警察署長二級俸

赤坂警察署

四谷警察署

小石川警察署

新宿警察署

板橋警察署

千住警察署

小松川警察署

府中警察署

青梅警察署

水上警察署

右警察署長三級俸

○勅令第九十九號 明治二十九年三月三十日

臺灣總督府職員官等俸給令

第一條 臺灣總督府高等文官ノ官等ハ高等文官官等表ニ依ル

第二條 臺灣總督ノ年俸ハ六千圓、民政局長ハ四千圓、知事及勅任事務官ハ三千圓

トス

第三條 左ニ掲クル者ノ俸給ハ第一號俸給表ニ依ル但稅關長ハ七級俸以上、警部

長及廳書記官ハ二級俸以下トス

民政局奏任事務官

民政局參事官

臺灣總督祕書官

島司

支廳長

縣書記官

技師

稅關長

稅關鑑定官

警部長



第一號俸給表

年俸	一級 二千五百圓	二級 二千二百圓	三級 二千圓	四級 千八百圓	五級 千六百圓
	六級 千四百圓	七級 千二百圓	八級 千圓	九級 九百圓	十級 八百圓

第二號俸給表

年俸	一級 千五百圓	二級 千二百圓	三級 千圓	四級 九百圓
	五級 八百圓	六級 七百圓	七級 六百圓	

第三號俸給表

年俸	一級 二千圓	二級 千八百圓	三級 千六百圓	四級 千四百圓	五級 千二百圓
	六級 千圓	七級 九百圓	八級 八百圓	九級 七百圓	十級 六百圓

判任官俸給表

月俸	一級 六十圓	二級 五十圓	三級 四十五圓	四級 四十圓	五級 三十五圓
	六級 三十圓	七級 二十五圓	八級 二十圓	九級 十五圓	十級 十二圓

高等文官官等相當俸給表

官名	等級	三等	四等	五等	六等	七等	八等
民政局長	一級	一級俸	二級俸	四級俸	六級俸	八級俸	
民政局參事官	二級		三級俸	五級俸	七級俸	九級俸	
臺灣總督秘書官	三級		四級俸	六級俸	八級俸		
支廳長	三級		四級俸	六級俸	八級俸		
縣書記官	四級		五級俸	七級俸	九級俸		
警部書記官	四級		五級俸	七級俸	九級俸		
撫墾署主事	四級		五級俸	七級俸	九級俸		
一等郵便電信局長	五級	一級俸	二級俸	四級俸	六級俸	八級俸	
二等郵便電信局長	六級		三級俸	五級俸	七級俸	九級俸	

○勅令第百號 明治二十九年三月三十日

臺灣總督府職員加俸支給規則

第一條 臺灣總督府職員ニハ本則ニ依リ加俸ヲ支給ス

第二條 加俸ハ每月俸給月額十分ノ三ニ相當スル金額ヲ支給ス

第三條 加俸ハ新任増俸減俸トモ總テ發令ノ翌日ヨリ日割ヲ以テ計算ス

第四條 非職廢官退官及死亡ノトキハ當月分加俸ノ全額ヲ支給ス

第五條 本則ニ關スル支給細則ハ臺灣總督之ヲ定ム

附則

第六條 本則ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

○勅令第一百一號 明治二十九年三月三十日

臺灣總督府巡查及看守手當支給規則

第一條 臺灣總督府巡查及看守ニハ本則ニ依リ手當ヲ支給ス

第二條 手當ハ土地ノ狀況ニ依リ別表ノ範圍内ニ於テ一等乃至三等ノ金額ヲ支給ス

第三條 手當ハ新任、増減俸トモ總テ發令ノ翌日ヨリ日割ヲ以テ計算ス

第四條 廢官、死亡又ハ諭旨退官シタル者ニハ當月分手當ノ全額ヲ支給ス

第五條 本則ニ關スル施行細則ハ臺灣總督之ヲ定ム

附則

第六條 本則ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

(別表)

巡查及看守手當月額	
一等地	十圓
二等地	十二圓
三等地	十五圓

### 巡查俸給

〔沿革〕明治八年六月第百九號達ヲ以テ選卒ヲ等外吏ニ準シ全年十月第百八十二號達ヲ以テ選卒ヲ巡查ト改メ等級月俸ヲ定ム○十年一月第十一號達ヲ以テ巡查ニ等級ヲ冠シシメ俸給ハ十圓以下ヲ以テ府縣ノ適宜ニ定メシム○十四年一月第十一號達ヲ以テ警視廳ヲ置クト共ニ該廳巡查ノ俸給ヲ定ム○十九年一月第十四號達ヲ以テ地方巡查ノ等級ヲ廢シ俸給ヲ定ム○十九年一月第十四號達ヲ以テ警視廳巡查ハ奉職年數ニ依リ月俸十五圓マテヲ給スルコトヲ得セシム○四年二月第十三號達ヲ以テ二十四年八月勅令第百六十九號ヲ以テ地方巡查月俸十五圓マテ給スルヲ得セシム○四十九號ヲ以テ巡查看守俸給令ヲ定ム

○勅令第百四十九號 明治二十四年八月十日

巡查看守俸給令

第一條 巡查看守ノ月俸ハ左ノ如シ

- 一級 十五圓
- 二級 十四圓
- 三級 十三圓
- 四級 十二圓

五級 十一圓

六級 十圓

七級 九圓

第二條 巡查看守ニ任命セララルル者ノ月俸ハ六級以下トス

判任官以上ノ官職ニ在リタル者及巡查又ハ看守ノ精勤證書ヲ有スル者ニシテ  
巡查看守ニ任命セララルルトキハ前項ヲ適用セス但シ前職ノ月俸ヲ超ユルコト  
ヲ得ス

第三條 巡查看守ニシテ五級以上ノ月俸ヲ受クル者ハ滿一年ヲ經過スルニアラ  
サレハ昇級スルコトヲ得ス但シ巡查部長看守部長ニ拔擢セララルル者ハ此ノ限  
ニアラス

第四條 刑事專務又ハ通辯其ノ他特別ノ技能ヲ有スル者ハ第二條第三條ヲ適用  
セス

第五條 教習中ノ巡查看守ノ月俸ハ六圓乃至八圓トス

第六條 月俸ハ新任昇級降級復職トモ發令ノ翌日ヨリ計算シ退職ノ月ハ日割ヲ  
以テ計算ス廢廳若ハ事務ノ伸縮ニ因リ免職シタルトキ又ハ休職死亡ノトキハ  
當月分ノ全額ヲ給ス休職當月復職スルトキハ其ノ月ノ俸給ハ更ニ支給セス

第七條 病氣ノ爲執務セサルコト六十日ヲ踰ユル者及私事ノ故障ニ依リ執務セ  
サルコト二十日ヲ踰ユル者ハ日割ヲ以テ月俸ノ半額ヲ減ス但シ公務ノ爲傷痍

ヲ受ケ若ハ病疾ニ罹リ又ハ服忌ヲ受クル者ハ此限ニアラス

附 則

第八條 本令ハ地方ノ狀況ニ依リ明治三十一年三月三十一日迄其ノ施行ヲ延期  
スルコトヲ得

第九條 明治二十三年勅令第二百二十八號中第四號明治二十四年勅令第六十九  
號及明治二十六年勅令第一百五號ハ本令施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

第十條 本令ハ北海道ニ適用セス

○内務省訓令第七五二號 明治二十四年九月四日

今般勅令第六十九號ヲ以テ巡查俸給令ヲ發布セラレ又當省訓令第二十一號ヲ  
以テ巡查採用規則相定候ニ付施行方左ノ通り心得ラルヘシ

右訓令ス

- 一 巡查俸給ハ地方ノ狀況ニ依リ高給ヲ與ヘサルモ巡查ノ生計ニ困難ナルコト  
ナク且ツ適當ノ人物ヲ得ルニ差支ナキニ於テハ可成二級俸以下ノ定員ヲ多  
クシカメテ俸給額ノ増嵩セサルコトヲ圖ルヘシ
- 一 巡查ハ滿一年ヲ經過スルノ後ニアラサレハ増給スルコトヲ得ス但巡查部長  
ニ拔擢スル者ハ直ニ一級俸ヲ給スルコトヲ得
- 一 巡查ハ法令繁密人智進歩ノ今日ニ於テハ特ニ其撰任ヲ慎マサル可ラス今其

撰任上注意スヘキ要點ヲ舉クレハ凡ソ左ノ如シ

- 一 爲人輕躁ナラス順良著實ニシテ能ク紀律ヲ守ル者タルヲ要ス
- 一 永ク警察ニ從事シ敢テ他ニ求ムルコトナキ決心アル者タルヲ要ス
- 一 從前ノ如ク僅カニ普通ノ讀書算筆ニ差支ナキノミヲ以テ足レリトセス法律規則ヲ相當ニ解讀シ及ヒ適用執行シ得ル能力ヲ有スル者タルヲ要ス
- 一 多數ノ巡查ニ悉ク前項ノ如キ人物ヲ得ヘカラサルハ言ヲ俟タスト雖モ力メテ標準ヲ茲ニ取リ撰任スルヲ要ス
- 一 巡查誓文ニ違背シタルトキハ巡查懲罰例ニ據リ嚴正ニ處分シ誓文ヲシテ虚式ニ流レシメサルヲ要ス
- 一 軍人ハ嚴肅ナル規律ニ服スルニ慣レ順良強耐ノ點ニ於テ巡查ニハ最モ適當スヘキヲ以テ陸軍現役滿期ノ下士兵卒ノ善良ナル者ハ力メテ採用スルヲ可トス

○山梨縣伺 明治二十六年二月二十日

巡查俸給ノ義ニ付伺

本縣警察部ニ於テハ從來雇置キ事務ニ從屬セシメ來リ候處明治二十六年ニ在リテハ縣會ニ於テ右雇員ヲ全廢致候就テハ該雇員中試験ニ合格ノモノハ巡查ニ採用シ引續キ内部事務ニ從事セシメ度見込ニ候處中ニハ九圓又ハ十圓俸ノ者モ有之右ハ巡查採用規則第八條ノ規定モ有之候得共今般ニ限リ特ニ現俸ノ儘採用致度此段稟請候也

○内務省指令 明治二十六年三月一日

巡查俸給ノ件閉屆ケ難シ

○神奈川縣問合 明治二十七年二月三日

客年十二月十九日訓第七七二號ヲ以テ雇員ニシテ特別技藝ヲ要シ御認可ヲ得タルモノヲ除クノ外一ヶ月俸給十二圓ヲ超過スルコトヲ許サレサル旨御訓令ノ次第モ有之候處從來横濱市内警察署ニ外國語通譯ノ爲メ月俸十二圓以上ノ雇員ヲ配置シ有之候處該通譯中英語ハ勿論支那語等一種特得ノ技藝ヲ有スルモノニシテ十二圓以上ノ俸給ヲ支給セサレハ其人ヲ得難キ事情御坐候ニ付テハ是等外國語通譯ノ如キモ特別ノ技藝ト見做シ御認可相成ルヘキ義ニ候哉御意見承知致度此段及御問合候也

○警保局長回答 明治二十七年二月二十一日

元來通譯ノ如キハ當然特別ノ技藝トハ難申モ開港場等ニ於テハ通譯ノ必要甚ク多ク隨テ其道ニ堪能ナル者ヲ要スル義ト存候ニ付止ムヲ得サル場合ニ限リ特別技藝ト見做シ採用相成不苦ト存候追テ御採用ノ節ハ豫メ當省ノ認可ヲ乞ハルヘキハ勿論ノ義ト存候

○兵庫縣伺 明治二十七年二月十五日

巡查採用ノ義ニ付伺

明治二十四年九月十三日御省訓令第二十一號巡查採用規則ニ依リ新ニ採用スル巡查ニシテ士官適任證書ヲ有スル現役滿期ノ陸軍下士官ハ規則第八條ニ據リ特ニ一級俸巡查ニ採用シ得ヘキハ明文モ有之候處茲ニ數年間警察ニ從事シ巡查ノ職務ニ關スル執行事務ハ勿論犯罪搜查其他内勤ニ屬スル雜務等何レモ熟達精勤ノ廉ヲ以テ巡查精勤證書ヲ受ケ遂ニ警部ニ登用セリ而シテ官ノ都合ニ依リ非職ヲ命セラレタルモノ其非職ヲ辭シ巡查ヲ志願スルトキハ規則第一條ニ依リ試驗ヲ要セス直ニ巡查ニ採用シ同則第八條ニ準シ特ニ一級俸ヲ支給致度相伺候也

○内務省指令 明治二十七年二月廿八日

特ニ一級俸ヲ給スル義ハ相成ラス

○富山香川兩縣知事伺要領

一 巡查部長ハ一級俸以上ノ者ヲ以テ充ツルノ規定ナルモ適任者ナキ場合ニ於テハ二級俸ノ者ニ部長ヲ命スルモ差支ナギヤ

○警保局長通牒

明治二十七年三月二日  
巡查部長任用ノ件ハ實際ノ必要ニ應シ適宜御取計相成可然依命通牒ス

○兵庫縣問合

明治廿八年十二月十六日

明治二十四年訓第七五二號内務大臣御訓令ヲ以テ巡查ハ滿一ケ年ヲ經過スルニ一ラサレハ昇級セシムルヲ得サル事ニ相成居リ候處廿七年勅令第八十八號ニ依リ非時休職ヲ命セラレタルモノ解職後復職シタルキハ其休職中ノ日數ハ在職年數ニ算入スト有之候ニ付休職中ノ日數モ還算シ滿一年ニ滿ツルモノハ昇級セシムルモ算支ナキ儀ニ候哉又ハ該勅令ノ在職年數トハ十五年公達第四十一號巡查看守救助例等ノ場合ニ於ケル勤績年數ト同意味ニシテ巡查ノ昇級ニ關スル滿一ケ年トハ現實職ヲ奉スルコト滿一ケ年タルヲ要シ休職中ノ日數ハ控除可致義ニ候哉御意見承知致度及御問合候也

○警保局長回答

明治廿九年一月十日

巡查進級年限ノ義ニ付本月十七日付警發第一八〇九號ヲ以テ云々御問合ノ趣了承右ハ後段御見込ノ通ト認候條經伺ノ上此段及回答候也

○大藏省令第十一號

明治二十五年十二月二十三日

文官俸給支給細則左ノ通り相定メ明治二十六年一月一日ヨリ施行ス

但明治二十三年當省令第十號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

文官俸給支給細則

第一條 高等文官及判任文官ノ俸給ハ各廳左ノ日制定日ニ於テ支給スルモノト

ス但休日ニ當ルトキハ順延トス

毎月二十一日

外務省及其所管經費ニ屬スル官廳  
大藏省及其所管經費ニ屬スル官廳  
内務省及其所管經費ニ屬スル官廳

毎月二十二日

陸軍省及其所管經費ニ屬スル官廳  
司法省及其所管經費ニ屬スル官廳  
海軍省及其所管經費ニ屬スル官廳

毎月二十三日

文部省及其所管經費ニ屬スル官廳  
農商務省及其所管經費ニ屬スル官廳  
逓信省及其所管經費ニ屬スル官廳

第二條 非職廢官退職及死亡ノ時ハ當月分ノ俸給全額ヲ其際支給スルモノトス

高等官官等俸給令第十七條ニ依リ殘務調理ヲ命セラレタル者其調理翌月以降ニ涉リ全月分ヲ支給スルモノハ第一條ノ支給日ニ依ル但最後ノ月ハ日割ヲ以テ調理了ノ日迄ヲ其際支給ス

第三條 轉任者ノ俸給ハ其發令ノ當日迄ヲ甲廳ノ負擔トシ翌日以降ノ分ハ乙廳ニ於テ之ヲ支給スルモノトス

第四條 他廳へ轉任シタルモノハ第一條ノ支給日ニ拘ラス日割計算ヲ以テ發令ノ當日迄ニ係ル俸給ヲ其際支給ス

第五條 他廳へ轉任ノ際俸給過渡アルトキハ前任廳ニ於テ其際之ヲ追徴スヘシ

第六條 俸給支給定日後他廳ヨリ轉任シ來リタルトキハ後任廳ニ於テ其月ノ殘日數ニ對スル俸給ヲ其際支給スルモノトス



第七條 高等官官等俸給令第十八條ニ依リ減給ノ者非職廢官退官退職及死亡ノ時ハ其減給ニ係ル當月分ノ全額ヲ支給スルモノトス

第八條 傷痍忌引若クハ特旨賜暇ノ場合ハ病氣若クハ私事故障ト連續スルモ減俸トナルヘキ關勤日數中ニ算入セス又病氣ト私事故障ト連續スル場合ニ於テハ之ヲ通算セス

第九條 俸給ヲ支給スルニ當リ計算上厘位未滿ノ端數ヲ生スルトキハ之ヲ切捨ルモノトス

日割計算ノ法ハ其月ノ現日數ニ依ルヘシ

○勅令第二十七號 明治二十四年三月二十八日

明治六年大藏省達第百六十一號及明治二十二年閣令第四號ハ本年三月三十一日限り廢止ス但宿直又ハ徹夜勤務使役ノ者ニハ適宜食料現品又代料ヲ給與シ又特別用ノ文具ハ官廳ニ備ヘテ使用セシムルコトヲ得

(參照)

明治六年大藏省達第百六十一號

辨當料改定ノ件

○勅令第百六十二號 明治二十四年七月二十七日

文官ニシテ豫備後備ノ軍籍ニアル者陸軍給與令第十八條ニ依リ俸給ヲ受クル間ハ文官俸給ノ支給ヲ停止ス但其額文官俸給ヨリ寡少ナルトキハ其不足額ハ奉職官廳ニ於テ文官俸給ヨリ之ヲ補給ス

○勅令第六十二號 明治二十三年三月十七日

試補及判任官見習並非職休職ノ官吏ニシテ一年志願兵トナル者ハ其儘服役スルコトヲ得但有給者ニハ俸給ヲ給セス試補及判任見習ニ在テハ服役時日ヲ實務練習ノ期限ニ算入セス

○內務省令第二十三號 明治十九年十月十六日

廳府縣 集治監 假留監

巡查看守俸給支給規則左ノ通相定ム

但來十一月一日ヨリ施行スヘシ

巡查看守俸給支給規則

第一條 巡查看守ノ月俸ハ毎月末日ヲ以テ支給ノ定日トス但休日ニ當ルトキハ繰上トス

第二條 (巡查俸給令ニ由リ消滅)

第三條 免職ノトキハ當月分ノ俸給日割ヲ以テ支給スヘシ

第四條 願濟休暇旅行ノ者及ヒ私事ノ故障(自己ノ病氣ヲ除ク)ニ由リ出署セサル  
モノ日數二十日後ハ日割ヲ以テ俸給ノ半額ヲ減スルモノトス

第五條 豫備及後備軍籍ニアル者召集ノ節其出發ノ日ヨリ歸署ノ前日迄ハ俸給  
ヲ支給セス

第六條 右ニ掲クルモノ、外ハ判任官俸給支給細則ニ依ル

○内務省達乙第九十三號 明治十年十月十五日

府 縣(東京府)

明治八年<sup>十二</sup> 當省乙第六十八號ヲ以テ相達置候警部巡查給與規則及ヒ十年<sup>二</sup>  
乙第十五號同年<sup>四</sup>乙第四十五號ヲ以テ相達候右規則追加増補ノ分共都テ相廢シ  
更ニ別冊ノ通り相定メ來ル十一月一日ヨリ施行候條此旨相達候事

(別冊)(消滅ニ屬シタル條項ハ之ヲ掲ケス)

警部巡查給與規則

巡查被服器具支給ノ事

第九條 巡查一年ノ被服並ニ器具ハ現品ヲ以テ給與スヘシ

但保存期限ノ儀ハ各府縣適宜相定ムヘシ

第十條 白草胴締手帳捕繩呼子笛棒提灯或ハ「ランブ」ハ保存期限ニ照シ支給スト

雖モ期ニ至リ猶ホ用ニ堪ユルモノハ用ニ堪ヘサルヲ待テ後ニ引替ユヘン

第十一條 胴締棒手繩呼子笛等保存期限ニ至ラスト雖モ職務上ニ關シ破損スル  
者ハ速ニ換與スヘシ

但本條物品ノ外現品支給ノ分破損スト雖モ輒ク換與スルコトヲ許サス然レモ  
職務ニ關シ事情已ムヲ得サル者ハ檢査ノ上換與スルコトアルヘシ

第十二條 被服帽靴等保存期限ヲ過ル分ハ之ヲ本人ニ付與スルヲ得ヘシ

但胴締手帳捕繩呼子笛棒提灯并帽服ノ徽章ハ此限ニアラス

警部巡查辨當料ノ事

第十六條 外勤警部巡查夜警ノ節辨當料一度金三錢五厘以内ヲ以テ適宜其給否  
ヲ定ムルコトヲ得

(參照)

○警保局長通牒 明治二十二年四月十二日

今般本省訓令第十五號ヲ以テ警部巡查給與規則第八條ヲ刪除セラレ候處右ハ巡查  
積金ヲ不可トセラレ、ノ主旨ニ無之該者ノ如キ索ヨリ薄給ノモノナレハ常ニ俸給  
ノ幾分ヲ積置ハ最モ良法ニ候得共官ノ規則ヲ以テ積立ヲ爲サシムルキハ彼是都合  
ノ廉モ不少故右ノ如ク訓令セラレタルモノニ有之就テハ向後積金ノ儀ハ警察官吏

ノ私約ニ屬セシメ其金員及保管ノ方法等適宜ニ御取計相成可然此段及御通牒候也  
追テ本文積金ノ儀私約ヲ以テ取扱フトキハ預金規則ノ範圍外ニ屬シ候ニ付是迄預  
金局へ預入レタル金額ハ此際總テ拂戻ヲ受ケタル上適宜保管セラレ可然存候此段  
申添候也

○三重縣伺 明治二十一年九月十四日

本縣警察ノ配置ハ警察署分署ヲ除クノ外別ニ村落貳百有餘箇所ニ巡查ヲ駐在セシ  
メ最寄村々ヲ區域シ受持ヲ定メ警邏ノ周密ヲ企圖セシ以來警務ノ便ヲ得ル少々ナ  
ラス故ニ警察署所在地等緊密ナル市街地ニ於テモ各町巡查ノ受持ヲ定メ其區域内  
ニ居住セシムレハ巡查ハ責任ヲ重シシ執行事務ヲ初メ諸般取締行届令一層便益ア  
ルヘキヲ以テ市街巡查ハ其受持區内ニ必ス居住セシムルニ致度就テハ相當宿料  
ヲ給與シ警察費ヨリ支辨致度此段相伺候也

○内務省指令 明治二十一年十月一日

伺ノ趣縣會可決ノ上ハ宿料給與シ苦シカラス

○長野縣伺 明治二十三年四月二十一日

本年貴省令第十號ヲ以テ交官俸給支給規則ヲ定メラレ判任官ノ俸給ハ毎月末日ニ  
支給之義ナル處各出張所派出所所在勤ノ俸給ハ同日マテニ本人手許へ到達ノ日割ヲ  
以仕拂命令ヲ發行スルモ差支ナキヤ

○大藏省指令 明治二十三年四月廿三日

伺ノ通

○佐賀縣伺 明治二十三年七月三十日

(前文略ス)

第一項 巡查看守俸給支給規則第六條右ニ掲クルモノ、外ハ判任官俸給支給規則

ニ依トアルハ交官俸給支給規則ニ據ルモノト心得可然ヤ

第二項 交官俸給支給規則中明文ナキモノハ(判任官俸給令)第八條ノ類(判任官々等俸給令)ニ推

例給與差支ナキヤ

第三項 前項果シテ俸給令ニ迄推例差支ナキモノトセハ死亡ノ節ハ俸給令第七條

ニ依リ月俸三ヶ月分ヲモ給與スルモノ、如シト雖モ巡查看守ハ給助例ノ施行ア

ルニ付該條ハ適用スルノ限ニ無之ヤ

第四項 本廳懸隔ノ官署へ増俸減俸等ノ辭令書ヲ送付スル時ハ發令ノ日付ト受書

ノ日付トハ三四日ノ違アルモ總テ發令ノ翌日ヨリ計算給與スト雖モ免職ノ時ハ

舊高等官俸給支給細則附則第二項ノ御主意ニ基キ辭令書到達ノ日迄ハ給與差支

ナキヤ

第五項 新任ノ者ハ高等官々等俸給令第二十三條ニ據レハ發令ノ翌日ヨリ給與ス

ルノ成規ナリト雖モ辭令書交付後職務ニ服セス辭職ノ者ハ勿論俸給支給ニ不及

ヤ

○内務書記官通知 明治二十三年八月十八日

巡查看守俸給支給方ノ義ニ付御伺出之處第一二三項御見込ノ通第四五項ハ渾テ免

職ノ日迄支給相成可然本件ハ別段指令不相成候間此段及御通知候也

追テ第四項ノ場合ニシテ辭令拜受ノ日マテ事務引繼調理中ニ準セラレ候モノハ高

等官俸給令附則第二十五條ニ據リ支給シ得ル義ニ付爲念申添候也

○山梨縣伺 明治二十四年七月十一日

本年勅令第二十七號ヲ以テ明治六年大藏省達第百六十一號及明治廿二年閣令第四

號廢止セラレ候處右ハ一般官廳ニ適用スヘキモノニシテ地方稅支辨ニ係ル吏員夜

業辨當料并文具料等モ其支給ヲ止ムヘキ義ニ候哉將夕警察監獄職員ノ如キハ執務ノ狀勢他ノ吏員ト異ナリ一般ノ吏員ト同例ニ依ラシメ難キ事情モ有之候ニ付地方稅支辨ニ屬スルモノニ就テハ寧ロ一般ニ別段ノ方法ヲ設ケ支給スルヲ得ル義ニ候哉至急何分ノ御指揮相成度此段相伺候也

○大藏兩省指令  
後段伺之通

○鹿兒島縣伺 明治二十四年五月二日

巡查携帶品中呼子笛ノ義ハ警部巡查給與規則第十條ニ依リ夫々給與致候得共駐在所ニ於テ同僚ノ救援ヲ求ムルニ由ナク且從來一回之使用ノ實例無之不必要ノ具ト認メラレ候條目下必要アリト認メ候場所ニ限リ給與シ當縣適宜ニ取計ヒ候様致度相伺候也

○內務省指令 明治二十四年五月九日  
開届ク

○長崎縣照會 明治二十七年八月二十二日

本年勅令第八十八號ニ依リ休職ヲ命シタル巡查ノ給與品ノ義ハ現ニ巡查ノ職務ヲ執行セサルカ故ニ休職ノ際總テ還納セシムル方當然カト存セラレ候處猶熟考スルニ本縣ノ如キハ給與品中肌着靴靴下ノ三品ハ代金支給ノモノニシテ此度ノ如キ非常召集ノ場合ニ於テ該保存殘期ニ係ル分ヲ一時納金セシムルハ既ニ本人出發ノ後ニ於テ實際頗ル困難ノ情況ニ有之候依テ右三品ニ限リ依然据置キ休職中ノ日數ヲ中斷シ保存期限ニ算入セサルコトニ取扱可然哉此度ノ休職巡查ハ獨リ本縣ノミナラスシテ經費ニモ關係候ニ付處分上區々ニ涉ラサル様本省ニ於テ一定ノ御詮議ヲ仰度又會計検査院ヘノ物品出納證明ニモ影響シ勞疑義ヲ生シ候ニ付併セテ御意

見承知致度此段及照會候也

○警保局長回答 明治二十七年十月十日

復職ノ時期確定セサルニモ拘ラス之カ給與品ヲ際限ナク保存セントスルトキハ其保管方ニモ差支ヲ生スルノ向モ可有之或ハ代金ヲ以テ給與セシモノ、如キハ召集ノ如キ非常急劇ノ場合ニハ其取扱上頗フル繁雜ヲ來スヘクニ付右等ニ關スル方法ハ貴官ノ御見込ヲ以テ適宜御取扱可相成尤貸與品ハ休職ノ際還納セシメラレ可然經伺ノ上此段及回答候也

○宮崎縣伺 明治二十六年一月二十七日

官吏職務上ニ關シ刑事被告人トナリシ場合俸給并旅費支給方ノ件伺

警察官吏等職務ヲ以テ行フタル現行犯逮捕訊問及其檢證處分等ニ關シ刑事ノ被告人トナリ裁判所ヘ出頭シタル片ニ於テ其俸給ハ假令判決ノ無罪若クハ免訴ニ出テタル場合ト雖モ都テ私事ノ故障トナシ出廷ノ爲メ任地出發ノ日ヨリ起算シ成規ニ依リ減給シ右出廷ニ要スル旅費モ亦一切支給セサル義ト心得可然哉此段相伺候也

○內務省指令 明治二十六年五月四日

右同時ニ內務書記官ヨリ各府縣知事ニ通牒セリ

○兵庫縣伺 明治二十六年六月二十四日

警察官吏刑事被告人トナリタルトキ俸給旅費給否ノ件伺

本年一月宮崎縣伺ニ對シ警察官吏其職務ヲ以テ行フタル現行犯逮捕訊問及檢證處分等ニ關シ刑事ノ被告人トナリ裁判所ヘ出頭シタルトキハ假令無罪若クハ免訴ト